寺川・北条遺跡発掘調査報告書

大東市埋蔵文化財調査報告第１集

1987

大東市教育委員会

寺川・北条遺跡発掘調査報告書

大東市埋蔵文化財調査報告第１集

１９８７

大東市教育委員会

序　　文

大東市域には50箇所を越える多数の遺跡が分布しますが、内容が判明したものはごく一部であります。しかし、西方にひろがる平野部には、河内地域を代表する弥生集落の中垣内遺跡、諸福遺跡、さらにルイス・フロイスの「日本史」で知られる三箇城跡等が、また東方によこたわる生駒山系には堂山古墳群、中世には河内国の北半分の拠点となった飯盛山城等、著名な遺跡が存在しています。

今回発掘調査を実施した寺川遺跡と北条遺跡は、生駒山麓部に立地した遺跡で、当初から古墳の存在が予測されました。しかし、調査の結果、古墳のみならず、古くは旧石器時代から中世まで存続した各時代の遺構・遺物が多く発見されました。こうした中でも特筆すべきは、古墳の検出はもちろんのこと、有舌尖頭器の出土や、弥生時代、奈良時代、中世に営まれた集落が判明したことです。

このように遺跡は私たちの祖先が残した貴重な足跡であり、現代につながる歴史を具体的に跡づけることができる内容豊かな財産であります。そして、現代に生きる私たちは、こうした祖先の足跡から多くのことを学びとり、さらに次代に引き継いで行く重要な役目を負っています。

大東市では1986年度においては、立会調査を含めて64件の発掘調査を実施しましたが、一方では遺跡の保存と開発の調和というきびしい現実の問題を提起していることも事実です。現在、大東市は市制30周年をむかえ、こうした問題に対し、市立歴史民俗資料館の開設をはじめとして、専門職員の採用にむけて積極的に取り組んでおります。

最後になりましたが、本調査にあたり御協力をいただいた地元の方々、関係諸機関等、また種々御指導をあおいだ大阪府教育委員会に厚くお礼を申しあげるとともに、今後なお一層の御協力、御指導をお願いする次第でございます。

大東市教育委員会
教育長　山　口　　環

例　　言

1．本書は、大東市教育委員会社会教育課が実施した、大東市寺川５丁目所在寺川遺跡と、北条６丁目所在北条遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、寺川遺跡については、大阪府教育委員会文化財保護課技師松岡良憲を担当者として、1986年４月５日に着手し、同年４月22日に終了した。また、北条遺跡については、同技師三宅正浩を担当者として、1986年９月26日着手し、同年11月30日に終了した。

3．調査および整理の実施にあたっては、石井裕己、植村章、川吉謙二、木村聖、小竹宏司、児林真一、駒井一行、鈴木景二、谷崎光子、長崎悟、中務優子、西谷珠美、野村香枝、林誠司、東口睦、東口靖子、深沢吉隆、真弓清、山口裕弘、山田武則、山村俊之、山本芳子、吉田すみ子諸氏の協力を得た。また府文化財愛護推進委員会の今村安和、橋本実、森田実蔵氏、大東市文化財保護推進会、大東市古文化同好会山本惣太郎氏ならびに四條畷高校川村和史の諸氏からも有益な助言を得た他、土地所有者の北村弘壽、市川温子、柳本不動産センターの諸氏からも多大な援助を得た。その他、大阪府教育委員会の堀江門也、玉井功、辻本武、福田英人の諸氏の指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。

4．本報告書の記述は、主に調査、整理を担当した大東市教育委員会技師黒田淳、大阪府教育委員会文化財保護課技師三宅正浩があたった他、大阪府教育委員会文化財保護課技師岸本道昭、(財)大阪文化財センター技師三好孝一、大東市教育委員会太田基久が一部担当した。本書の編集は、三宅正浩、李日娘がおこなった。

5．出土遺物の写真は、片山彰一氏によるものである。記してお礼申し上げる。

6．本書には、大東市域の出土遺物の検討として、「北条遺跡周辺出土・採集遺物」、「墓谷古墳群採集遺物」の関連資料の紹介の他、(財)大阪文化財センター三好孝一氏より「西諸福遺跡出土・採集遺物」、(財)和歌山文化財センター河内一浩氏より「大東市の埴輪」の玉稿をいただき、掲載することができた。厚く感謝する次第である。

7．調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は、大東市立歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望したい。

本 文 目 次

第１章　位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　寺川遺跡 …… 15

第１節　調査に至る経過 …… 15
第２節　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 15
第３節　層位と遺構 …… 16
第４節　遺　物 …… 20
第５節　まとめ …… 22

第３章　北条遺跡 …… 23

第１節　調査に至る経過 …… 23
第２節　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 23
第３節　層位と遺構 …… 25
第４節　遺　物 …… 31
第５節　まとめ …… 35

本文挿図目次

1　地形分類図 …… 1
2　宮谷古墳群採集有舌尖頭器 …… 2
3　河内潟の時代（大阪市立自然史博物館『河内平野の生い立ち』1972に年一部加筆） …… 2
4　鍋田川遺跡出土土器 …… 3
17　調査区位置図 …… 24
18　丘陵断面図 …… 25
19　層位図（調査区北壁Ａ－Ａ′　東壁Ｂ－Ｂ′　Ｃ－Ｃ′　Ｄ－Ｄ′） …26
20　弥生時代後期土坑１ …… 27
21　北条第１号墳周溝内土器出土状況 …… 28

5 鍋田川遺跡採集韓式系土器……4
6 堂山第1号墳主体部……5
7 灰塚浄水場遺跡・灰塚遺跡
・御領遺跡採集中世遺物……7
8 大東市の位置と遺跡分布図……13・14
9 寺川遺跡と周辺の遺跡……15
10 調査区位置図……16
11 断面図（A－A′）……16
12 土層断面模式図……16
13 断面図（B－B′）
及び遺構平面図……17
14 土器・瓦実測図……19
15 土器実測図……20
16 石器・石製品実測図……21
22 北条第2号墳周溝内土器出土状況……29
23 中世溝1断面図……29
24 竪穴住居1・土坑1出土土器……31
25 北条第1号墳出土土器……31
26 北条第1号墳・北条第2号墳
出土土器……32
27 包含層出土土器……33
28 石器……34
29 砥石……35
30 調査区遺構変遷図……36
31 市域における生駒西麓の
弥生時代遺跡……37
32 北条古墳群と周辺の遺跡……38
33 市域における主要古墳及び古墳群……39

本文表目次

1 大東市遺跡地名表……11・12
2 ピット一覧表……18

本文図版目次

1 遺跡周辺航空写真
2 寺川遺跡遺構（1）
3 寺川遺跡遺構（2）
4 寺川遺跡出土遺物（1）
5 寺川遺跡出土遺物（2）
6 北条遺跡の調査地点の位置と周辺の遺跡
7 北条遺跡遺構平面図
8 北条遺跡遺構（1）
9 北条遺跡遺構（2）
10 北条遺跡遺構（3）
11 北条遺跡出土遺物（1）
12 北条遺跡出土遺物（2）

付 載 目 次

1　北条遺跡周辺の出土・採集遺物……45

1　はじめに……45

2　北条小学校所蔵遺物……45

3　北条６丁目出土遺物……47

4　むすび……48

挿図

1　遺物採集地と周辺地形図……45　3　北条小学校所蔵石器……47

2　北条小学校所蔵土器……46　4　北条６丁目（宮谷古墳群）出土須恵器……48

図版

13　北条小学校所蔵遺物

2　墓谷古墳群採集遺物……50

1　はじめに……50

2　遺物……50

3　おわりに……53

挿図

1　墓谷古墳群と遺物採集地……50　4　墓谷古墳群採集陶棺……52

2　墓谷古墳群採集弥生土器……50　5　陶棺推定復原図……53

3　墓谷古墳群採集須恵器……51　6　鉄刀……53

図版

14　青少年教育センター所蔵遺物（墓谷古墳群）　15　大東市域出土遺物・下

3　西諸福遺跡出土・採集遺物……54

1　はじめに……54

2　調査の経緯……54

3　出土遺物……55

4　まとめ……61

挿図

1　西諸福遺跡の位置……54
2　遺物採集地点及びボーリング
　　データ概略図……55
3　西諸福遺跡採集土器－1……56
4　西諸福遺跡採集土器－2……58
5　西諸福遺跡採集石器－1……59
6　西諸福遺跡採集石器－2……60

写真

1　西諸福遺跡・鍋田川遺跡採集土器……57

表

1　土器観察表……62・63

4　大東市の埴輪……64
1　はじめに……64
2　資料館保管の埴輪……64
3　資料館保管以外の埴輪……67
4　大東市域出土の埴輪の歴史的位置づけ……69
5　まとめにかえて……71

挿図

1　大東市域の埴輪出土古墳及び遺跡……65
2　峯垣内古墳採集埴輪……68
3　六地蔵古墳出土埴輪……67
4　瓦堂遺跡採集埴輪……67
5　鍋田川遺跡採集埴輪……68
6　2次外面調整の変化……70
7　底部調整技法の伝播……71
8　継続ナデ技法及びタタキ底部
　　調整技法の埴輪分布……72
9　石見型盾の分布……73
10　大東市周辺前期古墳出土埴輪……74

表

1　大東市域出土埴輪一覧表……66
2　堂山第一号墳出土遺物一覧表……66

図版

15　大東市域出土遺物・上

第1章　位置と環境

第1節　地理的環境

大東市は大阪府の東部を占める河内平野のほぼ中央部に位置する。面積は約18,058km²で、現在（1987年）人口約125,000人を数える。市域の周囲は、東南端で一部が奈良県生駒市と境を接するほか、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市につながり、南は東大阪市に接している。

市域の地形を図1を基に概観すると、東には標高300～400m級の生駒山地が南北に走り、南から北に向かって高度を下げ、枚方丘陵へとつながり、山地と西方に広がる平野部の間には、この山塊より舌状に張り出した標高50～200mの尾根が緩やかな丘陵となって平野部へと続いている。山地と丘陵には、一部大阪層群がみられるが、主に領家花崗岩類より構成されている。平野部は標高5～50mの段丘と、標高5m以下の沖積低地からなる。このうち段丘には山地から流れ出す中小河川によって、山裾に小規模な谷口扇状地が形成されている。沖積低地は平野

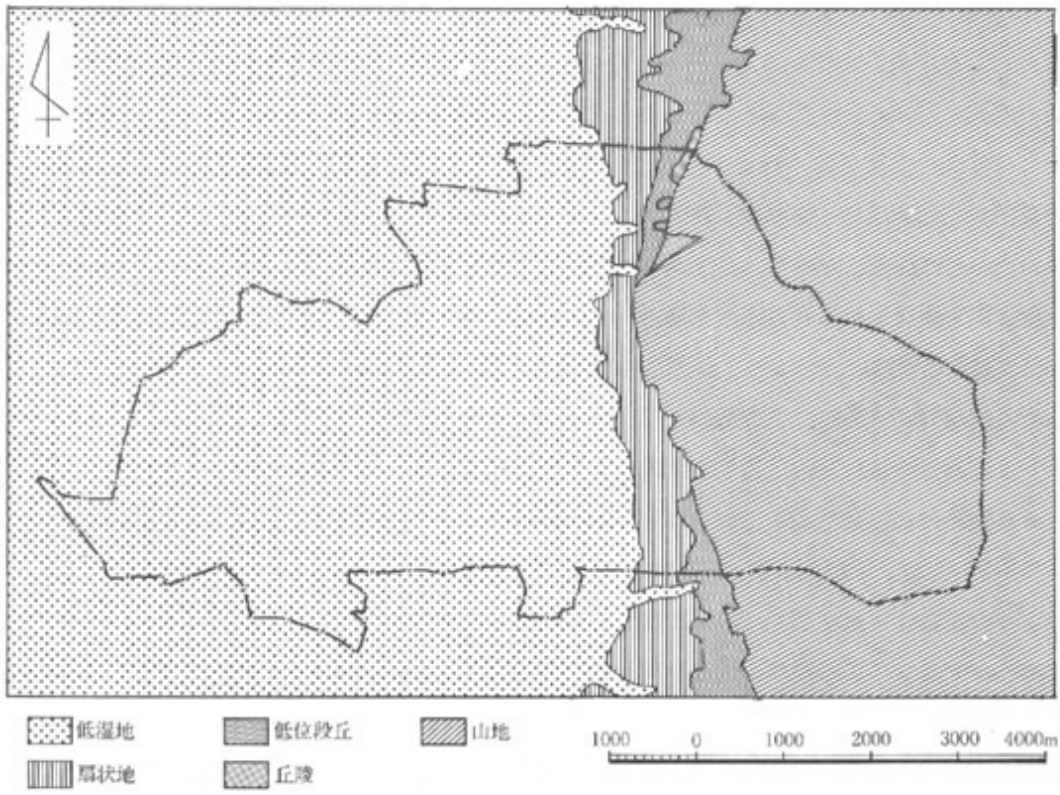


図1　地形分類図

部の大部分を占めている。現在、寺川浜、中垣内浜といった地名が示すように、かつては、河内湾、河内湖であったところであり、その名残りは、近世まで深野池としてのこっていた。ほとんどが軟弱な低湿地性の粘質土で覆われており、つい最近まで市内のあちらこちらに蓮根畑が見受けられた。

以下では、地形とのかかわりを通じて、旧石器時代から順次概観することとしたい。（黒田）

図2　宮谷古墳群採集
有舌尖頭器 Scale2/3

第2節　歴史的環境

1．旧石器～縄文時代

周辺の旧石器時代の遺跡の分布を大東市を中心にしてみてみると、東は生駒西麓の中位段丘、北は枚方台地から千里・高槻の丘陵地帯、南は和泉山脈に点在しており、その出土遺物（石器等）からみて、その多くは、後期旧石器時代（3万～1万年前）に遡ると思われる。今後の調査結果の集積が待たれる次第である。なお大東市においては、北条遺跡（23）、宮谷古墳群（19）で各1点づつ有舌尖頭器が出土しているところからみて（図2）、大東市の生駒、飯盛山西麓には、他市周辺の遺跡と同様に、後期旧石器時代から縄文時代前期の遺跡の存在を窺い知ることができる。ただ、北条小学校所蔵の石器を含めて（付載1参照）、出土地層の層序にともなって出土したものでないため生活の本拠地（住居地）を確認することは、現在のところできない。ただし、その後の発掘調査において、石器の出土が確認されており、今後の調査がまたれるところである。

縄文時代の遺跡については、前代と同様に明確ではない。北新町遺跡（45）では、自然流路より、晩期の土器片が出土しているが[1]、流れ込みによるものと考えられ、東方に広がる丘陵地に、この時期の遺跡の存在が確認される。また寺川遺跡（33）、中垣内遺跡（4）では石鏃が出土しているが[2]、遺構に伴ったものではなく、時期比定、遺跡の内容は明らかではないのが現状である。（太田・黒田）

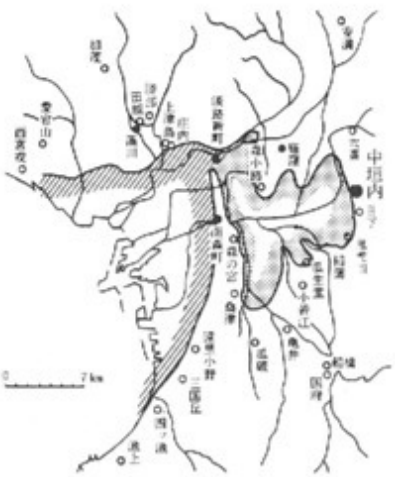


図3　河内潟の時代
（大阪市立自然史博物館『河内平野の生いたち』1972年に一部加筆）

2．弥生時代

弥生時代の初めごろには、現在の大阪湾は河内平野にまで入り込み、大東市を含む周辺地域に「河内潟」と呼ばれ

る広大な低湿地を形成していた（図３）。この低湿地の縁辺部に本格的な稲作農耕文化をもった人々が定住し始め、この中でも四條畷市雁屋遺跡は北河内に弥生文化をもたらせた最も早い時期の集落の可能性がある。出土土器には、頸部と体部上半部に明瞭な段を持つ壺が認められ、畿内地方においてもいちはやく稲作文化を取り入れた前期集落であったことが窺い知れる[3]。雁屋遺跡にやや遅れて、中垣内遺跡（４）にも集落が成立する。当遺跡は、1961年６月関西電力株式会社東大阪変電所の整地工事に伴い発見され、同年７月26日より８月10日にかけて発掘調査が実施された。その結果、古堤街道を挟んだ南北双方の調査区より遺物が出土し、遺構としては南地区より一辺2.5m、深さ0.5mの方形の小竪穴住居址とされるものが多量の前期の遺物と伴に検出され、北地区では杭列も検出されている[4]。また、南地区より西方に向かった大阪外環状線隣接地で行われた試掘調査においても前期の包含層が確認されている[5]。出土土器の一部については、『弥生土器集成』本編１に実測図が取り上げられ、また、東大阪変電所管理棟内には、現在でも土器、石器、木製品等、多くの遺物が保管されている。それらは、前期でも新段階に属する遺物が多数を占め、雁屋遺跡に比べ新しい様相を持つようである。これ以外にも丘陵上の堂山古墳群（28）で前期の土器片が出土している[6]。一方、低湿地部の水道局浄水場遺跡（35）、灰塚遺跡（37）、北新町遺跡（45）、寺川３丁目では、流路内より流されてきたと考えられる土器片が出土しており、近接する大阪市茨田安田遺跡でも[7]、同様の状況で遺物が出土している。

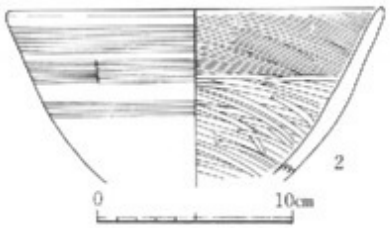


図４　鍋田川遺跡出土土器

中期になると遺跡数は著しく増加し、集落の分布も低湿地から山腹へと広がってくる。中期初頭の集落として、低湿地に立地する西諸福遺跡（34）、鍋田川遺跡（６）が存在する。前者は、比較的まとまった資料が保管されており、その立地とともに、集落様相に注目する必要があろう（付載３参照）。後者では、直線文を施すII様式の鉢が採集されている[8]（図４）。中期中葉になると、前期から引き続き中垣内遺跡、堂山古墳群[9]、より遺物が出土している。特に中垣内遺跡出土の台付鉢、広口壺、水差し形土器はほぼ完形であり、それらの中には焼成後、底部に穿孔を持ついわゆる供献土器が含まれており、付近に墓域あるいは祭祀遺構の存在を示唆する重要な資料である[10]。このような遺物に対比できるものとして中垣内遺跡より北方に約3.5Km離れた雁屋遺跡の方形周溝墓出土土器があげられる[11]。両遺跡とも前期より後期まで継続して営まれた北河内における中心的な集落であったと考えられる。中期後半には、丘陵頂の野崎遺跡（16）より台付鉢脚部、宮谷古墳群（19）内より壺が出土しており、この時期に入って新たに集落が営まれるようになる。この他、詳細は不明であるが、低地部の新田遺跡では精巧なサヌカイト製打製石剣が単独で出土し、国見高地性遺跡（２）より高杯、大将軍古墳（20）付近より器台、龍間遺跡

（9）より土器、サヌカイト製石小刀、龍間ハンサカ遺跡（8）よりサヌカイト製石小刀、磨製石剣、若宮遺跡（1）より磨製石剣、寺川遺跡（33）、水道局浄水場遺跡、灰塚遺跡、福蓮寺遺跡（10）、北新町遺跡から土器が出土している。これらの遺物は、確実な遺構に伴ったものではなく、遺跡の内容などを明らかにするには不充分であり、今後の調査、研究の進展に委ねるところが大きい。

後期になると野崎遺跡、寺川遺跡、国見高地性遺跡、そして、先述した中垣内遺跡から土器片、鍋田川遺跡より甕、墓谷古墳群（49）内より壺（付載2参照）、若宮遺跡より壺・甕が出土し、遺構に伴った形で検出されたものに、堂山古墳群内の大溝出土土器[12]、北条遺跡（23）の土坑－1より手焙形土器、竪穴住居址－1出土土器等があげられる（図24－61）[13]。このうち堂山古墳群内の大溝は、丘陵上に穿たれた幅3m、深さ0.7mを測る大規模なものであり、高地性集落に伴う環境の可能性が強い。

このように大東市域の弥生時代を概観してみると、弥生文化をこの地にもたらせた集団が他の地域に先がけて山麓部に向って分村しはじめたことが窺える。丘陵上の堂山遺跡では前期の段階ですでにこの傾向がみられ、中期になるとこの傾向はさらに顕著となり、低湿地にも集落が営まれるようになる。西諸福遺跡がその代表で、当時の河内潟全体からみてもその立地は特異である。後期になるとこの様相は一段落し丘陵部に集落が点在しはじめ、周辺の遺跡と同様の動向を示し始める。

以上のような状況を生み出した条件として、集落を長期間存続させ得る土地が確保しにくかったやことや、生駒山脈を峠越えすることが、比較的たやすかったであろうことなどの地理的要因が深くかかわっていたことが考えられよう。（三好）

3．古墳時代

古墳時代集落の存在を明確に示す住居遺構が検出されているのは扇状地に立地した北新町遺跡（45）、中垣内遺跡（4）である。前者では中期に属する4棟の掘建柱建物の他に、河川に伴う前期の堰[14]が検出されている。後者では現地表下4.3mの地点から前期の竪穴住居4軒、掘建柱建物3棟以上、土坑、溝等が検出されている。それに伴って多量の土器や小型素文鏡、管玉、直弧文木彫木製品等の遺物が出土しており、集落の中でもその地が祭祀と関わった場所にあたることが推測されている[15]。また遺構等の内容は明らかではないが、弥生時代中・後期から続く鍋田川遺跡（6）では完形品を含む多量の土師器の他、須恵器、韓式系土器（図5－3）、滑石製有孔円板が出土している[16]。その他、断片的ではあるが、寺川遺跡（33）、

図5　鍋田川遺跡採集韓式系土器

水道局浄水場遺跡（37）では須恵器、土師器等が堂山下遺跡（27）では韓式系土器が、それぞれ採集されており、集落等の存在が予測される。北新町遺跡（45）、中垣内遺跡（４）でみられる扇状地を中心とした集落の立地は、基本的には弥生時代との大きな相異は認められないようである。

次に古墳について述べることとする。今のところ発掘調査が実施されたのは堂山古墳群（28）、北条古墳群（23）、宮谷古墳群（19）の極わずかであり、すでに失われたものが大半を占める。こうした現状で断定はできないが、前期に属するものは知見されていない。中期に入ると標高約100mの尾根上に径25mを測る円墳の堂山第１号墳が造営される。この古墳は形象埴輪を有し、外部施設として周囲に円筒埴輪を巡らしている。さらに木棺直葬の主体部に伴った副棺には、三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鏃等をはじめとする多量の鉄製武器・武具類をおさめており、首長墓的様相を完備した古墳といえる[17]。堂山第１号墳に続くものとしては、その北方約１km離れた尾根上に立地する北条第１・２号墳が５世紀末～６世紀初頭の時期に位置づけることができる。それらはすでに墳丘が失われ、内部主体・副葬品の詳細は明らかではないが、木棺直葬と推定され、残された周溝から径約10mを測る円墳が復原できる[18]。更に時期は６世紀末と下降するが、北条第１号墳に北接して径約15mを測る円墳の第３号墳が位置し[19]、こうした小型の円墳で構成された５世紀後半を初現とする北条古墳群の存在が浮かび上がってくる。また、北条古墳群と谷を一つ隔てた北側尾根上には宮谷古墳（19）が位置する。この古墳は多量の形象埴輪を有した６世紀前半～中頃の径約10mの円墳で、それに重なるようにして６世紀後半に入って新たに横穴式石室が築造されている[20]。

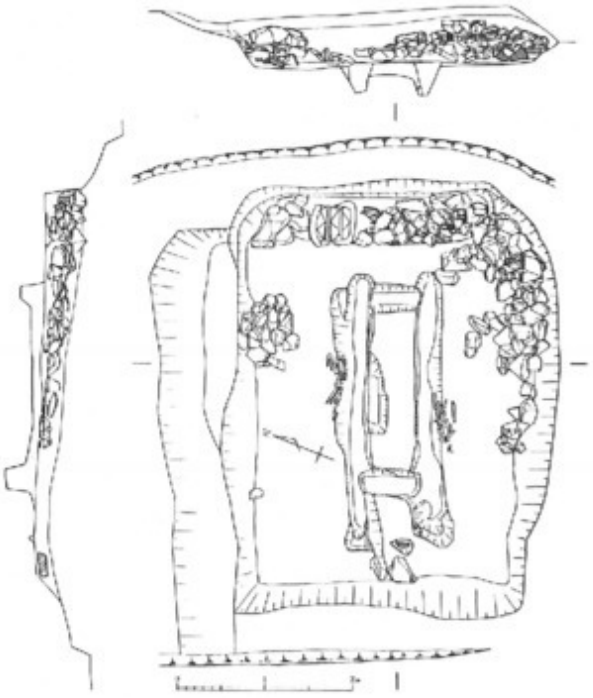


図６　堂山第１号墳主体部
（「堂山古墳群発掘調査概要」1973. 3　大阪府教育委員会より転載）

また、円筒埴輪が10数本出土した六地蔵古墳（29）[21]、中期に遡る円筒埴輪が採集された峯垣内古墳（12）、堂山第１号墳より遡る５世紀前半の円筒埴輪が採集された瓦堂寺院跡（14）が特に注目される[22]。その他、採集遺物や古墳の存在が伝えられているものとしてヤタ山古墳（15）、福蓮寺古墳（17）、大将軍古墳（20）、大谷神社古墳（32）、七ツ廻り古墳（３）等があげられ、消滅した古墳が多数存在することが推測される。

後期に入って生駒山地から西方へ派生した尾根上一帯には、北から6世紀後半～7世紀前半に営まれた墓谷古墳群（49）、宮谷古墳群（19）、北条古墳群（23）、堂山古墳群（28）、寺川古墳群（31）、大谷古墳群（46）等の群集墳の存在が明らかにされている[23]。それらの中で発掘調査が実施された堂山古墳群（第2～8号墳）、北条古墳群（第1～3号墳）を除いて大半は消滅しており、採集遺物、石室の石材の残骸等からそれらの存在がかろうじて窺われる現状である。

以上に概観したように、多数の消滅古墳の存在が考えられ、そうした古墳の復原が必要と思われるが、ここでは現状で明らかにされた古墳・古墳群を中心としてその特徴をおおまかにまとめてみることとしたい。まず前期古墳が認められないことがあげられる。そして中期に入っても前方後円墳が認められず、5世紀中葉になってはじめて径25mを測る円墳の堂山第1号墳が出現する。こうした状況にあって周辺地域に目を移すと、前期には堂山第1号墳からみて北方約3.5km離れた四條畷市岡山の独立丘に全長90mの前方後円墳である忍ヶ岡古墳[24]が、また中期には忍ヶ岡古墳の南方約1kmに近接して、前方後円墳の墓の堂古墳が造営されている[25]。一方、堂山第1号墳より南に目をやれば、3km離れて東大阪市西石切町に径20mを測る円墳の塚山古墳が存在し[26]、後期初頭には全長30mを測る前方後円墳の芝山古墳等が造営されている[27]。こうした中・後期古墳と比べ、堂山第1号墳には今のところ前後につながる明確な首長墓が認められない。ただ、豊富な鉄製武器・武具と埋葬施設に伴う初期須恵器等の副葬品に加えて、その地が河内湖を望下し、南北につながる交通の要衝を占めたことを考え合わせれば、いわゆる畿内政権による朝鮮半島への軍事行動を通じて何らかの軍事的地位を得た被葬者像が想定できるのではないだろうか。

次に群集墳については大規模な群集墳は認められないが、堂山第1号墳よりやや時期が遅れて、5世紀末葉を初現とした比較的早い時期に形成される北条古墳群の存在がとりわけ注目される。

また、6世紀後半になって出現する墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、堂山古墳群、寺川古墳群、大谷古墳群等の後期群集墳については、谷を介在したそれらの分布状況からすると今のところこうした群集墳の造営時期にみあう集落は明らかではない。しかし、生駒山地に沿ってみられる大小の谷の扇状地に営まれた集落の存在が予測されるところである。（黒田・三宅）

4．奈良・平安時代

奈良時代に入って、遺構が検出されたのは寺川遺跡（33）[28]、堂山古墳群（28）である[29]。それぞれ掘建柱建物の柱穴が一部確認されただけで、現状ではそうした掘建柱建物が構成する集落の内容、性格は明らかにしがたいが、それらが集落の形成に適した扇状地ではなく、あえて丘陵斜面や尾根上に立地したことに注目したい。また、同じく丘陵斜面に存在する北条遺跡（23）、

宮谷古墳（19）において、遺構は検出されなかったが土師器・須恵器が多く出土しており、集落等の存在が考えられる[30]。前代に集落が営まれた北新町遺跡（45）では足跡、水田、河川に伴う堰[31]、中垣内遺跡では水田等が検出されており[32]、この時期に入って土地利用に大きな変化が生じたことが窺われる。

他に遺跡の内容は必ずしも明確ではないが、古くから奈良時代前期の瓦が採集され寺院の存在が推定されている瓦堂寺院跡（14）や、奈良時代の須恵器が採集された若宮遺跡（1）が認められる。

墓制に関していえば、墓谷古墳群（49）などにみられる後期群集墳の造営は7世紀前半頃には終焉を迎え、この時期に入って火葬墓が営まれるようになる。北条第3号墳が築造された同一丘陵では蔵骨器として奈良時代末から平安時代初頭頃の土師器短頸壺を使用した火葬墓が検出されている[33]。また、立地条件は、大きく異なるが、南へ約2km離れた標高約200mの山上に位置する太鼓山遺跡（7）では蔵骨器として使用された白瓷（しらし）製の短頸壺と須恵器の壺が採集されている[34]。（黒田）

5．中・近世

この地域の中世を特徴づけるものとしては、東方において生駒山麓部を南北に走る東高野街道の存在と、西方において深野池（ふこうのいけ）の水上交通の出口に位置するという、水陸両交通の拠点を擁した地域であったことがあげられよう。今のところ、文献等からの考察とは別に、こうしたことについて具体的に知ることのできる発掘調査で得られた資料は乏しい。しかし、市域において中世遺物が散布する地域は広範囲に存在する。生駒山麓の丘陵やそれに続く扇状地において寺川遺跡（33）、堂山古墳群（28）、瓦堂寺院跡（14）、飯盛山城（41）、野崎城跡（44）が、

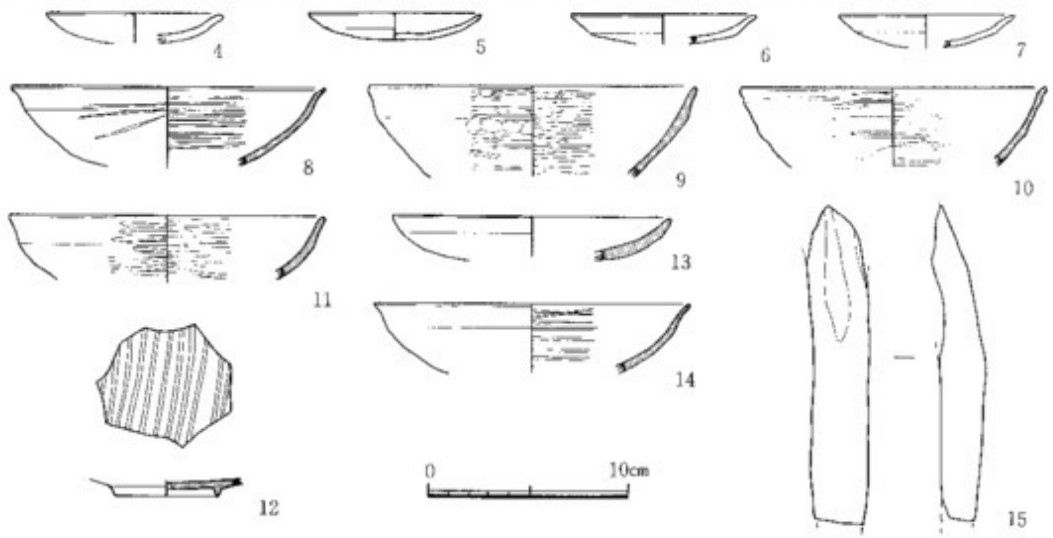


図7　灰塚浄水場遺跡（4～7．土師器　8．瓦器）・灰塚遺跡（9～12．瓦器）
御領遺跡（13．土師器　14・15．瓦器）採集中世遺物

方低湿地部の自然堤防等の微高地では、水道局浄水場遺跡（37）、灰塚遺跡（35）、灰塚堂田遺跡（36）、御領遺跡（50）等多数あげることができる。

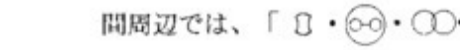
遺跡は集落・墓・城・寺院等の種類は別にして、中世を決定づける瓦器、土師器小皿等の出土例からすると、13～14世紀の時期が主流を占めるようであり、出土地は飛躍的に増加するに至っており、当時の「開発」の進展の一端を窺うことができるようである。これらの中で発掘調査が実施され、遺構等が検出されたのは寺川遺跡[35]、堂山古墳群[37]、北新町遺跡[36]、瓦堂寺院跡[39]等である。特に扇状地の先端に立地した北新町遺跡では、13世紀前半の掘建柱建物３棟、井戸５基、さらに水田、畑等も検出されており、当時の農村集落の景観を偲ぶことができる。次に、生駒山麓の丘陵部に目をやれば、今回調査を実施した寺川遺跡において、断片的であるが、掘建柱建物が、また北条遺跡においても溝などが検出されている。それらは遺構の性格からすると単に、古墳・横穴式石室を再利用して埋葬や祭祀等を行なったものでなく、集落の存在が想定されるところである。堂山の丘陵西側に位置した瓦堂寺院跡は奈良時代前期の創建が推定されているが、中世瓦も採集されており、また中世に属する溝を検出している。奈良時代にはじまり中世に存続する寺院跡としての変遷過程とともに、周辺に集落とのかかわり等が予測される注目すべき遺跡である。他に、瓦器椀、土師器皿、瓦器羽釜の採集された遺跡に御領遺跡（図７－13～15）や、工事中に多量の瓦器、土師器皿が出土した灰塚遺跡（図７－９～12）、水道局浄水場遺跡（図７－４～８）がある。それらは文献史料等からも集落とともに、いわゆる中世寺院の建立が推定されており、今後遺跡範囲の拡大が予測される。

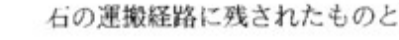
一方、こうした遺跡と時期的に符合する石造文化財としては、野崎慈眼寺裏山に永仁二年（1294年）造立銘のある九層の石塔が認められる[40]。

次に、時代は少し下降するが、交通の要衝にあって河内国北半分の拠点となった飯盛山城とその支城の野崎城等の山城や、宣教師ルイス・フロイスの「日本史」で名高い深野池の島に構えられた三箇城が存在する。飯盛山城は、生駒山系の一支脈をなす標高約316ｍの飯盛山に曲輪・堀等を広大な範囲に残している[41]。三箇城は1986年度発掘調査が実施されたが、今のところ明確に城跡と関連づけられる遺構・遺物は検出されなかった。規模、構造等については後日に待たねばならない「幻の城」である。いずれも築城時期は明確ではないが、古くは南北朝から始まり、安土桃山時代には廃城となるようである。

近世には、内容の判明する遺跡は少ない。しかし、注目すべき遺跡として、大坂城築城に伴い石垣用石採石場が、生駒山中の龍間に残されている。刻印石、矢穴石、割石、調整石等は、龍間から国見山山麓にかけて広範囲に分布し、なかでも石切場跡遺跡（43）、国見高地性遺跡（２）が周知されている。

これらの石切場は、元和六年（1620年）より始まる大坂城築城に伴うものである。同じよう

なものとして香川県小豆島、岡山県牛窓町、兵庫県六甲山系、京都府加茂町等が著名で、こうした各地に点在する石切場跡からも、多くの刻印石などが確認されている。当市域における龍間周辺では、「  」等多種類の刻印が発見されており、また国見高地性遺跡内の国見山山頂付近でも「」が確認されている[15]。なお、龍間では、近世以降昭和初期まで採石を行っていたことが知られている。

一方、大東市中垣内１丁目に大阪城残石（のこりいし）（47）と呼ばれる巨石が存在するが、それは恐らく石の運搬経路に残されたものと思われる。「  」といった刻印がなされ、これら符号刻印の他にも判読不能の文字刻印等も確認されている[42]。また、先述した石切場跡遺跡では、一部で発掘調査が実施されている。今後、刻印、矢穴の種類、石の運搬方法と経路、さらに石工集団の動向等について知る上で、非常に重要な遺跡と考えられるのである。

（深沢・三宅）

註

（１） 田代克己・辻本武　『大東市北新町遺跡　第１次発掘調査概要報告書』　大東市北新町遺跡調査会（1986）。

（２） 関西電力東大阪変電所内で出土した。

（３） 野島稔　「雁屋遺跡発掘調査概要　１」　四條畷市教育委員会（1984）　詳細は野島稔氏の教示による。　大阪府教育委員会　「雁屋遺跡　四條畷市雁屋北町所在　現地説明会資料」（1986・８・30）。

（４） 東宏　「三、弥生時代」『大東市史』　大東市教育委員会（1973）。

（５） 1959年７月～８月にかけて実施された関西電力東大阪変電所建設工事に伴う調査

（６） 田代克己・瀬川健　『堂山古墳群発掘調査概要』　大阪府教育委員会（1973）。

（７） 玉井功　『炭田安田遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会（1975）。

（８） 東宏氏御教示による。

（９） 註（６）に同じ。

（10） 註（２）、（４）に同じ。

（11） 註（３）に同じ。

（12） 註（６）に同じ。

（13） 本書第３章北条遺跡参照。

（14） 註（１）に同じ。

（15） 大阪府教育委員会技師松岡良憲氏の教示による。

（16） 『大東市史』（1973）には縄文時代早期の押型文として紹介されているが、韓式系土器である。

（17） 註（６）に同じ。

（18） 註（13）に同じ。

(19) 大東市教育委員会　『北条遺跡II』　現地説明会資料（1987・6・21）。

(20) 1987年度の大東市教育委員会の発掘調査で検出。

(21) 東宏　「第一章　原始時代の大東市」『大東市史』　大東市教育委員会（1973）。

(22) 本書付載1参照。

(23) 墓谷古墳群では須恵器の他、亀甲形陶棺、鉄刀等（本書付載2参照）が、宮谷古墳群では土師器、須恵器、鉄鉾等が比較的まとまって採集、保管されている。堂山古墳群については註（6）参照。寺川古墳群・大谷古墳群については土師器、須恵器等の出土が伝えられている。

(24) 四條畷市教育委員会「忍ヶ岡古墳」（1974）。

(25) 『四條畷市史』第1巻（1972）。

(26) 藤井直正・都出比呂志『原始・古代の牧岡』（1966）　久貝健「高安地域の首長系譜の動向」『河内太平寺古墳群』（1979）。

(27) 註26に同じ。

(28) 本書第2章参照。

(29) 註（6）に同じ。

(30) 本書第3章参照。

(31) 註（1）に同じ。

(32) 註（15）に同じ。

(33) 1987年度大東市教育委員会の北条遺跡の発掘調査による。

(34) 大東市立歴史民俗資料館所蔵。

(35) 本書第2章参照。

(36) 註（16）に同じ。

(37) 本書第3章参照。

(38) 辻本武氏より御教示を頂いた。
大東市北新町遺跡調査会　『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』（1986）。

(39) 1986年度調査を実施した。溝を検出し、中世土師器皿が出土した。

(40) 浄謙俊文　「五古代の寺社」『大東市史』（1973）。
浄謙俊文　「土豪たちの台頭」『大東市史』（1973）。

(41) 浄謙俊文　「三好長慶と飯盛山城」『大東市史』（1973）。

(42) 大東市教育委員会　1987年度の分布調査により発見。

(43) 大阪府文化財愛護推進委員　今村安和氏の御教示による。

表1　大東市遺跡地名表

遺跡番号	名称	立地	概要
1	若宮遺跡	丘陵中腹	磨製石剣（最明池で採集）、弥生時代後期土器、土錘。
2	国見高地性遺跡	山中	弥生時代中期・後期土器（壺・高杯）、○印の刻印石、矢穴石が残る。
3	七ツ廻り古墳	丘陵	石棺1を発見したと伝えられる。
4	中垣内遺跡	扇状地	弥生前期小竪穴住居址、杭列、古墳時代前期竪穴住居址、掘立柱建物、土坑、溝、旧石器、弥生前期・中期・後期土器、布留式土器、獣骨、古墳時代土師器、須恵器、弓箭状鹿角製品、磨製石斧、打製石鏃、木製鋤、石庖丁、小型素文鏡、管玉、直弧文木製品が出土。
5	元粉遺跡	扇状地	「壺形土器」等が完形で出土したと伝えられている。
6	鍋田川遺跡	扇状地	弥生中期土器、古墳時代土師器（壺、高杯、杯、鼈（かまど）、韓式系土器、滑石製有孔円板）、獣骨、古墳時代須恵器、埴輪が出土。
7	太鼓山遺跡	山頂	平安時代骨壺4、人骨、釘、簪（かんざし）
8	竜間ハンサカ遺跡	山中	磨製石剣1、打製石小刀1が出土。
9	龍間遺跡	山腹	石小刀、土器が出土。
10	福蓮寺遺跡	台地	弥生時代中期土器。
11	メノコ遺跡	平地	古墳時代土師器・須恵器、埴輪、石鏃。
12	峯垣内遺跡	台地	須恵器、子持高杯が出土したと伝えられる。円筒埴輪（本書符載4参照）を採集。
13	市水道寺川配水場古墳	台地	円筒埴輪を採集。
14	瓦堂寺院跡	平地	奈良時代前期瓦、中世瓦を採集。中世土師器小皿出土。
15	ヤタ山古墳	山頂	方形状の台地有り、須恵器、中世土師器皿を採集。
16	野崎遺跡	丘陵頂	弥生時代後期壺棺（幼児骨残存）、他に弥生時代土器・高杯等出土。
17	福蓮寺古墳	丘陵	消滅。
18	北条西遺跡	丘陵	旧石器、古墳時代土師器・須恵器、中世土師器。
19	宮谷古墳群	台地山斜面	有舌尖頭器、古墳時代土師器・須恵器、鉄鉾、横穴式石室の石材が残る。他に初期須恵器大甕（本書付載1参照）、丘陵斜面より円筒埴輪、形象埴輪、瓦器、中世土師器が出土（1987年度の調査）。
20	大将軍古墳	丘陵斜面	弥生時代中期土器、古墳時代土師器、埴輪片。
21	北条古墳	丘陵腹	古墳時代須恵器、提瓶、坩、高杯、消滅。
22	北条南古墳	台地	古墳時代土師器・須恵器、石材、古墳消滅。
23	北条遺跡	丘陵腹	縄文？　有舌尖頭器、瓦器椀、中世土師器。古墳時代・奈良時代土師器・須恵器（本書参照）。
24	城の越上の段古墳	台地	石棺3を発見したと伝えられるが概要は不明。消滅。
25	城の越古墳	台地	円筒埴輪片。
26	堂山上遺跡	台地	押型文（縄文時代）が出土。

遺跡番号	名　称	立　地	概　要
27	堂山下遺跡	台　地	仿製鏡の出土が伝えられる。概要は不明。
28	堂山古墳群	台　地	第1号墳　木棺直葬、土師器、須恵器、勾玉、短甲、刀剣、鉄鏃（鉄鏃）、鋤、鉋、円筒埴輪、形象埴輪。 第2号墳～第8号墳　円墳、横穴式石室、第3号墳で須恵質四注式家形陶棺、第4号墳にT字形の石室。弥生時代後期満、弥生時代前期・中期土器、打製石鏃、大型石庖丁、瓦器、中世土師器皿、「堂山古墳群発掘調査概要」（1973）
29	六地蔵古墳	丘　陵	円筒埴輪10数本が樹立（本書付載4参照）。
30	十林寺古墳	丘陵腹	石棺の発見が伝えられる。
31	寺川古墳群	丘陵腹	石棺の発見が伝えられる。円筒埴輪、古墳時代土師器・須恵器。
32	大谷神社古墳	丘　陵	勾玉（明治年間　京大）。
33	寺川古墳	台　地	奈良時代・中世掘立柱建物、縄文・弥生時代土器、古墳・奈良時代土師器・須恵器・瓦器、中世土師器皿（本書参照）。
34	西諸福遺跡	低湿地	弥生時代中期土器、石器、木器（骨）、骨角器（本書付載8参照）。
35	灰塚遺跡	平　地	須恵器、瓦器、中世土師器皿。
36	灰塚堂田遺跡	平　地	須恵器、瓦器、中世土師器皿。
37	水道局浄水場遺跡	平　地	弥生時代土器、古墳・奈良時代土師器・須恵器、瓦器、中世土師器皿。
38	御供田遺跡		須恵器。
39	二箇遺跡	平　地	須恵器。
40	氷野遺跡	平　地	土師器。
41	飯盛山城跡	山　中	曲輪、堀等が明確に残る。
42	北条東古墳群	山　中	
43	石切場跡	山　中	「[illegible]・[illegible]・[illegible]・△」等の刻印石、矢穴石、割石、調整石が残る。
44	野崎城跡	丘　陵	曲輪が残る。
45	北新町遺跡	扇状地	弥生時代後期～古墳時代前期の河川、奈良時代の水田・河川、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・鋤溝、縄文土器、弥生前期・中期、庄内式、布留式。
46	大谷古墳群	丘　陵	瓦器、中国製陶磁器、奈良～鎌倉時代土師器、奈良時代土師器人面墨書土器・墨書土器、『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986 大東市北新町遺跡調査会。古墳時代土師器・須恵器。
47	大阪城残石	山　中	刻印石・矢穴石が残る。
48	新田遺跡	平　地	石槍。
49	墓谷古墳群	丘　陵	弥生時代後期土器、古墳時代土師器・須恵器、土師質亀甲形陶棺、鉄刀（本書付載2参照）。
50	御領遺跡	平　地	弥生時代中期土器、瓦器、古墳時代須恵器、中世土師器皿。

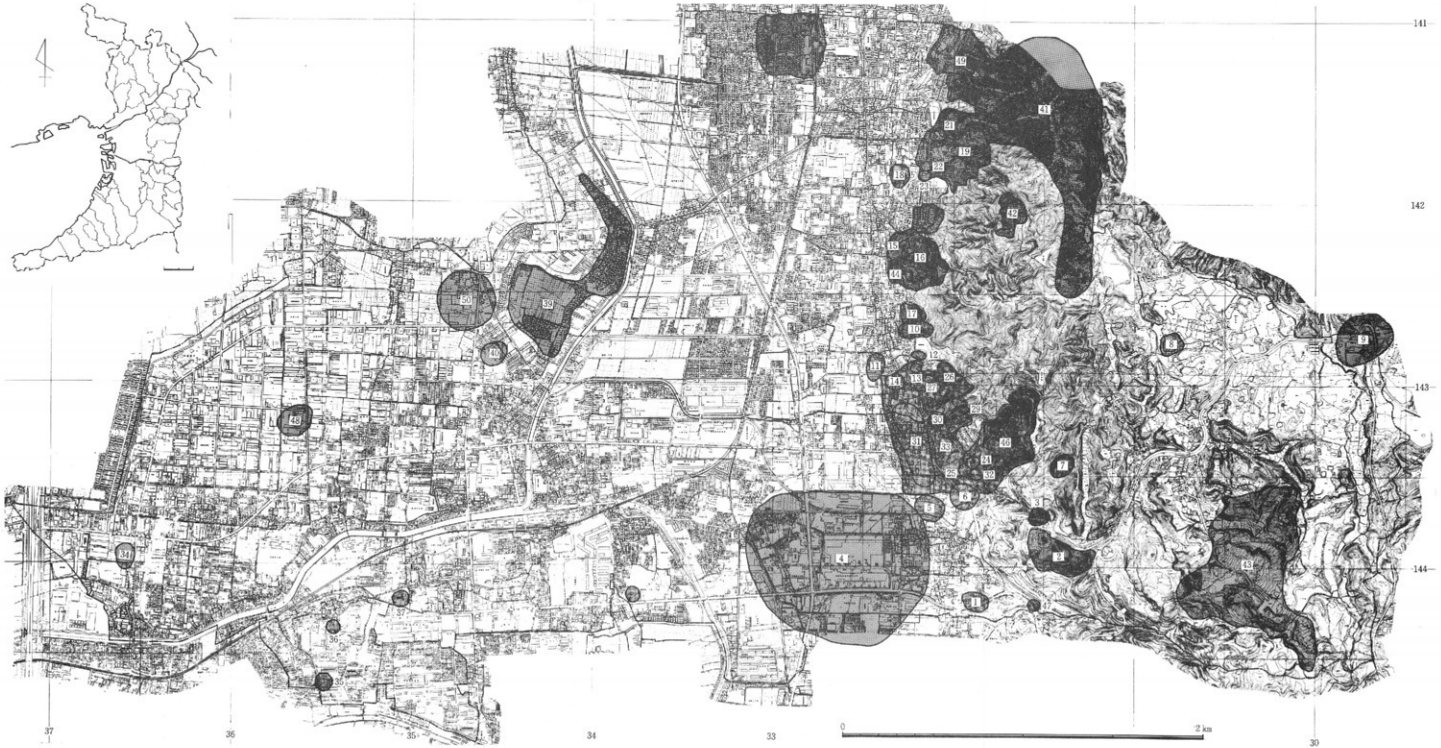


図 8　大東市の位置と遺跡分布図

第2章　寺川遺跡

第1節　調査に至る経過

寺川遺跡は、大東市寺川2丁目から5丁目地内に所在する。今回調査を実施した地点は、寺川5丁目564・565番地にあたる。田畑などの開墾により古墳時代の土師器や須恵器、中世の瓦器、土師器等が採集され、遺物散布地として周知されていた。今回の調査は、土地所有者北村弘尋氏からマンション建設の旨届出があり、大東市教育委員会が、大阪府教育委員会より文化財保護課技師松岡良憲の派遣を受け、工事に先立つ事前調査として実施したものである。調査地点は、長農(ながの)川左岸に位置し、東の山側には既に建物が建ち、西側は切土されていた。その上、盛土による整地のため原地形はほとんど失われていたが、北側にわずかに残る畑の形状より、傾斜地を成していたと推定される。しかし、これまで周辺での発掘調査が実施されたことがなく、遺跡範囲、遺構の埋没状況、包含層の深度等の確認のため、大阪府教育委員会文化財保護課技師辻本武が、1986年3月10日にトレンチ調査を実施した。トレンチは建物敷地内に限って東西方向に3本設定した。。いずれのトレンチにおいても、落ち込み状遺構が検出され、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器、須恵器、瓦器等が出土し、古墳時代や中世の遺構が存在する可能性の高いことが判明した。その後、このトレンチ調査の結果に基づいて、1986年4月5日から同年4月22日にかけて発掘調査を実施した。（黒田）

第2節　遺跡の立地と周辺の遺跡

寺川遺跡は、鍋田川・長農川・寺川中川等の中小河川に

図9　寺川遺跡と周辺の遺跡

よって形成された複合扇状地の扇端部から扇頂付近にかけてと、生駒山地より派生した尾根の先端部である丘陵地に立地している。今回の調査地点は、標高約30mの丘陵上にあり、遺跡内の南に位置している。遺跡内には多数の古墳が含まれているが、調査を経ないまま消滅してしまったものが大半を占め、その実態が明確にされていないのが現状である。

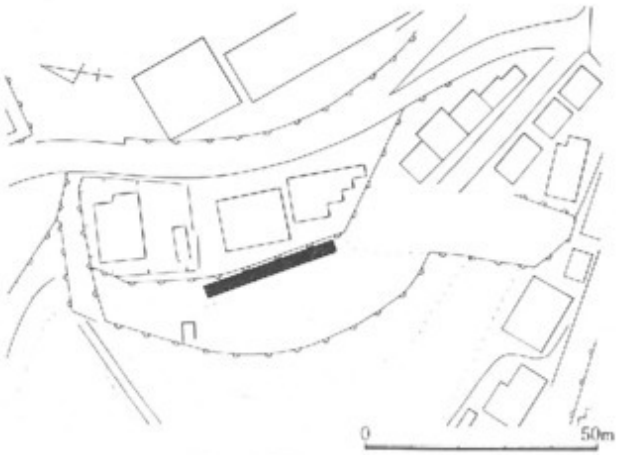


図10　調査区位置図

調査地の周辺の古墳をみてみると、まず北へ500mの距離には1972・73年に調査され、多くの鉄製武器・武具を出土した堂山古墳群がある。さらに後期群集墳と考えられる寺川古墳群、大谷古墳群、円筒埴輪を出土した六地蔵古墳、そして前方後円墳と伝えられている十林寺古墳、調査地点から指呼の間には城ノ越上の段(しろのこしうえのだん)古墳、城ノ越古墳、大谷神社古墳が存在する。調査地より南へ150m離れて、古墳時代前期の祭祀遺跡である鍋田川遺跡があり、さらにその西側一帯には、弥生前期～古墳前期の集落跡として著名な中垣内遺跡がある（図9・10）。（黒田）

第3節　層位と遺構

1．層位

調査区は丘陵上の緩やかな傾斜地に立地しているため、土層は複雑な堆積状況をなしている。そしてひとつの堆積層の分布は一様ではなく、所々でブロック状の堆積を示している。しかし、基本的には、層序はおよそ以下のようにまとめられる（図11・12・13）。

Ⅰ層　　旧耕作土とそれに伴う茶褐色を呈する床土よりなる。旧耕作土は、層厚を異にしながらも調査区全域で認められるが、床土は途切れながら、調査区北側で黒灰色砂質土となって堆

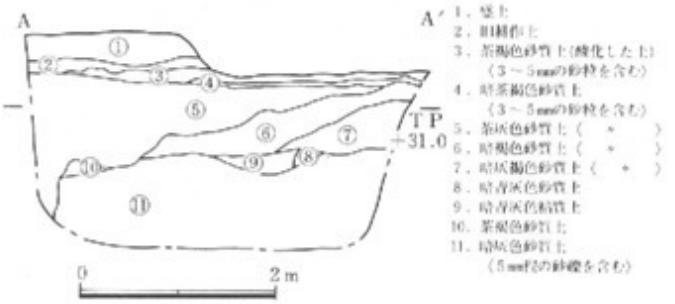


図11　断面図（A－A′）

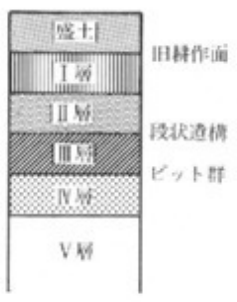


図12　土層断面模式図

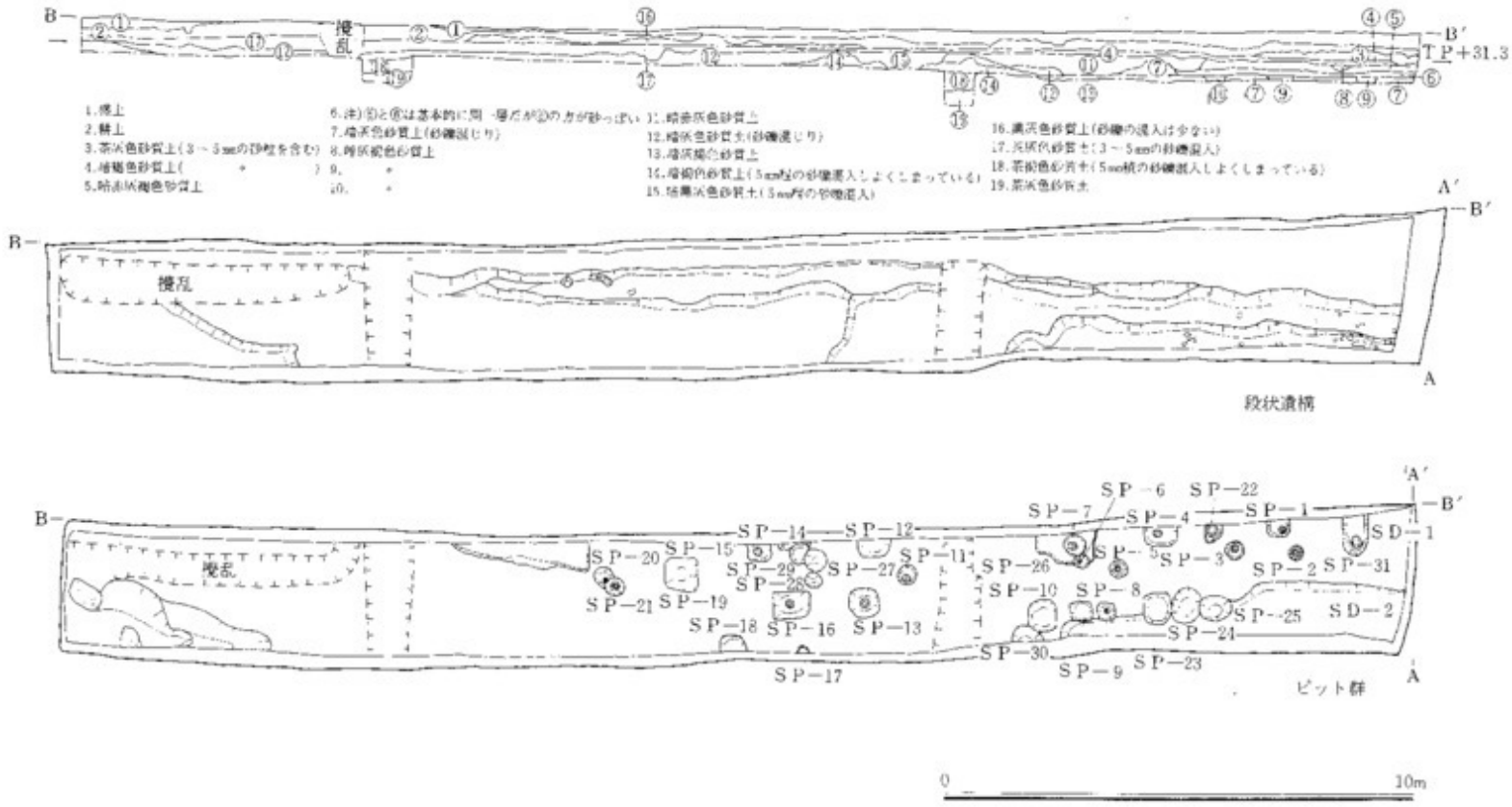


図13　断面図（B－B′）及び遺構平面図

積している。

II層　床土の下にある茶灰色砂質土を指す。斜面を平坦地にするための整地層である。遺物は中世から近世のものが含まれており、最上層の包含層である。

III層　暗褐色砂質土と暗灰色砂質土より成り、緩やかな斜面を形成している。遺物は奈良時代から中世のものを含む。

IV層　調査区南でみられる暗青灰色土と、北でみられる暗褐色砂質土をさす。遺物は古墳時代から奈良時代のものを含んでいる。

V層　茶褐色を呈する花崗岩の培濫土で硬くしまっている。遺物は含まれず、今回の調査では地山と考えた。

番号	形状	平面規模（縦×横）	埋土	備考
1	不整な隅丸長方形	(35) × 48	暗灰褐色砂質土	
2	不整な円形	32 × 32	暗赤灰褐色砂質土	
3	不整な円形	39 × 40	暗赤灰褐色砂質土	柱穴より礎石出土
4	不整な長方形	(41) × 64	暗灰色砂質土	
5	不整な円形	36 × 38	暗赤灰褐色砂質土	
6	不整な円形	28 × 35	暗赤灰色砂質土	SP－7に切られている SP－26を切っている
7	不整な円形	46 × 48	暗灰色砂質土	SP－6を切っている
8	不整な円形	35 × 38	暗赤灰色砂質土	
9	不整な隅丸長方形	42 × 47	暗赤灰色砂質土	
10	不整な隅丸長方形	67 × 60	暗赤灰色砂質土	SP－30に切られている
11	円形	40 × 39	暗褐色砂質土	
12	不整な隅丸長方形	(39) × 70	暗褐色砂質土	
13	不整な円形	61 × 63	暗褐色砂質土	
14	不整な隅丸長方形	(16) × 68	暗褐色砂質土	SP－29に切られている
15	不整な隅丸長方形	(46) × 49	暗褐色砂質土	
16	長方形	(60) × 66	暗褐色砂質土	
17	不整な円形	(14) × 25	暗褐色砂質土	
18	不整な隅丸長方形	(34) × 55	暗褐色砂質土	
19	不整な隅丸長方形	69 × 71	暗灰色砂質土	
20	不整な円形	45 × 43	暗灰色砂質土	SP－21に切られている
21	不整な円形	39 × 41	暗灰色砂質土	SP－20を切っている
22	不整な長円形	(40) × 36	暗灰褐色砂質土	
23	不整な隅丸長方形	65 × 58	暗赤灰色砂質土	
24	不整な円形	75 × 63	黒灰色粘質土	SP－25を切られている
25	不整な隅丸長方形	53 × 68	黒灰色粘質土	SP－25を切っている
26	不整な隅丸長方形	(65) × 124	暗赤灰色砂質土	SP－6に切られている
27	円形	48 × 48	暗褐色砂質土	SP－29を切っている
28	不整な円形	33 × 36	暗褐色砂質土	
29	不整な円形	44 × 45	暗褐色砂質土	SP－14を切っている SP－27に切られている
30	不整な円形	(35) × 67	暗赤灰色砂質土	SP－10を切っている
31	不整な円形	23 × 35	暗灰褐色砂質土	SD－1内で検出

（　）は調査区外のため全長は不明

表2　ピット一覧表

2．遺構

段上遺構　基本層序Ⅲ層上面で検出している。調査区内で３～４段の落ち込みがみられた。調査区の南では、段上に10～30cm大の石が散在していた。現状では、石と段の関係、段の性格については、明らかにしがたい。時期は、Ⅱ層が中世から近世の遺物包含層であることから、この段が造られたのは、古くても中世以降といえる。

ピット群・溝　基本層序Ⅳ層上面で、ピット31基、溝２条を検出している。ピットは平面形からみて、隅丸長方形と円形のものに分けられる（表２）。このうちＳＰ－２、３、31とＳＰ－１、４、22とで、二棟の建物を推定できるが、全体を検出していないので、規模については明らかではない。ＳＰ－３より砥石が出土している以外に、ピットからの出土遺物はなく詳細な時期を比定することはできないが、Ⅲ層での遺物出土状況から奈良時代以降と考えている。

（黒田）

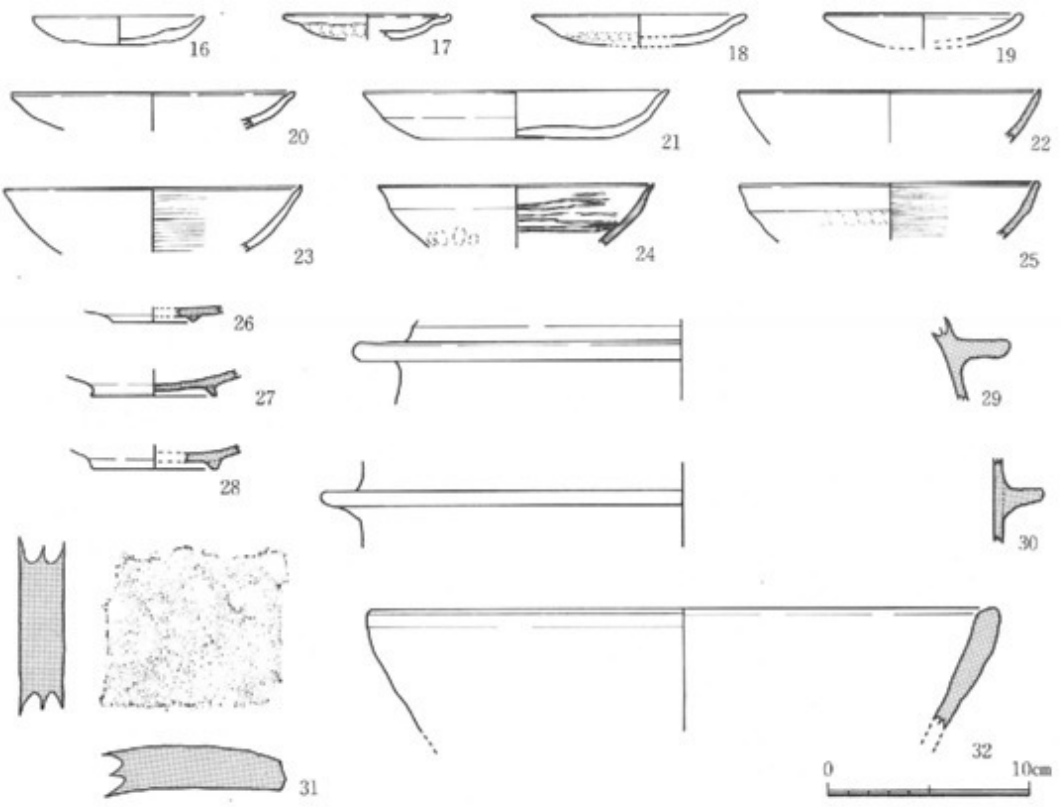


図14　土器、瓦実測図

第4節　遺　物

Ⅲ層出土遺物（図14）　出土遺物は全て小片であり、図化できたものは以下のものである。16～21は土師器皿。16は表面の磨耗が著しい。外面底部付近にかすかに指頭圧痕。17は焼成が軟質。体部に指頭圧痕。口縁部は水平に外へ延び、端部は丸く折り曲げる。内面に沈線。18は内面に丁寧な横ナデ。外面には指頭圧痕。口縁部は外上方へ開くように延びる。22～28は瓦器椀。内外面とも黒灰色を呈し、磨滅が激しい。24は内面に比較的丁寧なヘラ磨きを施し、口縁部は外反気味に上方へ延び、内側へ丸く折り込むようにして終り、内側に浅い沈線が残る。外面は口縁部から指一本分位の幅で横ナデを施す。体部には指頭圧痕。26は断面三角形の低い高

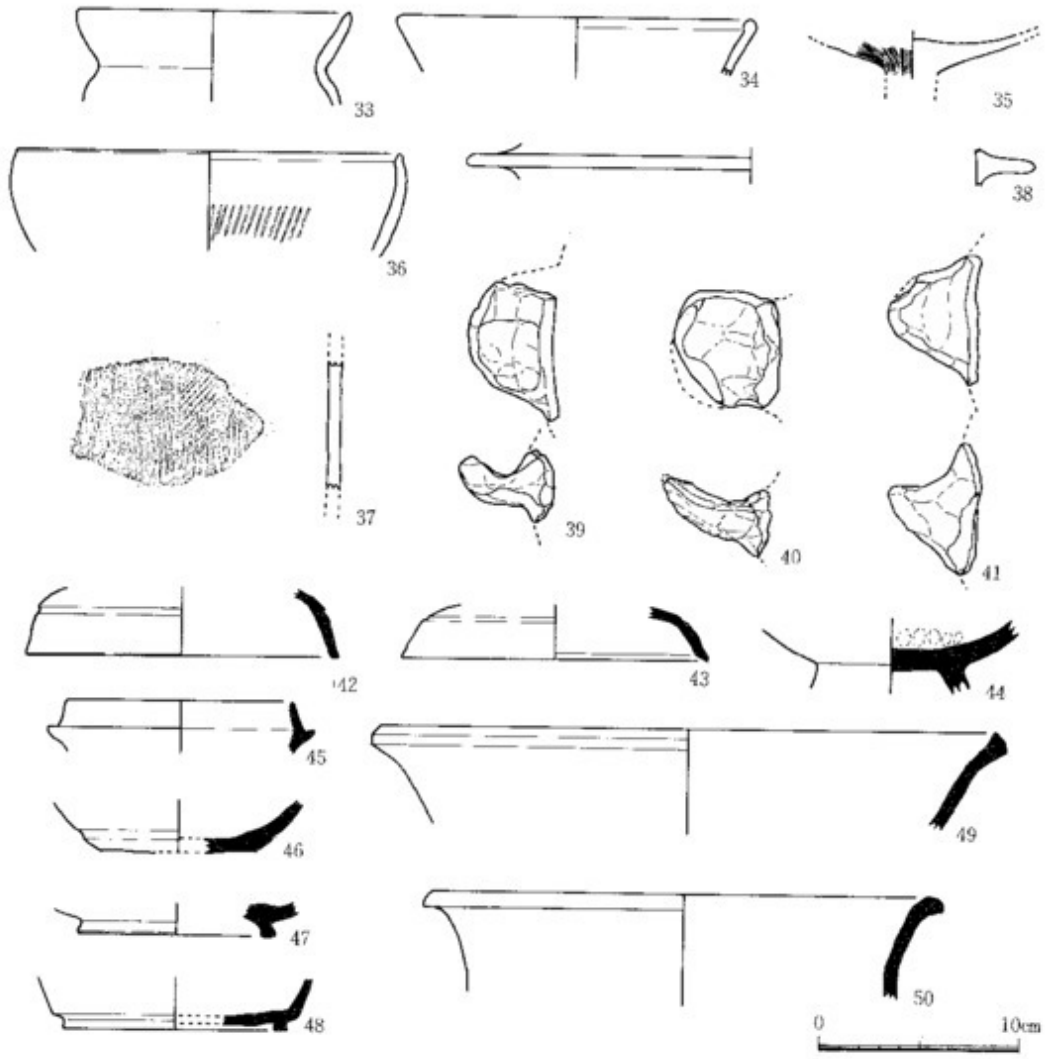


図15　土器実測図

台。27は短くハの字形に延びる小形の高台。28は断面逆台形の高台。29・30は瓦質羽釜の鍔。32は瓦質の鉢。表面の磨耗が著しい。口縁部外面付近に横ナデ、体部に指頭圧痕がかすかに認められる。31は瓦。裏面に布目と指頭圧痕。

Ⅳ層出土遺物（図15）　Ⅳ層出土遺物も全て小片。33・34は土師器甕。いずれも胎土は粗く磨耗が激しい。33は口縁部が体部からくの字状に屈曲し、端部は上方に向かってやや尖り気味に終る。34は口縁端部から内側に向かって肥厚し丸く終る。端部は平坦面を有す。35は土師器高杯。胎土は精良。内面には丁寧なナデ、脚取り付け部にハケ目。36は土師器鉢。内面には丁寧なナデと縦方向の暗文。外面は横方向の丁寧なヘラ磨き。口縁部はやや外方向へ延び尖り気味に終る。37は羽釜胴部。内面にわずかにハケ目が残り、外面に粗いハケ目を施す。38は羽釜の鍔。39～41は把手。42～50は須恵器。43は天井部と口縁部を分ける稜がみられない。端部は内傾した平面を有す。45～48は杯身。47は底部よりハの字形に開くしっかりした高台を有す。49・50は甕の口縁部。

石器・石製品（図16）　7点の石器・石製品のうち、52・57は付近採集品。56の砥石がピット3から出土した他は包含層出土品である。

石鏃が2点ある（51・52）。いずれも凹基無茎式。51は調整が粗く、縁も鋸歯状。52は非常に丁寧な調整。

53・54は剥片。54は横長の小剥片。打面調整が観察される。55は不定形の小剥片。周囲に細かい調整がなされ、錐のような使われ方がされたかもしれない。以上いずれもサヌカイト製。56は砥石。SP－3より出土。よく使い込まれたようで、使用面は表裏とも磨滅によって凹曲し、使用面以外もよく磨き込まれている。側面には正円で径5mmの穿孔。携帯用の砥石であることを示す。半損。

57は滑石製臼玉。緑黒色を呈し、小口面もよく磨かれている。径6mm。穿孔径2mmを測る。　（黒田・岸本）

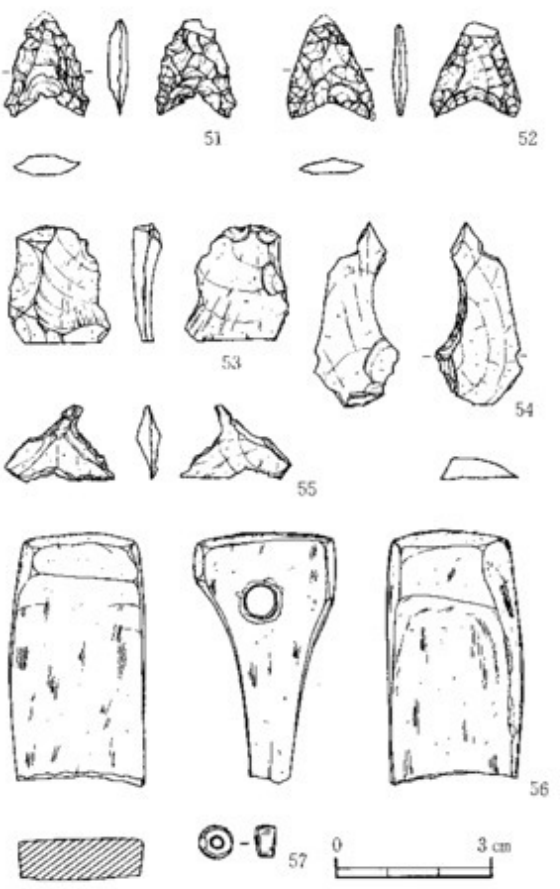


図16　石器・石製品実測図

第5節　まとめ

調査の結果として、奈良時代と中世のものと考えられる柱穴群と、中世以降と考えられる段状遺構を検出した。柱穴群では、2棟の掘建柱建物の存在が推定される。丘陵地で検出したこのような柱穴から窺われる集落の規模・その性格等については、現状では明らかにしがたい。しかし、北方約500mに位置する堂山古墳群では、丘陵上に奈良時代に属する柱穴を検出しており、この時代になると何らかの理由で、丘陵上に集落が営まれるようになったことが窺われる。

段状遺構には、石積みをするのに適した石が数個遺存していた。調査地点の旧小字は「城ノ越」と呼ばれており、何らかの関連が考えられるかもしれない。ちなみに、地元ではここに戦国時代の武士の住居を兼ねた砦があったと伝えられている。

今回の調査は寺川遺跡において実施された始めての発掘調査であるが、調査面積も狭小であり、必ずしも遺跡の実態について明らかにしたとはいえない。今後、調査例が増えれば、掘建柱建物の時期比定や、遺跡の性格が明確にできるものと思われる。（黒田）

第３章　北条遺跡

第１節　調査に至る経過

本遺跡は大東市北条６丁目地内に所在する。古くから古墳時代土師器・須恵器等が採集され、遺物散布地として周知されていた。今回の調査は、土地所有者市川温子氏、及び柳本不動産センターより宅地造成を行う旨届出があり、大東市教育委員会社会教育課が、大阪府教育委員会より文化財保護課技師三宅正浩の派遣を受け、工事に先立つ事前調査として実施したものである。

先述したように、遺跡は遺物散布地として知られ、周辺の遺跡との関係、また地形的にみても古墳の存在が予測された。しかし、古くから畑として開墾されているため、外観から古墳を確認することは困難な状態であり、しかも、これまで発掘調査が実施されたことがなく、遺跡の範囲、内容等についても推測の域を出なかった。よって、まず古墳の存在、遺跡の範囲、遺構の埋没状態、包含層の深度等を確認するため、1986年９月26日より９月30日にかけてトレンチ調査を実施した。トレンチは崖斜面、及び南斜面の削平された部分を除いて、南北５本、東西３本を設定した。その結果、第１・２・３・４トレンチにおいて、溝、落ち込み状遺構等が検出され、弥生時代後期土器、古墳時代土師器・須恵器、瓦器、中世土師器皿等の出土をみたことから、弥生時代後期集落、古墳等の存在の可能性が考えられるに至った。その後、このトレンチ調査の結果に基づいて、1986年10月13日から同年11月30日にかけて発掘調査を実施した。

（三宅）

第２節　遺跡の立地と周辺の遺跡

北条遺跡は河内平野の東方、南北に横たわる生駒山地西麓、飯盛山から派生した丘陵上、標高45～47.5mに位置する遺跡で、土師器、須恵器等の遺物散布地として知られていた。この地は、北条神社の南約250mのところにあり、現在の行政区画上、大阪府大東市北条６丁目地内に所在している（図版６）。

周辺の遺跡としては、まず北方に近接して北条南古墳、さらに約200m離れて宮谷古墳群が位置する。前者では土師器、須恵器が出土している。また、後者では横穴式石室の石材が確認されており、後期群集墳の副葬品として一括される土師器、須恵器、鉄鉾等が採集されている。しかし、両者ともに発掘調査によって内容が明らかにされたものではない。

北条遺跡は、1986年度に発刊された『大阪府文化財地図』では、大きく宮谷古墳群としてその範囲に含まれている。これは、宮谷川を挟む尾根稜線上及びその南北斜面に築造された後期群集墳である宮谷古墳群の範囲がさらに南へ広がり、谷口から離れて尾根緩斜面に位置した北条古墳や北条南古墳をも包括する事を想定したことに依っている。そして、今回の北条遺跡における発掘調査で2基の古墳が検出されている。しかし、当遺跡と宮谷古墳群とは、距離的にみても、また、ちょうど谷田川が流れる小さな谷が入り込む地形からみても、別個に古墳群を形成すると考えた方が妥当であるように思われる。一方、調査区の東方、つまり斜面上方については分布調査の及ばないこともあってか、後期古墳の存在は不明であるが、群としての広がりは充分に考えられよう。

当遺跡の西に隣した北条西遺跡においては、古墳時代土師器・須恵器、中世土師器皿が採集

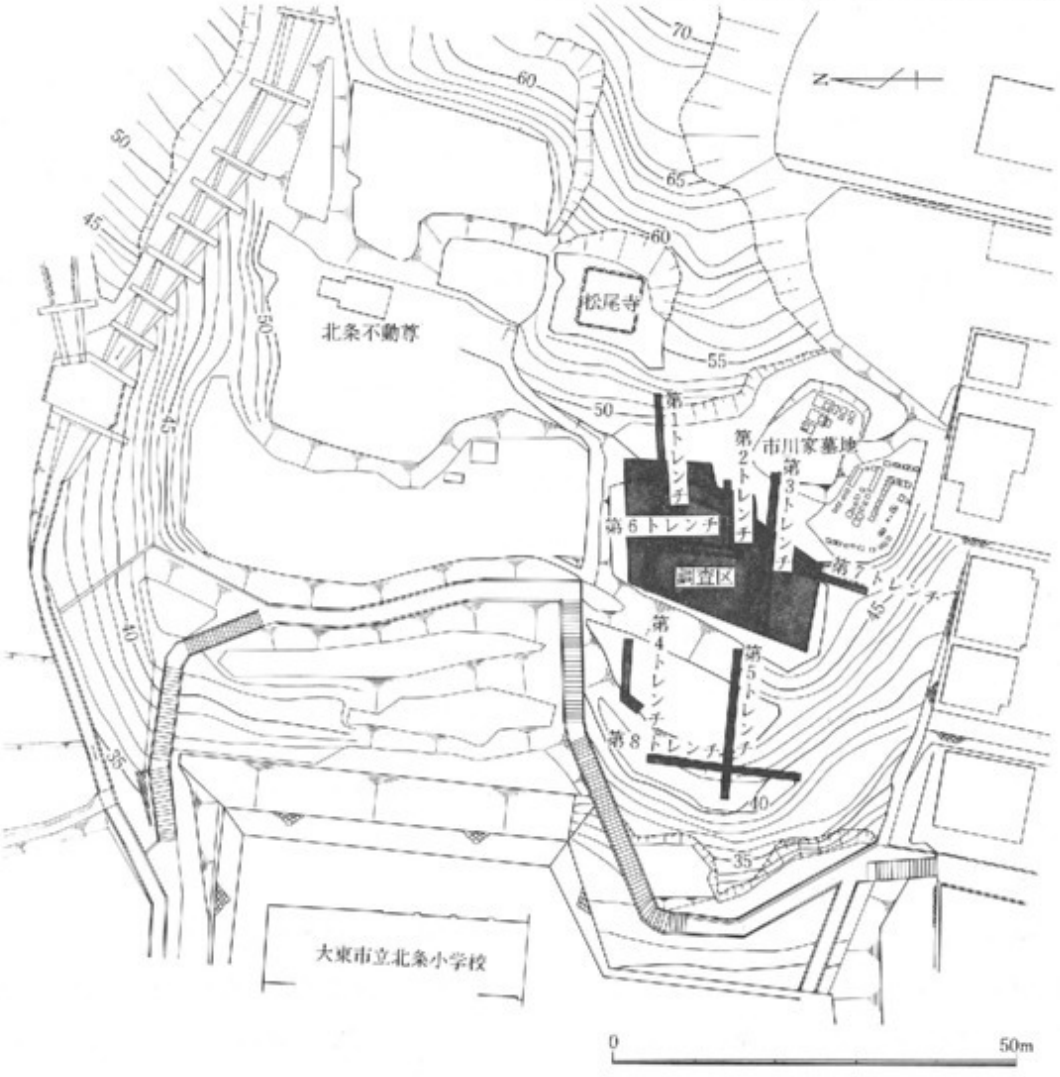


図17　調査区位置図

されている（付載１参照）。しかし、1971・72年の北条小学校の建設工事によって大半が失われ、その実態は明らかではない。また、当遺跡に接して南方では埴輪の出土が伝えられている大将軍古墳が存在したようであるが、1967年に山地が土採りによって南北300m、東西200m以上の範囲にわたって大きくえぐりとられていて、今はそれらの内容、場所さえ確認できない。

このように、かって存在した遺跡については、明確にされないまま失われたものが多い。こうした中でも、北条遺跡はかろうじて全壊を免れた数少ない遺跡の一つにあげることができるのである。（三宅）

第３節　層位と遺構

１．層位

調査当時の地表は東で標高約47.5m、西で45.0mを測る。西向きに傾斜する丘陵斜面にあたるが、後に開墾等により段がつけられ、三段の平坦面を形成している。全体に緩やかな傾斜をもった土地である。

ここでは、調査区東西方向（北壁）の層位をＡ－Ａ′間、南北方向（東壁）の層位をＢ－Ｂ′、Ｃ－Ｃ′、Ｄ－Ｄ′間としてみることにする（図17）。

まず、調査区北壁にあたるＡ－Ａ′間でみると、表土（第１層）の下には弥生時代土器、古墳時代土師器・須恵器、瓦器、中世土師器等各時代に及ぶ遺物を含む第２層（明黄褐色土）、第５層（暗黄褐色土）が存在する。この二層は色調、土質とも類似し、調査区全体を厚く被って、斜面に沿うように堆積する。その下には第４層（砂礫混じりの褐色土）、第６層（黄褐色土）が堆積する。いずれも古墳時代土師器、須恵器を多く含むが、わずかながら瓦器片も認められている。比較的かたくしまって平坦面をなしており、この辺りが中世に入って開発される際に、整地のため盛られた土層である可能性が強く、調査区南端部分を除いて全体に広がる。

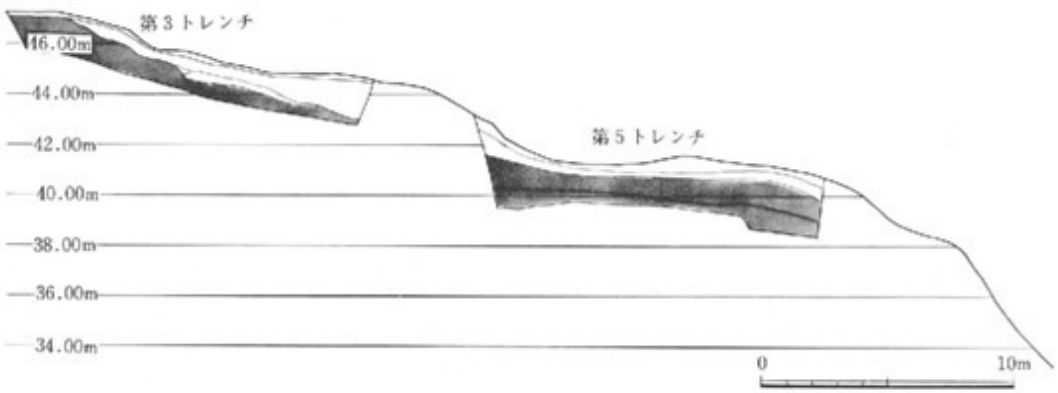


図18　丘陵断面図

第6層上面で中世に属する遺構を検出している。第7層は調査区北西部に入り込んだ小さな谷地形に堆積した暗黄褐色土で、弥生時代土器が出土している。この上面において古墳（北条第1・2号墳）の周溝を検出している。また、第3層、及び第6・7層以下は地山、もしくはかなり以前に地山上に堆積した流土と考えられるが、その判別は難しい。

次に、東壁にあたるB－B′、C－C′、D－D′間を北壁のA－A′間との対応の上でみると、表土（第1層）の下には、A－A′間から連続する第2層（明黄褐色土）が存在する。こうした第2層と類似するが、D－D′間では、新たにやや粘質に富む淡黄褐色土の第2′層が現れる。第3層は、A－A′間から連続した地山と土質が類似した流土で、尾根の高い部分を中心にして調査区東側で認められる。

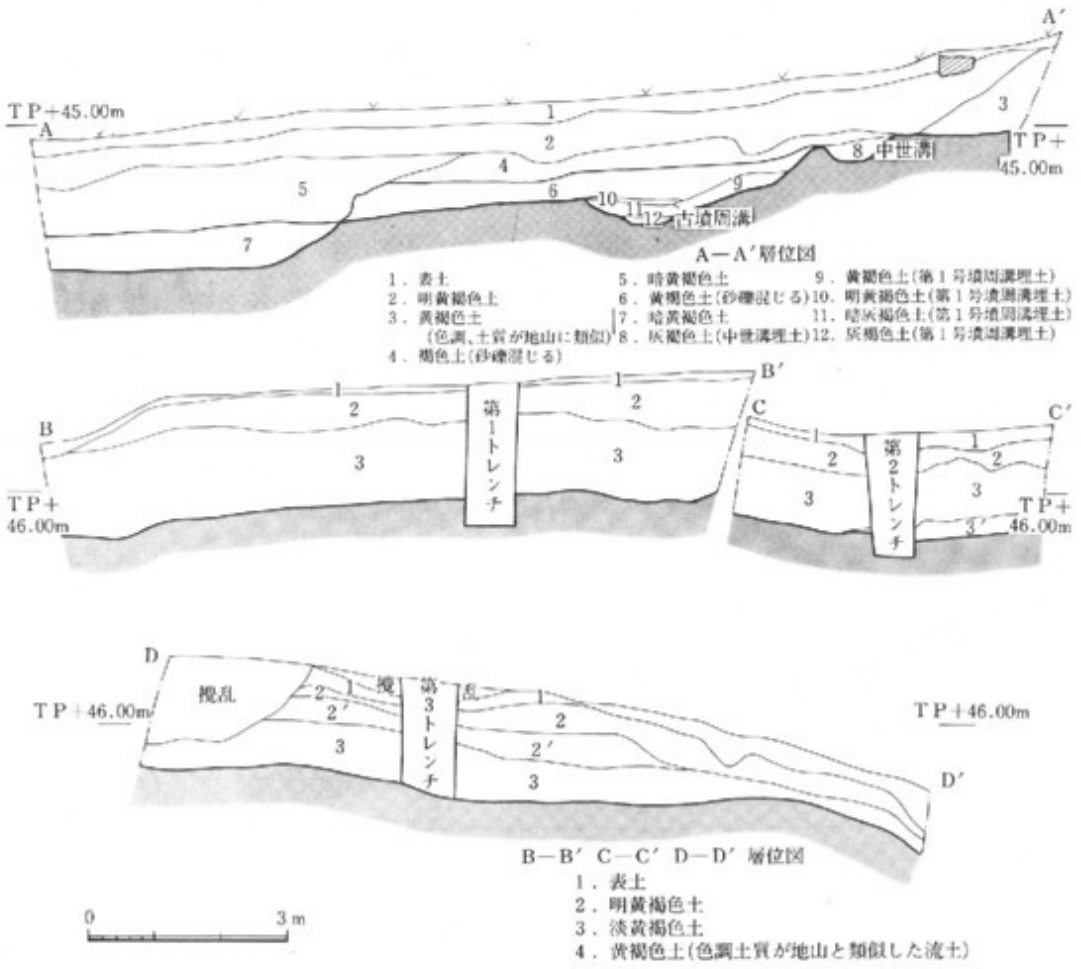


図19　層位図（調査区北壁A－A′、東壁B－B′・C－C′・D－D′）

2．遺構

遺跡が丘陵尾根部に立地し、しかも各時代にわたって利用されていたため、遺構の流失と削平が激しく、残存状態は良好でない。しかし、各時代におよぶ遺構が認められ、主な遺構として弥生時代後期の竪穴住居１軒・土坑５基・ピット３基・古墳２基、中世の溝２条・土坑５基ピット13基、近世の土坑１基を検出している。以下、各時代ごとに順を追って個々の遺構について記すこととする（図版７）。

（１）弥生時代

竪穴住居１　調査区東方、傾斜変換点付近で検出した。斜面にあるために、地形の低い側が流出し、遺構の保存状態はよくない。しかも北条第２号墳の周溝、中世溝１等に切られており、直接地山に掘り込まれた地形の高い部分だけに周溝の痕跡をかろうじて残している。住居の規模は定かではないが、平面形式が隅丸方形であると推定される。柱穴は２個（ピット１・２）を確認した。ピット１・２は径約0.3m、深さ0.15～0.2mを測る。周溝は幅0.15～0.2m、深さ0.1mを測る。周溝内には暗灰褐色土が堆積し、甕底部が、また残存した床面より小型甕・鉢が出土した。

土坑１（図20）　竪穴住居址１の西方約5.0mで検出した。平面形式は不整な楕円形で長径約1.5m、短径約0.8mを測る。深さは約0.35mで緩やかな舟底状を呈している。土坑内には、炭・焼土・火熱を受けた小角礫を含む暗赤褐色土が堆積し、手焙形土器が出土した。土坑内壁に火を受けた形跡が全くないことからその場で火を使用したものではないと推定される。

土坑２　竪穴住居１の北方約6.0mで検出した。不定形で東西約1.5m、南北約1.0mを測る。深さは５～10cmと浅く、埋土は暗灰褐色土である。甕底部が出土した。

土坑３　調査区北西端で検出した。地形の高い部分にだけ痕跡を残した浅い土坑で、全容は不明であるが、楕円形を呈するものと推定される。深さ約0.2mを測り、埋土は暗褐色土で、わずかであるが弥生後期土器片が出土している。

土坑４　土坑３の南に近接して検出した。北側は北条第１号墳に切られている。東西約3.2m、南北1.5m以上の隅丸長方形を呈するものと推定される。埋土は暗褐色土で、弥生土器小片が出土した。

土坑５　土坑１の南に近接して検出された。径約0.45m、深さ約0.6mを測る深いものである。埋土

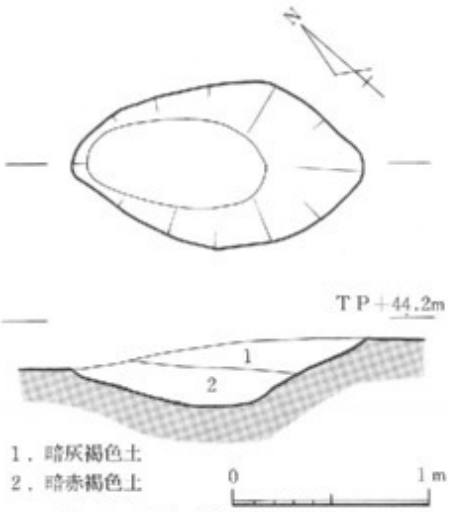


図20　弥生時代後期土坑１

は炭小片がわずかに混じる暗褐色土である。

ピット1　　ピット1は北条第1号墳の周溝に切られて検出された。径約0.3m、深さ約0.15mを測る。

（2）　古墳時代

調査前の状況では、地表面に古墳としての表徴は何ら見られなかったが、表土、中世包含層等を除去後、現地表面より約1.5mの地点で、南北に接するようにして位置した2基の古墳（北条第1・2号墳）が検出された。

北条第1号墳（図21）　　調査区北側で弧状に巡る周溝が検出されている。周溝はかなり以前に堆積したと思われる花崗岩の風化層と、低くなる部分では暗黄褐色土層（第7層）を掘り込んでおり、いわゆる岩盤の完全な「地山」上に形成されていない。墳丘は明らかにできなかったが、斜面という立地条件からみて流出したこと、さらに中世に何らかの開墾の手が加えられたこと等から判断して、既に失われていたものと考えられる。周溝の規模は幅2.5m～1.5m、深さは0.3m前後を測り、断面の形状は緩やかなU字形を呈する。周溝内には明黄褐色土、黄褐色土、暗灰褐色土、灰褐色土層が堆積していた。北側は調査区外であるが、周溝は斜面上部、

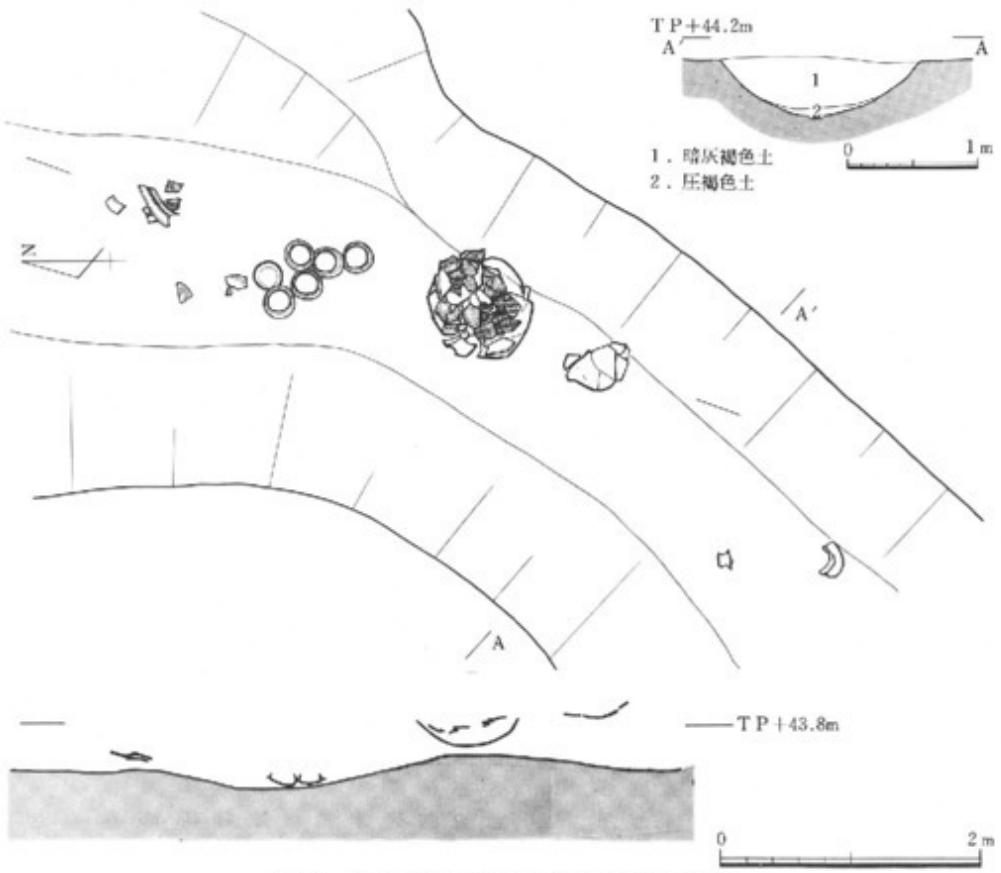


図21　北条第1号墳周溝内土器出土状況

つまり墳丘背後に弧状に巡り完周しないものと推測され、第１号墳は径約10mの円墳になると想定される。主体部については、石室の石材らしきものは確認されておらず、木棺を直葬していた可能性が考えられる。

周溝内より須恵器杯蓋・杯身・甕、韓式系土器等が出土している。特に調査区北壁付近では溝底部の少し浅く凹めたところに完形の須恵器杯蓋１点、杯身５点が内面を上に向けて、それぞれが縁を接して同じ高さで、並べたように置かれていたことが注目される。また、それらと近接して須恵器甕が破砕された状態で出土している。こうした須恵器杯蓋・杯身・甕の出土状況は何らかの儀礼・祭祀的行為を執り行うなかで使用されたことを示すものであろう。一方、韓式系土器については、体部の約４分の１ほどしか残存せず、上記の須恵器が溝底面に接して出土したのに比べ出土レベルも高い。周溝の前代の包含層を切って掘り込まれており、混入した可能性も考えられるが、位置的にみて墳丘側から流れ込んだものと考えた方が妥当であるように思われる。

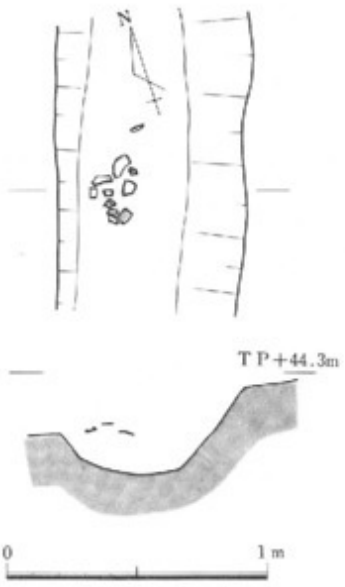


図22　北条第２号墳周溝内土器出土状況

北条第２号墳（図22）　　第１号墳の南に接して位置する。墳丘は第１号墳と同様に認められなかった。周溝の規模は幅1.0～2.0m、深さは約0.3mを測る。断面の形状は緩やかなU字状を呈し、周溝内には暗灰褐色土が堆積していた。墳丘規模、形態については　周溝が完周せずちょうど第１号墳と同じように斜面上部にのみ巡り、全体の約３分の１周することから径約10mの円墳になると推定される。なお、主体部についても　第１号墳と同様に木棺を直葬していた可能性が高い。周溝が途切れる南端で須恵器有蓋高杯が出土している。

（３）　中世

溝１（図23）　　調査区の東方、ちょうど傾斜の変化する地点で掘削された溝で、約24m検出した。幅約1.0m、深さ0.3～0.5mを測り、U字状の断面を呈する。方向はやや東に振るが南東にほぼ直線的に尾根をよぎるように地形に沿って南側に低く傾斜し、溝底の高さは北端で標高44.8m、南端で標高44.4mを測る。北側の延長は調査区外のため不明であるが、南側はちょうど約2.0m西に離れた溝２の先端辺りで途絶する。埋土は大きく灰黄色と灰白色粘質土に分かれ、部分的であるが底部に薄く青灰色粘質土の堆積が認められた。遺物の出土量は極めて少なく、瓦器椀の細片が出土したのみである。

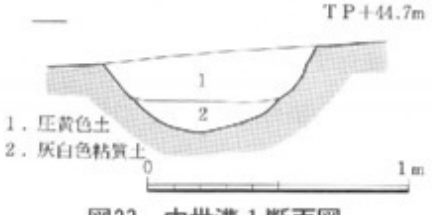


図23　中世溝１断面図

溝2　調査区南端で検出された。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る溝である。この溝の北端は溝1の南端の位置にあたる。埋土は灰白粘質土で出土遺物は認められなかった。

土坑6　北条第2号墳を切って検出された。長径約1.9m、短径約1.1mの楕円形で、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土坑7　約2.1m×約1.7mの不定形の土坑で、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土坑8　土坑6の北西約2.0mで検出された。東西約1.0m、南北約0.5mの不定形の土坑である。深さ約0.15～0.2mを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土坑9　土坑6の西約2.0mで検出された。東西約1.3m、南北約0.6mの不定形の土坑である。深さ約0.4mを測る。埋土は暗灰褐色土である。

土坑10　溝2の北端、西側に近接して検出された。径約0.6mを測り、円形を呈する。埋土は暗灰褐色土である。

ピット　調査区南半部分　溝1、2の西側を中心にして、ピット7～14が近接して検出された。いずれも径約0.2m、深さ0.1～0.5mの小穴で、柱穴として建物を構成していたかどうかは不明である。また、ピット4・5は溝1の東側の斜面で検出されたもので、ピット1～7と同じ規模で、灰褐色土で埋まっている。

（4）　近世

土坑1　調査区南西端で検出した土坑で、調査区外に及ぶため全容は明らかではないが、長軸を南北に振り東西約0.7m、南北約2.1mの現状を測る。伊万里焼碗の破片が出土している。

（三宅）

第4節　遺物

有舌尖頭器から近世に至る様々な遺物が出土している。ここでは出土遺物の大半を占める土器を中心にして、出土遺構、層位別に説明する。なお、石器・石製品については一括して記述する。

（1）　弥生時代の土器

竪穴住居址出土土器（図24－58～61、図版11）　58は鉢。口径10.6cm、器高8.6cmを測る。上げ底気味の底部に、斜め上方にやや内弯風に延びる体部と口縁部がつく。全体につくりは雑で粘土紐の接合痕が残り、口縁部は全体的に歪む。底部の指おさえ痕は強い。明赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。59は小型甕。口径13.8cm　器高10.5cmを測る。くびれ部と体部のふくらみは弱く、最大径は口縁にある。体部内面は磨滅して不明であるが、外面には叩き目が認めら

れる。底部はやや不安定な平底である。明褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。60は甕底部。不安定な平底を呈し、内面に二次焼成を受けている。外面に叩き目が認められる。暗褐色を呈し、焼成は良好。

土坑1出土土器（図24－61、図版11）　61は手焙形土器。全体の3分の1程残存している。復原口径35.5cm、現存高36.0cmを測る。鉢部と覆部との接合部に丁寧な刻み目を、口縁部に列点文を施す。覆部には粘土紐を積み上げた痕跡が観察され、内面にハケ目が見られる。体部下半には突帯が付けられており、刻み目が認められる。外面には縦の粗いハケ目、内面はナデ調整が認められる。頸部には直線文、体部上半部分には波状文が施される。

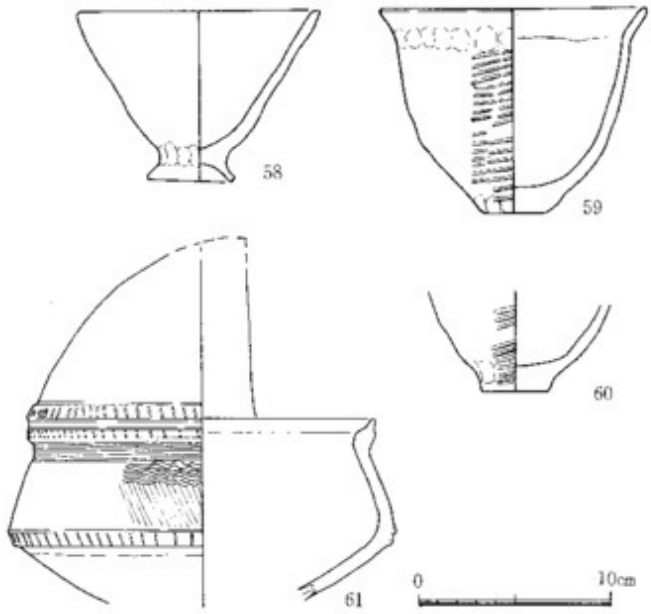


図24　竪穴住居1・土坑1出土土器

（2）古墳時代の土器

北条第1号墳出土土器（図25－62、図26－63～79、図版12）　62は壺。体部のみ残存する。軟質で磨滅が激しく、淡灰色を呈する。胎土に砂粒が少なく長石・角閃石を含む。外面は格子叩き、内面はナデを施し、丁寧に撫で消している。63は須恵器杯蓋。器高4.2cmを測る。完形品である。全体に丸みをもつ天井部と口縁部をわける稜は比較的鋭い。天井部には灰かぶり。灰青色を呈し、胎土は精良。焼成は良好。64～68は須恵器杯身。いずれも口径10.0～10.5cm器高4.0～4.8cmを測る。立ち上がり部は内傾し、端面は明確な段をなす。底部ヘラ削りの範囲は約3分の1強である。青灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。69は甕口縁部。口径10.0cmを測る。口縁部が外上方にまっすぐ延びた後、角度をかえて上

図25　北条第1号墳出土土器

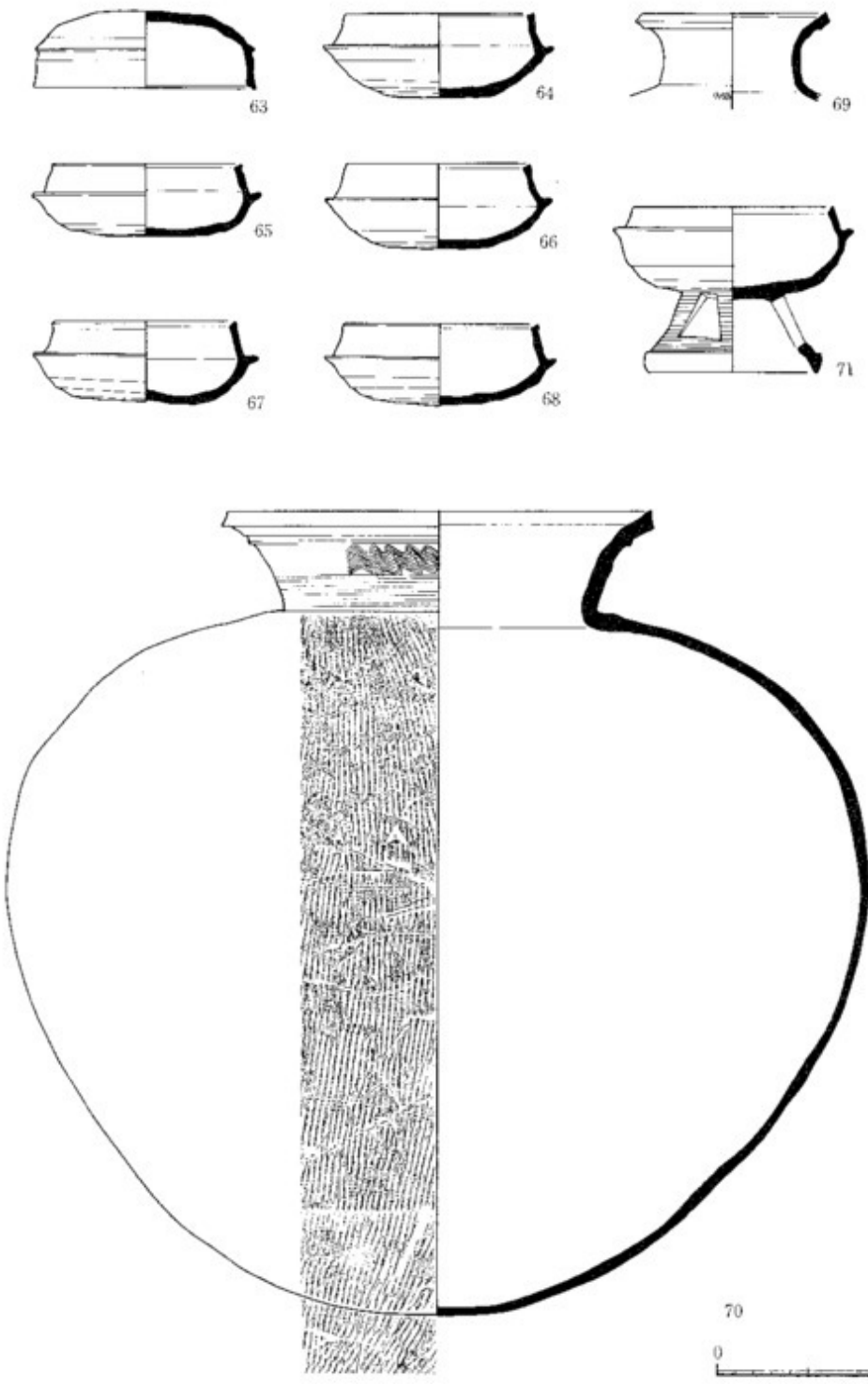


図26　北条第1号墳（1～8）、北条第2号墳（9）出土土器

方に開く。体部外面には平行叩き。暗灰色を呈し、焼成は良好。70は須恵器。口径23.0cm、器高44.0cmを測る。やや肩が張る体部と丸底に近い底部に、朝顔形に外反した口縁部を有し、口縁端部に近く断面三角形の突帯を巡らす。体部外面は平行叩き目文を施した後、全体に浅いカキ目を間隔をおいて巡らす。内面は同心円文を丁寧に消す。また、口縁部は断面三角形の突帯の下に櫛描き波状文を、さらに下にはカキ目を施す。体部外面上半部に自然釉が付着。灰青色を呈し、焼成は良好。

北条第2号墳出土土器（図26－71、図版12）　71は須恵器有蓋高杯。短脚一段透しのもので

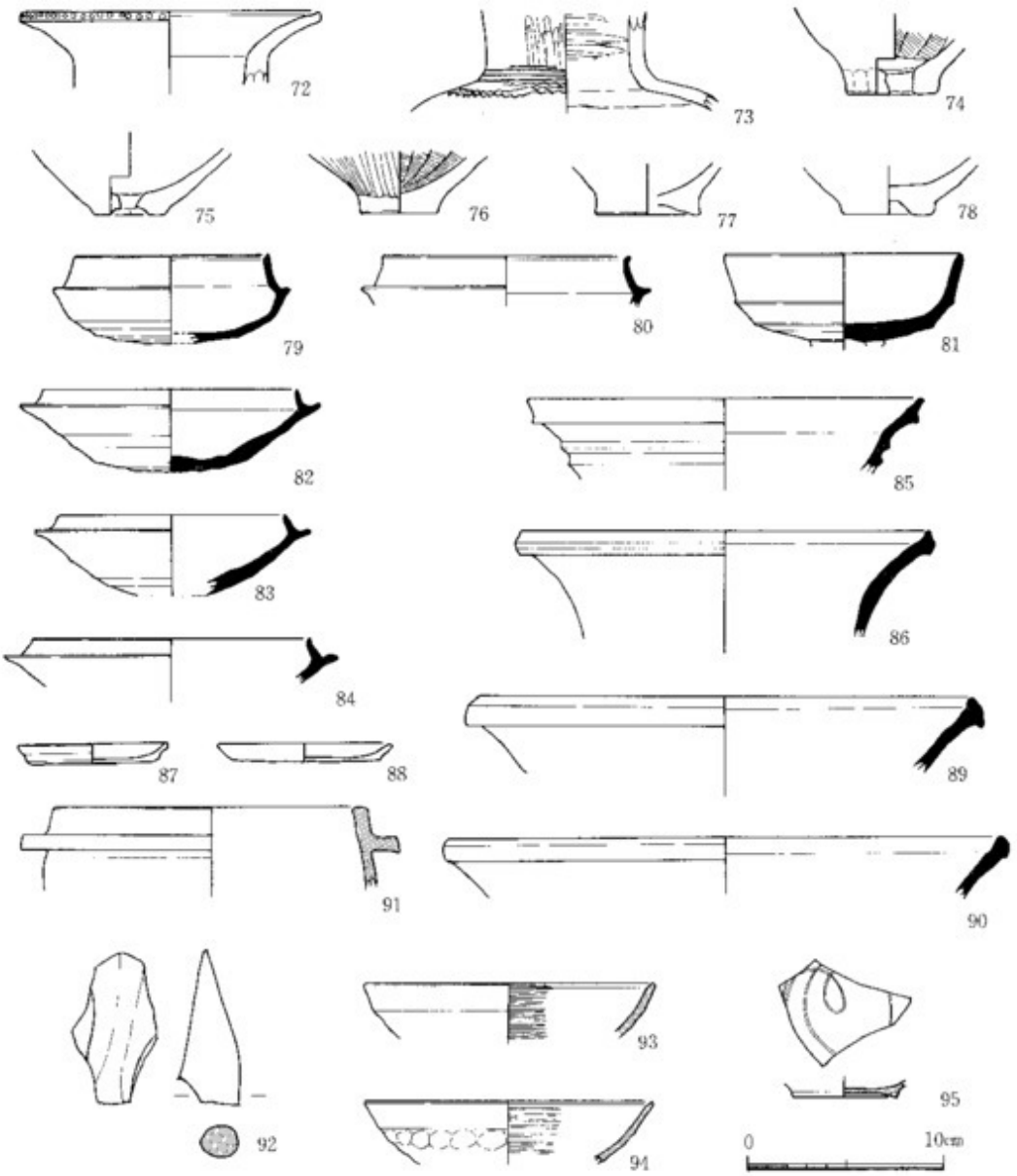


図27　包含層出土土器

三角形の透しを三方向にもつ。口径11.0cm、器高9.3cmを測る。立ち上がり部は内傾し、端部は明瞭な段をなす。脚部にカキ目調整を施す。杯部のヘラ削りは3分の1程度に及ぶ。色調は灰色で焼成はやや不良。

（3）　包含層出土の土器（図27）

遺構出土遺物とは別に、包含層中から各時代に及ぶ土器が出土している。まず、第2層（明黄褐色土）では弥生時代後期土器74・78、須恵器80・81・82、瓦器91・92・93・94、土師器小皿87、東播系の須恵器89が、第5層（暗黄褐色土）では弥生時代後期土器72、須恵器79・86、瓦器椀95、東播系の須恵器90が出土した。第4層（砂礫混じりの褐色土）、及び第6層（黄褐色土）は第2節で述べたように、整地のために盛った土層で、包含遺物の構成は第2、5層と比べて、古墳時代の遺物が多くなる。第4層から土師器小皿88、須恵器83・84・85、弥生時代後期土器76が出土している。また、第7層からは弥生時代土器がまとまって認められ、72・73・75・76が出土している。以下、時期別に説明を加えることとする。

まず、弥生時代後期に属する土器に72～78がある。72は壺。直立に近い頸部から斜め上方へ鈍く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は面をなし不揃いに竹管文を施す。褐色を呈し、胎土に石英、クサリ礫、角閃石、長石を含む。73は複合口縁を呈する壺。頸部下部から体部にかけて櫛描直線文と波状文を施す。施文具の器面への当たりが悪いのか途切れ気味である。赤褐色を呈し、胎土は精良　焼成も良好。74～78は底部。74、75は焼成前に穿孔。

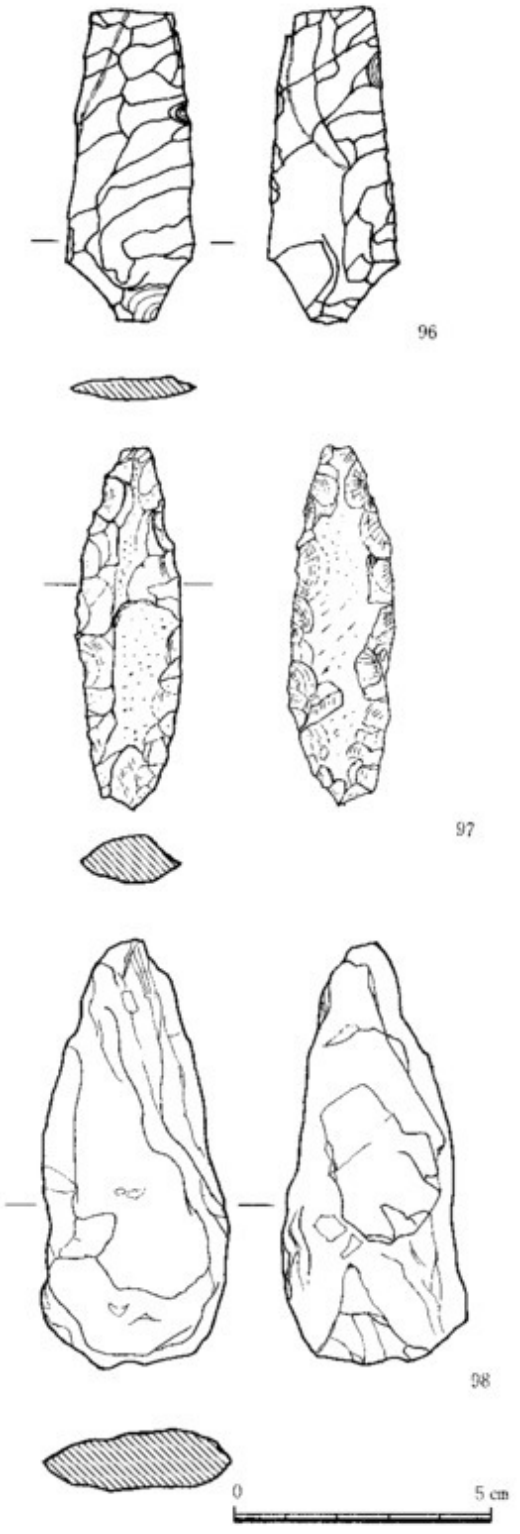


図28　石器

古墳時代の須恵器には各時期のものがある。79・80・82～84は杯身。79は口縁部の立ち上がりが長く、端面は内へ傾斜し稜をつくっている。80は立ち上がりの内傾度がやや大きく、受け部は水平に延びる。82～84は口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。81は高杯の杯部。口縁部と底部とが稜でわけられ、無文。85・86は口縁部。

中世に属する土器に87～95が認められる。89・90は東播系の須恵器鉢。89は口縁部の横ナデが強く、口縁端部がやや拡張。90は口縁部が上下に拡張。87、88は土師器小皿。87は口縁部が屈曲して延びる。88は底部と口縁部の境が厚くなり外方に出っ張り気味で、口縁部が外上方へ延びる。91は瓦器羽釜。口縁部が短く、直立気味。92は瓦器羽釜の脚部。93～95は瓦器椀。93・94はともに復原口径約15.0cm、器高は不明。いずれも器表面が風化し、ミガキ調整は不鮮明。口縁端部内面に沈線が、体部内面に圏線状のミガキ調整が認められる。95は瓦器椀の高台。断面が低い三角形を呈し、見込みに螺施状暗文を施す。

（4）　その他の遺物（図28・29）

石器類には有舌尖頭器、尖頭器、打製石斧　砥石等が認められる。これらはすべて遺物包含層に含まれていたものである。

96は有舌尖頭器。材質はサヌカイト。長さ6.0cm　幅2.5cm、厚さ0.4cm。先端部が欠損している。両側面には細かく丁寧な調整がなされている。宮谷古墳群出土といわれる有舌尖頭器と大きさ、その形状、調整ともに非常によく似ている[1]。97は尖頭器（木の葉形尖頭器）。材質はサヌカイト。長さ7.1cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm　比較的粗く両面調整がされている。先端部を欠損している。98は打製石斧。材質は粘板岩。長さ8.2cm　幅3.7cm　厚さ1.1cm。先端部に使用の痕跡をもつ。99は砥石で立方体を呈し、四面を使用している。片方が大きく欠損しており最大長10.6cm　最大幅5.0cmを測る。石材は砂岩である。　（太田・三宅）

第5節　まとめ

今回の調査成果としては、まず弥生時代後期の竪穴住居址・土坑、古墳、中世の溝・ピット等、各時代におよぶ遺構を検出したことがあげられる。また遺物に有舌尖頭器が出土しており、この遺跡のはじまりを知る上で貴重な資料を得ることができた。以下、弥生時代以前、弥生時代、古墳時代、中・近世と大きく四時期に分け、それぞれの時期の遺構・遺物が示す幾つかの問題点を中心に触れ、まとめとしたい。

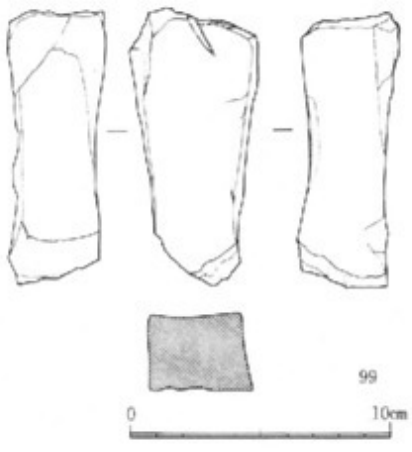


図29　砥石

（1）弥生時代以前

最も時期が遡る遺物として有舌尖頭器を採集した。一点のみであるが、同じ様な形態をしたものが当遺跡の北に隣した宮谷古墳群でも採集されている[2]。ともに採集資料であるが、比較的限られた範囲内での分布で、一時的、あるいは長期に及んだ生活の場が発見される可能性がある。

（2）弥生時代

弥生時代後期に属する遺構として竪穴住居１軒、土坑３基、ピット数基が検出された。遺物は竪穴住居１から後期後半の甕・鉢等が、土坑１から手焙形土器が出土している。遺構・遺物の中で特筆されるのは土坑１で、坑壁には火を受けた形跡は認められないが坑内に焼土が堆積し、手焙形土器が出土している。この土坑の具体的性格は明らかにし難いが、手焙形土器のもつ祭祀的性格とともに、何らかの目的のために近辺において火が使用されたことが推定される。以上の遺構出土遺物と包含層出土遺物からすると、後期後半の極めて限られた時期に営まれた集落の存在が推定される。今のところ調査地点・範囲からして集落の詳細な内容は明確にしがたく、今後に期待するしかない。しかし、地形的にみると、集落は南北方向を谷で挟まれた100m前後の幅をもつ尾根の緩傾斜面に営まれていたことが想定され、今回の調査区は集落のほぼ南端にあたることが理解される。そしてとりわけ注目されることは丘陵斜面標高約45mの地点にあって、丘陵下に広がる沖積地水田面との比高差約40mを測り、河内平野を眼下に、遠く北摂、六甲の山

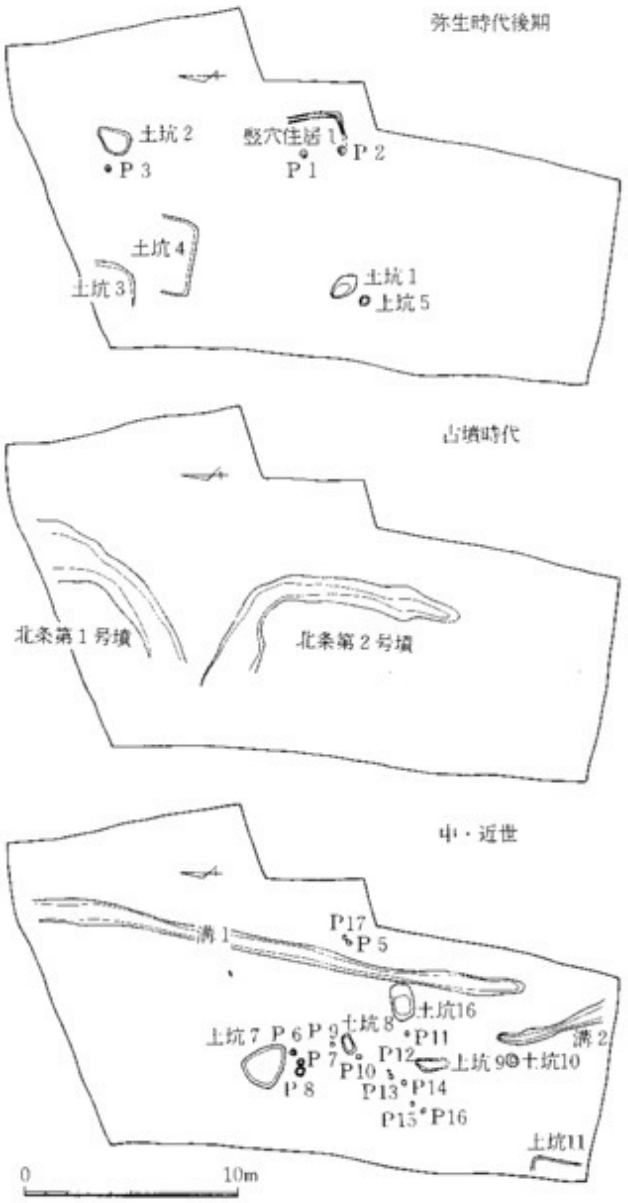


図30　調査区遺構変遷図

脈まで見渡せる眺望のすぐれた地に立地することである。

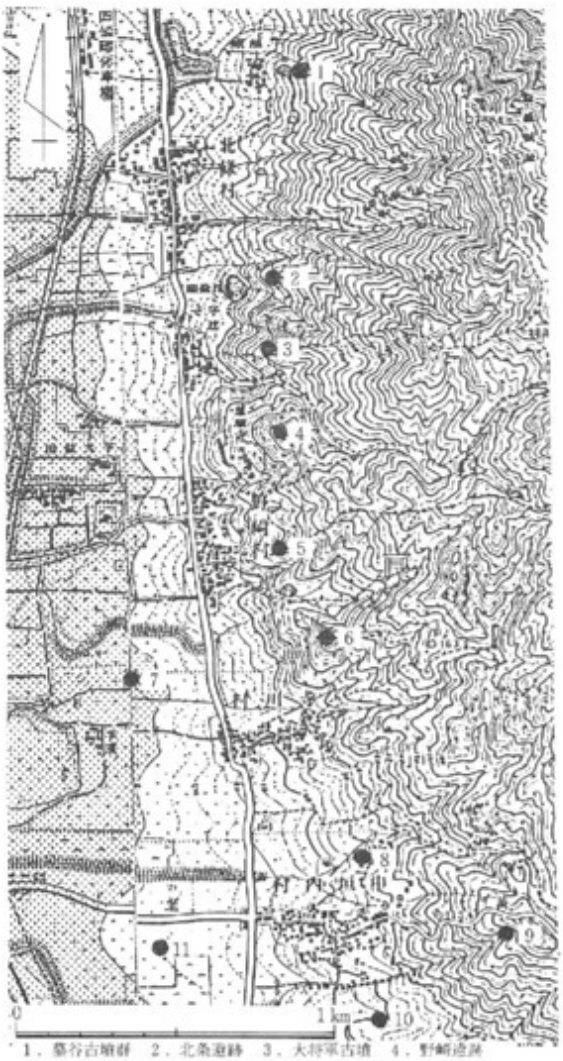
このような立地を示す弥生時代集落については、すでに瀬川芳則氏による「大阪の高地性集落―河内の湖北と淀川左岸―」において、北河内地域の高地性集落としてまとめられている[3]。その中で大東市域に限ってみても、生駒西麓部を中心に所在する中垣内国見、龍間、寺川堂山、野崎、野崎福蓮寺、北条宮谷の6遺跡が紹介されている[4]。またそれ以外に、墓谷古墳群において弥生時代後期後半の壺（付載2参照）[5]が、大将軍古墳では中期の器台が採集されており[6]、新たな知見例に加えることができる。それらの遺跡の中で、山中に位置する龍間遺跡を除けば、その他はいずれも南北に横たわる生駒西麓丘陵部標高45～90mの地点に立地し、当時においては西方に広がる「河内湖」を眼下に、「集落」が営まれたことがわかる。こうした集落が相互にどう結びついていたか注目すべきことであろう。しかし、発掘調査が実施され遺構が検出されたのはわずか北条遺跡と堂山古墳群だけであり、他は遺跡としての具体的内容が明らかでないのが現状といえる。

そして、北条遺跡についても、水稲耕作に適さない丘陵部に立地した集落が、弥生時代後期後半に限定された時期に営まれたことは明確であるが、今のところ集落の具体的な様相とその特質を論じるには不十分な段階である。

（3）古墳時代

北条第1・2号墳は、堂山第1号墳からみて北方約1.2kmに位置し、宮谷古墳群とは谷を隔て南方わずか200mの距離にある。当古墳群からの眺望は、西方へ続く扇状地と低湿地を眼下にして前面に河内平野が一望できる。しかし、南方向は野崎付近で大きく西方へ突き出した飯盛山の支脈の丘陵尾根に遮られる格好となり、堂山古墳群等を望むことはできない。

これら二基の古墳は、すでに墳丘盛土が失われ遺存状況は良好ではないが、主体部



1．墓谷古墳群　2．北条遺跡　3．大将軍古墳　4．野崎遺跡
5．福蓮寺遺跡　6．堂山古墳群　7．寺川添遺跡　8．鎌田川遺跡
9．国見遺跡　10．若宮遺跡　11．中垣内遺跡

図31　市域における生駒西麓の弥生時代遺跡

に木棺直葬の可能性が考えられ、墳丘斜面上方に弧状に巡る周溝から径約10mを測るほぼ同規模の円墳が復原される。

築造時期については、まず第1号墳では周溝内底部より、築造前後に何らかの墓前祭祀的行為に使用、供献された遺物と考えられる完形の須恵器杯蓋・身と、破砕された甕が出土しており、それらは陶邑TK23号窯併行期の須恵器に相当するものといえる。第2号墳については、周溝端で須恵器高杯が出土しており、それは陶邑TK47～MT15号窯併行期と考えられるものである(7)。以上の須恵器が示す年代観からすると第1号墳が5世紀末葉、第2号墳が5世紀末～6世紀初頭と近接した築造年代が窺われ、第1号墳→第2号墳という築造順序が理解できる。また、これらの占地する地形は、平地部で合流し谷田川となる川が流れる二筋の谷に挟まれた尾根にあたるが、微地形を通じてみると、立地した尾根の第1号墳の北側は、現在ちょうど松尾寺と北条不動尊へ続く道となり、短い谷が入り込む。そして、第2号墳の南側は現在大きく山が削り取られているが、比較的深い谷となっていたようで、小尾根を形成している。つまり2基の古墳は丘脚の短い尾根幅いっぱいにひろがって、その斜面に周溝を相接するように東西に並列したことが窺い知れるのである。このように時期的にみても、また占地からみても第1・2号墳は相互に緊密な関係を有し、継続的な造墓を示す築造単位として捉えることができるのである。

一方、北条第1・2号墳出土須恵器とは別に、遺物包含層からはそれよりも下降する陶邑MT15号窯からTK217号窯併行期の数型式におよぶ時期幅を有した須恵器が出土している(8)。おそらくこうした須恵器は尾根斜面上方から流れ込んだものであり、それらはいわゆる後期群集墳に伴出する副葬品と推定される。さらに西方斜面下方、約50m離れた地点では、1971・72年の北条小学校建設工事の際に、後期古墳の副葬品として一括される須恵器が採集されている（付載1参照）。また、北東に約50m離れた尾根部斜面標高約52mには横穴式石室の石材が露

図32　北条古墳群と周辺の遺跡

出した墳丘状高まりが認められ[9]、またすぐ北側には、今は消滅してしまったが横穴式石室を内部主体とする北条南古墳が存在していたようである[10]。以上の点から察すると、古墳数・群構成等、具体的内容は別にして、南北約100m幅、東西標高30m付近から60mまでつづく範囲の緩傾斜面には、今回出土した北条第１・２号墳にとどまらず、出土須恵器からみると、さらにそれよりも時期の下降する６世紀代から７世紀代にかけて造墓が存続した「北条古墳群」の存在が想定されてくるのである。

次に北条古墳群と同じように、生駒山地から西方へ派生した丘陵上に立地する主な古墳群をみていくと、北から蟇谷古墳群[11]、宮谷古墳群[12]、堂山古墳群[13]、寺川古墳群[14]等が挙げられる。これらの古墳群は、宅地開発、堰堤工事等によって今では失われたものが多く、それぞれの実態は必ずしも明確ではない。しかし、それらは、周辺地形や石室に用いたと推定される石材の残骸、個々の出土古墳は特定できないが古くから採集されてきた須恵器をはじめとする遺物、昭和47・48年に実施された堂山古墳群（第２～７号墳）の発掘調査成果等からすると、６世紀代後半を中心に７世紀におよぶ比較的小規模な後期群集墳であることが推定されるのである。

北条古墳群はこうした群集墳と比べ、初期須恵器を有した第１号墳からみて、群構成の開始は少なくとも５世紀代末葉まで遡るものである。これまで当地域においては首長墓的様相を完備した堂山第１号墳を除けば、明確に中期に遡る古墳は[15]知られていなかったが、時期的にみればそれに続く注目すべき位置を占めるものといえよう。

また、北条古墳群の性格、北条第１・２号墳の被葬者像については、上述した後期

1．蟇谷古墳群　2．宮谷古墳群　3．北条古墳群　4．大谷東古墳
5．北条東古墳群　6．ヤタ山古墳　7．寒垣内古墳　8．堂山古墳群
9．六地蔵古墳　10．上林寺古墳　11．大谷古墳群　12．七ツ塚弓古墳
13．寺川古墳群

図33　市域における主要古墳及び古墳群

群集墳以外にも生駒山地西麓丘陵斜面や扇状地での埴輪片、須恵器等の採集資料から、中・後期に属する消滅古墳・古墳群の存在が推定されるところであり、まず、それらの内容を把握・復原するとともに、西麓部に存在する古墳の全体像を通じて検討する必要があろう。

（4）中世

溝、土坑、ピット群等を検出したが、出土遺物は少なく、それも小片にとどまる。個々の遺構はおもに南北溝（溝1）とその西方に分布しており、調査区南端部分を除いて他は、斜面を平坦地に造成した後に形成されたものである。それぞれの遺構の所属時期は明確には決定しがたい。ただ立地的には背後に飯盛山城を負った位置にあり、溝等のもつ性格からすれば山城との何らかの関連も推定できよう。しかし、出土遺物からすれば、13～14世紀の瓦器、土師器が大半を占め、時期的にそれを裏付けるようなものではない。また、古墳や横穴式石室が中世に再度埋葬・祭祀の場として利用された可能性も考えられるが、むしろ集落等の存在が想定されてこよう。

こうした生駒西麓の丘陵上に所在する中世遺跡については第1章で記したが、すでに10ケ所近く知られる。中でも発掘調査が実施された寺川遺跡では、標高約32mの丘陵斜面に掘建柱建物が検出されており、集落が営まれた例としてあげられる[16]。当遺跡と寺川遺跡は立地を同じくしてほぼ同時期、つまり13～14世紀にかけて丘陵部に形成されたもので、それはちょうど中世遺跡が目立って増加する時期でもある[17]。両者が共通した内容、性格を有したものかどうかは今後の検討を要するが、少なくとも、北方約1kmの扇状地に形成された同時期にあたる北新町遺跡[18]に見られるような水田、畑等が付随した農村集落の景観とは異なったものといえよう。今後、こうした平地部でない丘陵における集落の具体的様相の明確化とその性格づけが必要となろう。

以上、幾つかの問題点の指摘にとどまった。今回の調査は当初予測された古墳だけでなく、古くは有舌尖頭器の出土にはじまり弥生時代後期、さらに中・近世にかけての各時代の丘陵部における遺構・遺物の分布密度の高さを明らかにした。しかし、現状では各時代の特質、全体像を捉える上でさらに資料の蓄積が必要であり、今後の調査とその成果の検討に負うところが大きい。

（三宅）

註

（1） 中松登茂一氏採集。本書第1章「位置と環境　旧石器～縄文時代」参照。

（2） 註（1）に同じ。

（3） 瀬川芳則　「大阪の高地性集落　河内の湖北と淀川左岸」　『小野忠熙博士退官記念論集「高地性集落と倭国大乱」』（1984）

（4） 註（3）の文献記載の高地性集落遺跡の名称については、「大阪府文化財分布図」（1986）と対

応させると、中垣内国見遺跡は国見高地性遺跡、寺川堂山遺跡は堂山古墳群、野崎福蓮寺遺跡は福蓮寺遺跡、北条宮谷遺跡は宮谷古墳群の範囲に含まれる。

（5） 北条部落史研究会所蔵遺物。北条川の堰堤工事の際に墓谷古墳群より出土している。本書付載2「墓谷古墳群採集遺物」参照。

（6） 大阪府教育委員会 『大阪府文化財地名表』（1977）。

（7） 田辺昭三『陶邑古窯址群』（1966）

（8） 註（7）に同じ。

（9） 北条不動尊の北側に接して位置する。

（10） 大阪府教育委員会 『大阪府文化財地名表』（1977）

（11） 墓谷古墳群 市域の北端、飯盛山より派生した丘陵、標高50～100mに形成された古墳群である。1978・79年の墓谷川の堰堤工事等によって破壊された際に、横穴式石室の石材が認められている。分布範囲からすると、10数基、多くみても20数基前後の群集墳と考えられるのではないだろうか。副葬品については、相当のものが流失したものと思われるがそれらの一部である須恵器、鉄刀等、さらに注目されるものとして赤色顔料を塗布した土師質亀甲形陶棺が北条青少年教育センターに保管されている（北条部落史研究会所蔵）。それらの他に弥生時代後期土器、瓦器、土師器皿等の中世土器が採集されている。須恵器は個々の出土古墳が特定できないが、陶邑ＴＫ10号窯、ＴＫ43号窯、ＴＫ209号窯・217号窯併行期のいわゆる後期群集墳に伴出する副葬品として一括できるものである。６世紀中頃から７世紀前葉にかけて築造されたと考えられよう。

（12） 宮谷古墳群 墓谷古墳群より南へ谷を一つ隔て約500m離れて位置する。宮谷川を200mほど奥へ入った南北両斜面、標高約100mまでの範囲に分布する古墳群である。1986年度に刊行された『大阪府文化財分布図』によると10基前後の古墳が確認されているが、それらは宮谷川の堰堤工事、開墾等によって既に失われたものと考えられる。個々の出土地点は明らかではないが、宮谷川を望む南側尾根は傾斜が緩やかで、開墾工事の際、中松登茂一氏によって横穴式石室の石材が掘り出され、土師器・須恵器・鉄鉾等の副葬品が採集され、保管されている。須恵器は陶邑ＴＫ10もしくはＭＴ15号窯併行期のものであり、少なくとも６世紀後半を中心とした築造時期が推定されよう。

（13） 田代克己・瀬川健 『堂山古墳群発掘調査概要』 大阪府教育委員会（1973）

（14） 寺川古墳群 堂山古墳の南西に位置する。大阪府教育委員会刊行「文化財地名表」（1977）によれば 石棺、須恵器の出土が伝えられているが詳細は不明。

（15） 埴輪の採集資料からすれば、堂山第１号墳に遡る中期古墳の存在が推定されるが、その実態は不明である。（付載４参照）

（16） 本書第三章参照。

（17） 本書第一章５、中・近世参照。

（18） 北新町遺跡調査会 『北新町遺跡現地説明会中間報告概要』（1986・３・８）

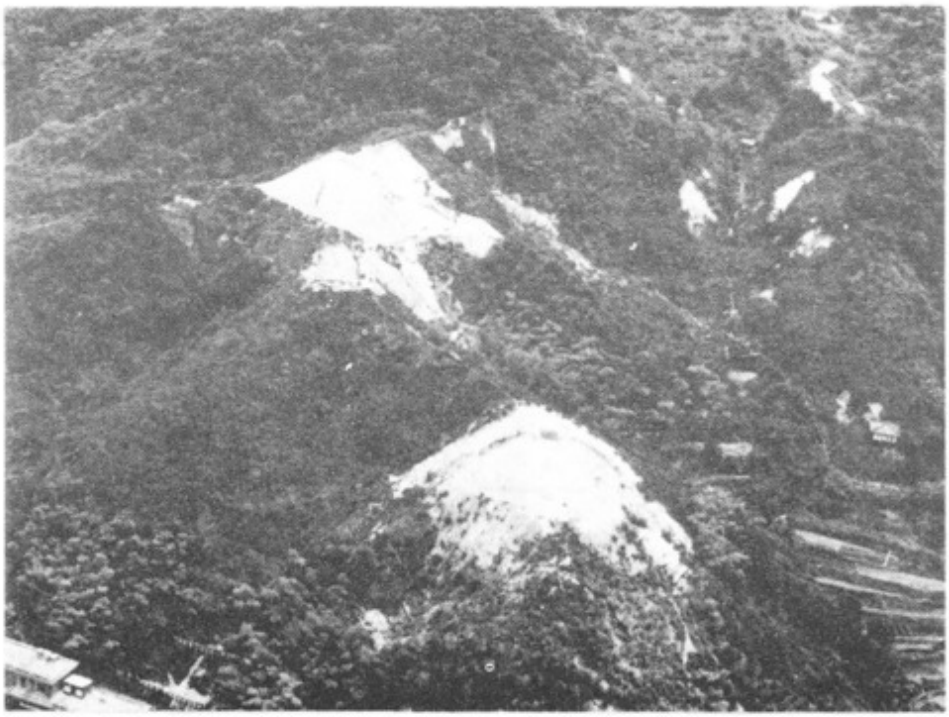
付載　大東市域の出土遺物の検討

1　北条遺跡周辺の出土・採集遺物

2　墓谷古墳群採集遺物

3　西諸福遺跡出土・採集遺物

4　大東市の埴輪



堂　山　古　墳　群

（「堂山古墳群発掘調査概要」1973．3　大阪府教育委員会）より転載

1　北条遺跡周辺の出土・採集遺物

太田基久・三宅正浩

1　はじめに

大東市域では土木工事や開墾等、発掘調査以外で採集された遺物が多数にのぼる。これらは長い年月が過ぎて採集地点が確認できなくなったものが多い。以下で紹介する遺物は、1971・72年の大東市立北条小学校建設工事の際に、北条西遺跡で採集された数点の土器・石器と、1978年の宅地造成に伴う発掘調査（北条６丁目）で出土した須恵器大甕１点である（図１）。ともに今回の調査区に近接しており、また時期的にみても緊密な関連が窺われ、北条遺跡の内容、性格等を明らかにする上で重要な資料と考えられるのである。前者は幸いにも北条小学校に、後者は高槻市立埋蔵文化財センターにおいて長く丁寧に保管して頂いた。感謝するものである。

2　北条小学校所蔵遺物（図２・３、図版13）

土器（図２）　　２は須恵器杯蓋。やや偏平な天井部を残すのみで、上部の凹んだつまみを付ける。天井部外面の回転ヘラ削り調整の範囲は約３分の１程度、方向は逆時計まわり。青灰色を呈し、焼成は良好。３は須恵器杯蓋。完形品である。口径12.5cm、器高5.2cmを測る。天井部と口縁部とを分ける稜線は鈍く、凹線を巡らす。口縁端面は内傾する。天井部の回転ヘラ削り調整は粗く、その範囲は約２分の１程度、方向は逆時計まわり。灰色を呈し、焼成は不良。４は須恵器壺。口径7.9cm、器高6.5cmを測る。浅い体部に短く外反する口縁部が付く。底部外面は粗い回転ヘラ削り。その他は回転ナデ。灰色を呈し、焼成は不良。５は須恵器短頸壺。完形品である。全体に歪んでおり、口縁は楕円形を呈し、短径6.5cm、長径8.0cm、器高8.9cmを測る。体部は肩が張り、最大径の位置でゆるやかな稜をもち、外面肩部付近まで灰かぶり。底部は粗い回転ヘラ削り調整。暗青灰色を呈し、焼成は良好。６は須

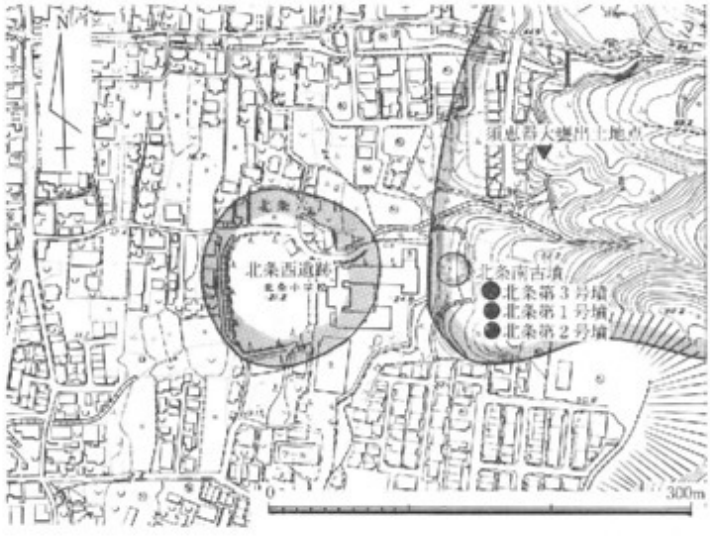


図１　遺物採集地と周辺地形図

恵器壺。体部のみ残存する。肩部に凹線を巡らす。底部は回転ヘラ削り調整。その他は回転ナデを施す。7は須恵器甕。完形品である。口径14.0cm、器高17.2cmを測る。球形に近い体部に外反して端部が丸味をもって段をなす口縁部が付く。体部外面の約3分の1にあたる下半部に平行叩きを残し、上半部から口縁部にかけてカキ目調整を施す。内面は同心円叩き文を明瞭に残す。灰青色を呈し、焼成は良好。8は須恵器長頸壺で底部が欠損。口径9.5cm、現存高16.0cmを測る。肩部に凹線を巡らす。底部はヘラ削り、その他は回転ナデを施す。灰青色を呈し、焼成は良好。1は土師器小皿。底部が欠損。口径8.6cmを測る。口縁部に一段の横ナデを施す。

石器（図3）　9は彫器（左刃調整面斜刃型彫器）。材質はサヌカイト。翼状剥片を素材としている。彫刃面に4本の稜状剥離面をもち、両面縁には細かい打面調整をもつ。器長5.5cm、長刃面の長さ1.3cm。10は掻器（弧刃をもち、刃部側が最大幅をもつ狭基型）。材質はサヌカイト。縦長剥片を素材として、刃部の一部にわずかに調整がなされており、また、その一部が欠損している。器長4.9cm、器幅3.3cm、刃部の長さ4.9cm。11は不整形剥片。材質はサヌカイト。器長3.4cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm。12は横長剥片。材質はサヌカイト。器長3.3cm、器幅2.0cm、厚さ0.5cm。13は剥片（横長不整形剥片）。材質はサヌカイト。他の石器、石核の調整の過程で生じた剥片。器長4.2cm、器幅3.7cm、厚さ0.5cm。

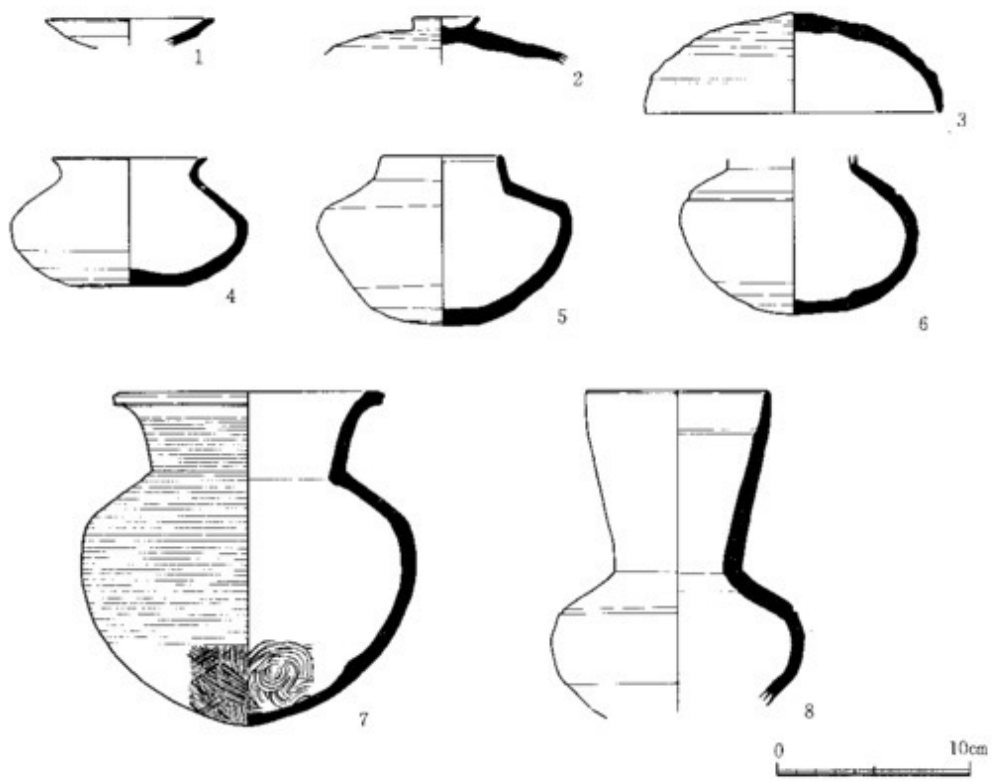


図2　北条小学校所蔵土器

3　北条6丁目出土遺物（図4）

14は須恵器大甕。破片の接合では口縁部と体部の一部を欠損。口径56.5cm、胴部最大径は中位に位置し86.0cm、器高99.5cmを測る。口縁部はナデを施す。内面に粘土の継ぎ目が認められる。口縁部先端は尖らずに角張り、口縁直下に鋭い断面三角形状の突帯を有す。胴部外面は横方向の平行叩き目を残し、その後のナデは認められない。内面は丁寧にヘラですり消している。底部には焼成前の器表面の剥離と焼成時の焼きひずみが認められる。また、肩部に「焼

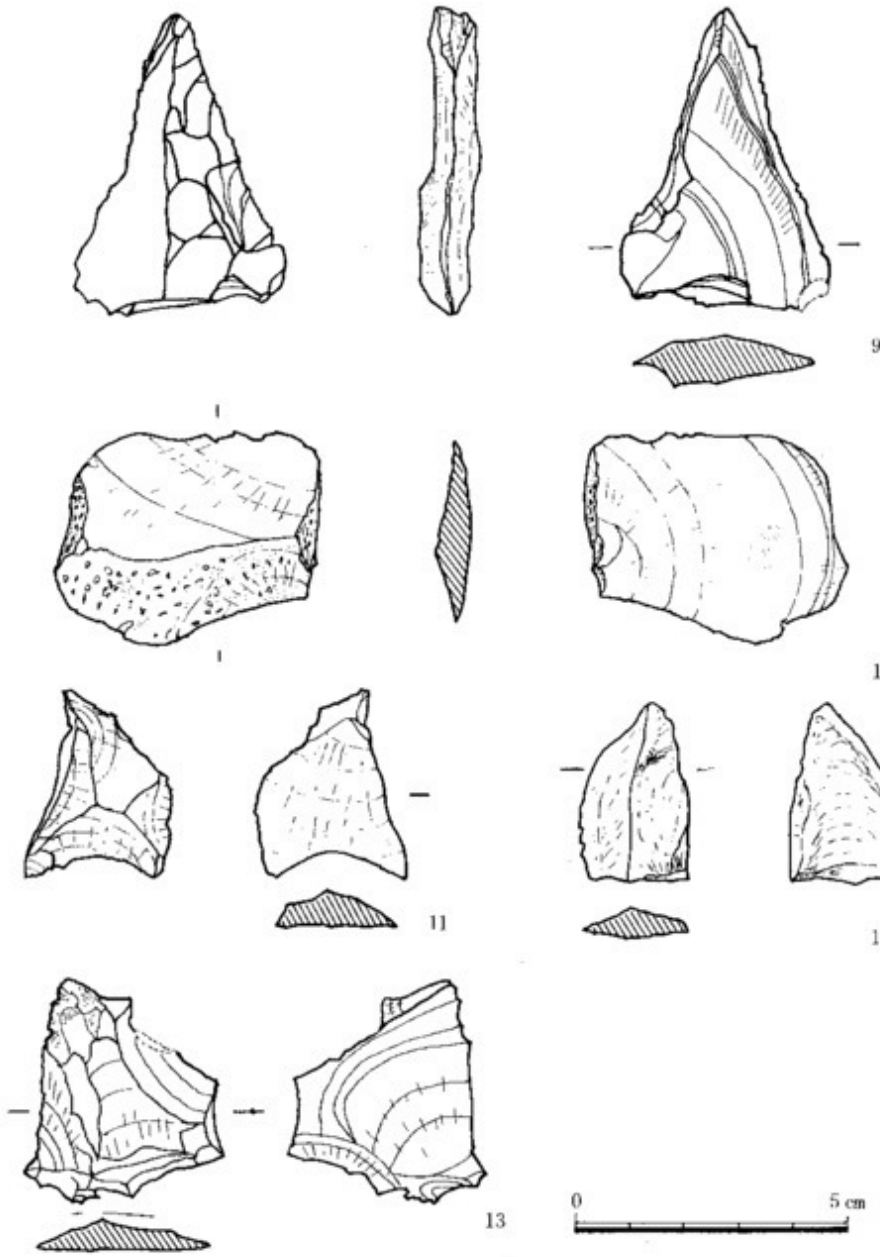


図3　北条小学校所蔵石器

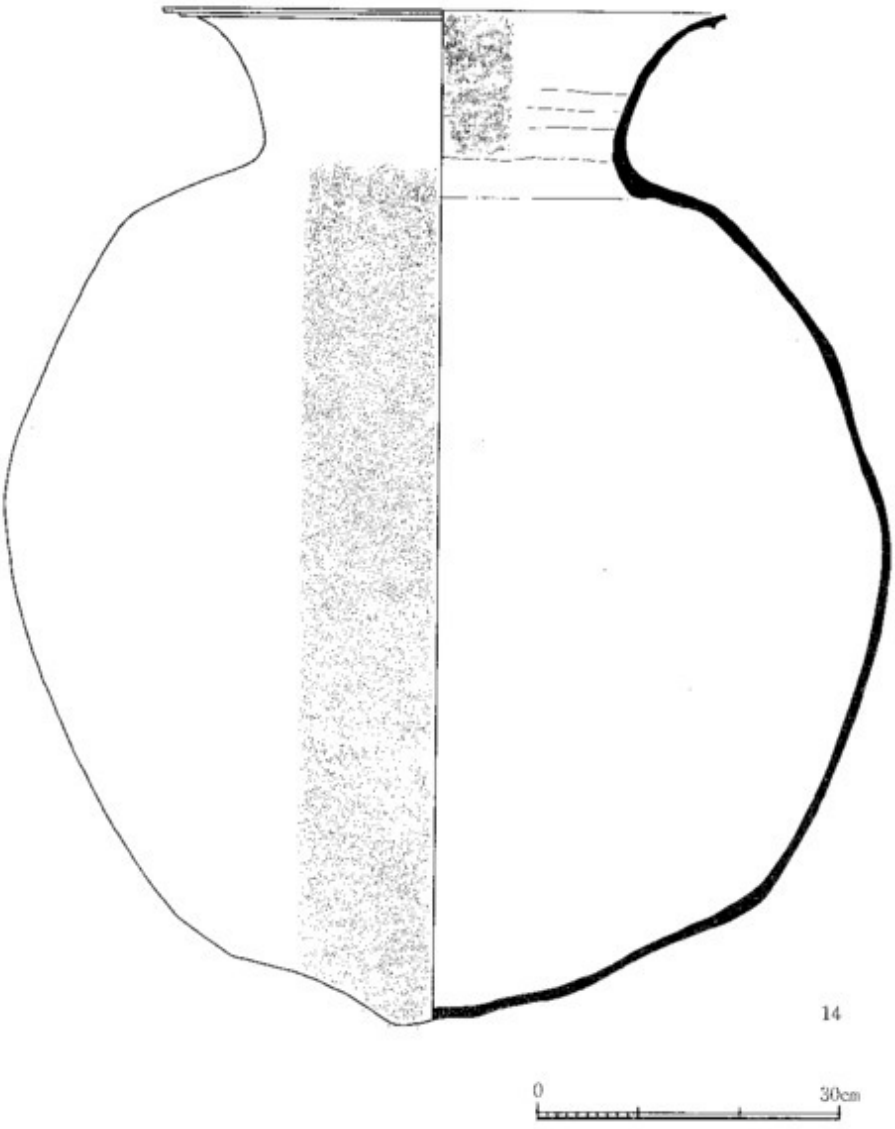


図4　北条6丁目（宮谷古墳群）出土須恵器

きぶくれ」がみられる。淡黄灰色を呈し、焼成は良好。

4　むすび

以上、北条小学校所蔵遺物と北条6丁目出土須恵器大甕について紹介した。北条小学校所蔵遺物の採集範囲は今回の調査区西方斜面の下側、ちょうど北条遺跡の西端部と北条西遺跡の東半部に及ぶ地域に限定できる。まず、石器については、北条遺跡出土の有舌尖頭器を含めて、すべて採集遺物であるため生活の本拠地を明らかにするものではないが、後期旧石器時代から縄文時代にかけたこの地域周辺における人々の足跡を示すものであり、将来、生活の場が発見される可能性が高い。一方、須恵器は陶邑ＴＫ10ないしＴＫ43号窯併行期に相当し、採集地点

の立地からみて、後期古墳の副葬品として一括されるものと考えられる。もちろんそれら個々の出土古墳の内容や古墳数等については全く不明であるが、5世紀末葉から5世紀末ないし6世紀初頭にかけて造営された北条第1・2号墳よりわずかに低い丘陵斜面（標高26～40m）に、6世紀後半を中心として古墳が営まれたことが窺い知れる。

次に北条6丁目出土須恵器大甕は北条第1・2号墳からみて、谷を隔て北方に約100m離れた標高約49mの丘陵斜面において、地表面から約1mの深さで出土したものである(1)。調査範囲が限定されたため出土遺構の性格は明らかではないが、立地からすると古墳に伴った可能性が強い。それは陶邑TK216号窯の須恵器と併行し、初期須恵器の範疇に含まれるものと考えられる。他にこうした古相を呈した須恵器は堂山第1号墳の副葬品(2)や、北条第1号墳の周溝内からも出土している。このように、北条遺跡周辺を眺めると、後期群集墳として捉えられる宮谷古墳群以外に、現在その範囲に含まれる丘陵部南端では北条第1・2号墳と1987年度の調査で検出された北条第3号墳が位置する(3)。この3基の円墳は地形的、距離的にみても、先の宮谷古墳群とは別個に群を形成することは明らかであり、しかも第1号墳の築造時期が5世紀末葉と考えられることから、造墓の開始が中期にまで遡る「北条古墳群」の存在が浮かび上がってくる。一方、宮谷古墳群が占地する標高80～120mの尾根上より下がった、標高49mの地点では先の初期須恵器大甕が出土している。さらに西方に接した地点（標高約40m）で実施された大東市教育委員会による1987年度の発掘調査では、埴輪を有し、6世紀前半に営まれた円墳で、後半に入って新たに横穴式石室が築かれた宮谷古墳が検出されている(4)。以上のことからこの丘陵部においては後期群集墳に加えて、中期と、後期でも早い時期に古墳が営まれたことが窺い知れ、さらにこうした古墳の遺存が予測される。古墳の具体的築造状況を明らかにするには、今後の発掘調査成果と消滅古墳の復原に期待したい。

註

（1） 大阪府教育委員会の堀江門也氏の教示による。
（2） 田代克己・瀬川健『堂山古墳群発掘調査概要』大阪府教育委員会（1973）。
（3） 大東市教育委員会『北条遺跡II』現地説明会資料（1987・6・21）。
（4） 大東市教育委員会の黒田淳氏の教示による。

2　墓谷古墳群採集遺物

黒田淳・三宅正浩

1　はじめに

墓谷古墳群は、市域の北、四條畷市に接する北条３丁目～４丁目の標高25～150mの丘陵上に位置する（図１－49)。この古墳群については、これまで発掘調査が実施されたことがなく、具体的な内容は明らかにされていない。しかし、以下に紹介する弥生土器、須恵器、鉄刀が、1972・73年の墓谷川砂防ダム建設工事と、1978・79年の北条青少年教育センター建設工事の際に採集されており、さらに、隣接した四條畷市域において、この古墳群に北接する地点で陶棺片が採集されている。これらの遺物によって、この墓谷古墳群の内容の一端が明らかにできるものと思う。なお、これらの遺物は、大東市北条部落史研究会において、大切に保管されていたものであり、遺物の出土地点や古墳群の当時の状況等については、同研究会事務局長北井幸男氏に、親切なる御教示を得た。記して感謝する次第である。

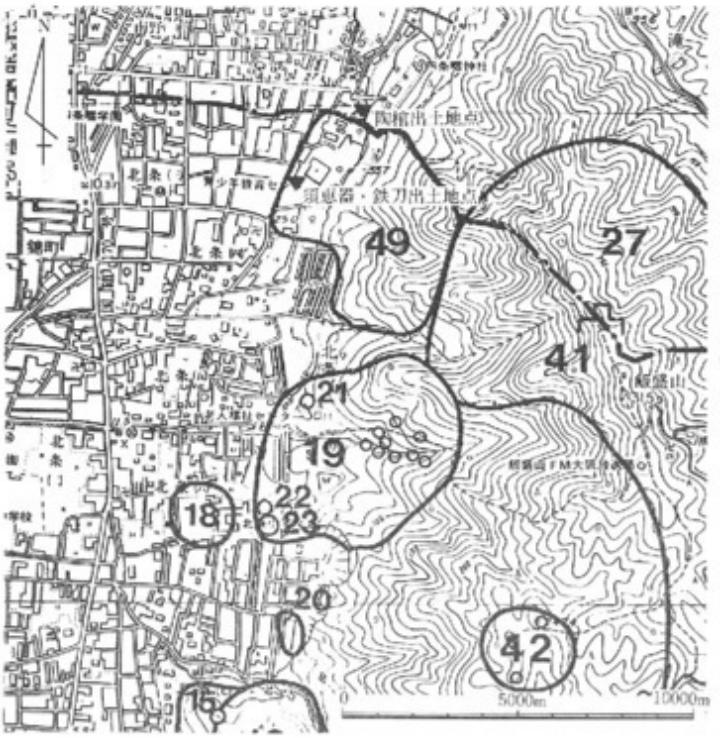


図１　墓谷古墳群と遺物採集地

2　遺物

弥生時代第Ⅴ様式壺（図２－１）　　口径7.5cm、器高18.0cmをはかる、完形品である。外面に丁寧なヘラ磨き。口縁端部に面取り。底部は平底を呈するが無調整で実用でない。内外面とも淡褐色を呈し、胎土に細かい石英、長石を含む。焼成は良好、肩部に黒斑を認める。

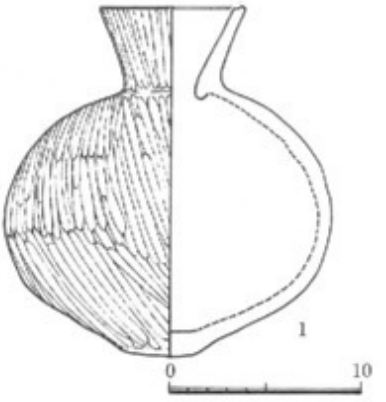


図２　墓谷古墳群採集弥生土器

須恵器（図３・図版14－２～９）　２は杯蓋。口径9.8cm、器高3.1cmを測る。完形品である。天井部中央に乳首形のつまみがつく。天井部は一段ふくらみ、その部分にヘラ削りが認められる。口縁部内面にかえりをもつが、その先端は口縁端部より以下には突出しない。暗灰色を呈し、天井部の一部に灰かぶり、胎土に砂粒、黒色粒を含む。３は杯蓋。口径10.4cm、器高3.5cmを測る。完形品である。天井は丸味をもち、内面中央部に仕上げナデがみられる。暗灰色を呈し、天井部に灰かぶり。胎土に砂粒、黒色粒を含む。４は杯蓋。口径12.0cm、器高3.5cmを測る。完形品である。天井部にヘラ削りが施され偏平気味。天井部と口縁部を分ける凹線や稜は認められない。天井部に「｜」のヘラ記号がつく。暗灰色を呈し、黒色粒を多く含む。５は杯蓋。口径14.8cm、器高3.6cmを測る。天井部と口縁部との境は鈍い稜をなす。天井部は歪む。暗灰色を呈し、黒色粒を含む。６は杯蓋。口径14.8cm、器高4.2cmを測る。完形品である。天井部と口縁部を分ける突出部の稜はほとんど失われ凹線となっている。ヘラ削りは粗く、天井部内面に同心円叩き文と仕上げナデが残る。天井部の一部に灰かぶり。灰青色を呈し、胎土に石粒、砂粒を多く含む。７は杯身。口径13.0cm、器高4.9cmを測る。底部の回転ヘラ削りは約２分の１以上に及ぶ。立ち上がりは内傾気味で端部は丸く仕上げられている。内底面中央に同心円叩き目と仕上げナデが残る。灰青色を呈し、胎土に石粒、砂粒を含む。８は杯身。

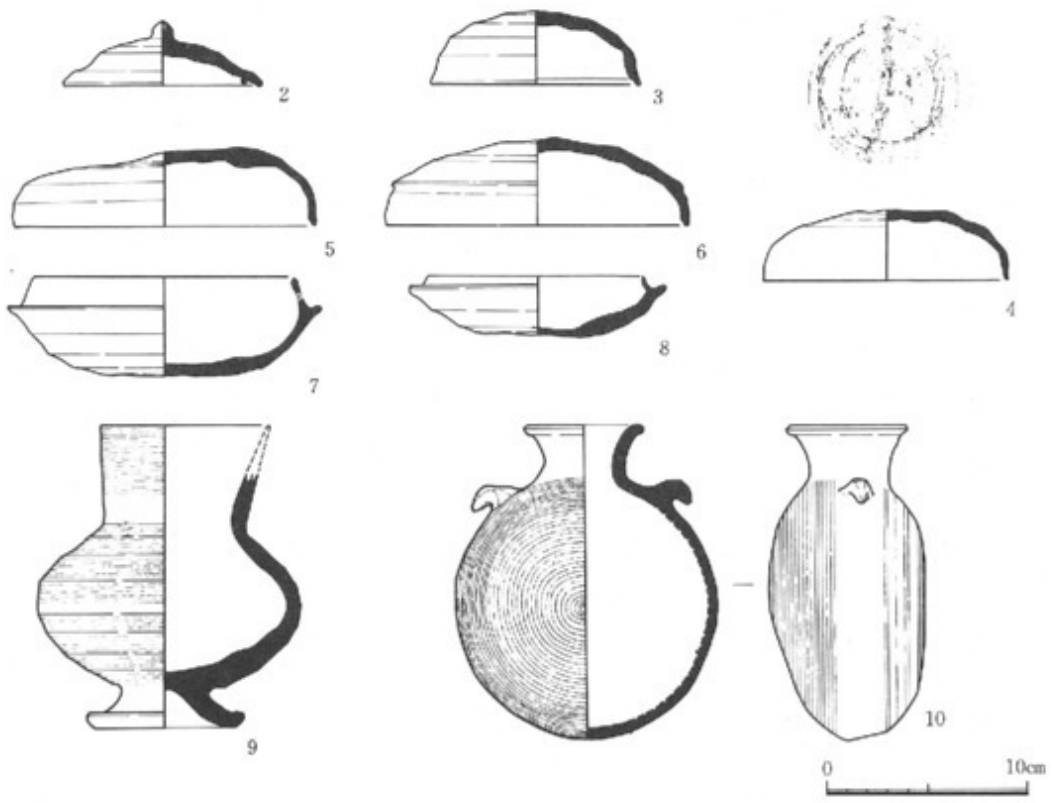


図３　墓谷古墳群採集須恵器

口径10.8cm、器高2.9cmを測る。器高が低く、全体として偏平である。立ち上がりは内傾し、非常に低い。灰色を呈し、黒色粒を多く含む。9は台付蓋。口径8.3cm、器高15.1cmを測る。ほぼまっすぐに伸びる頸部をもち、口縁部から体部にかけてカキ目調整を施す。短く外方へ開く高台が付く。口縁部内外面、体部上半部及び高台部にかけて自然釉がかかる。胎土に砂粒を含む。10は提瓶(ていへい)。口径6.5cm、器高15.5cmを測る。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。体部前、背面とも丸く、ふくれ気味。肩部に小型のカギ状把手を一対付ける。体部前面にはカキ目調整を施す。暗灰色を呈し、焼成は良好。

陶棺（図4・5、図版15下－11・12）　土師質亀甲形陶棺。棺蓋11と棺身12が揃うがいずれも破片。棺蓋は下縁端部にあたるもので蓋の高さが高くなる可能性が強く、平たい把手が付く。厚さ約2.0cmを測る。外面には幅2.5cm～3.5cm、高さ約1.0cmの突帯を縦横にめぐらす。胎土中に砂粒、石英等を多く含み淡黄褐色を呈す。棺身はコーナー付近にあたる破片で、厚さ約2.0cmを測る。棺身上縁外面には水平に張り出す幅6.0～9.0cmの鍔を貼り付けている。外面には幅約1.0cm、高さ0.6～1.0cmの比較的細い突帯を縦方向にめぐらす。焼成は良好。棺蓋、棺身ともに外面に赤色顔料が塗布されている。このように両者には類似した点が多く見受けられるが、外面に貼り付けられた突帯をみると、棺蓋には断面が台形の細いもの、棺身には幅の広いもの、と異なっているところから、こうした意匠の異なった棺蓋棺身を合わせて、1個体として使用したものなのか、あるいは別々に2個体の陶棺が存在したものなのか、不明である。

鉄刀（図6－13・14）　13・14は鉄刀。2点とも身部の刀片である。保存状態は良好とはいえず、錆のため外面が剝落し刃部を欠いている。

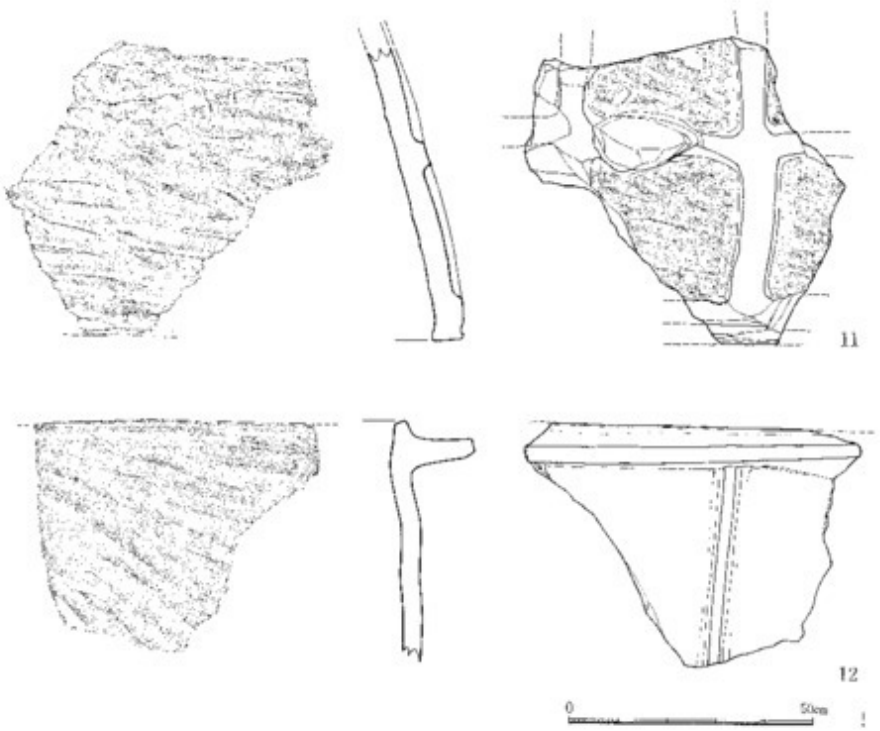


図4　墓谷古墳群採集陶棺

3　おわりに

以上、墓谷古墳群出土遺物について紹介した。Ｖ様式の壺の出土から、墓谷古墳群では弥生時代後期の遺構の存在が想定できる。また、最近市域では、丘陵部に弥生時代の遺跡の存在が知られるようになってきた。特に周辺地域においては、Ｖ様式の甕や柱状片刃石斧が出土した宮谷古墳群[1]、Ｖ様式の手焙形土器等が出土した北条遺跡が挙げられる[2]。今後、発掘調査の進展にともなって、墓谷古墳群を含めた、丘陵部における弥生時代の遺跡の実態が明らかにできるものと思われる。

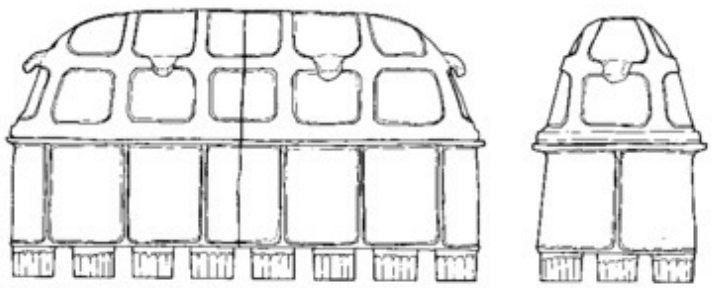


図５　陶棺推定復原図

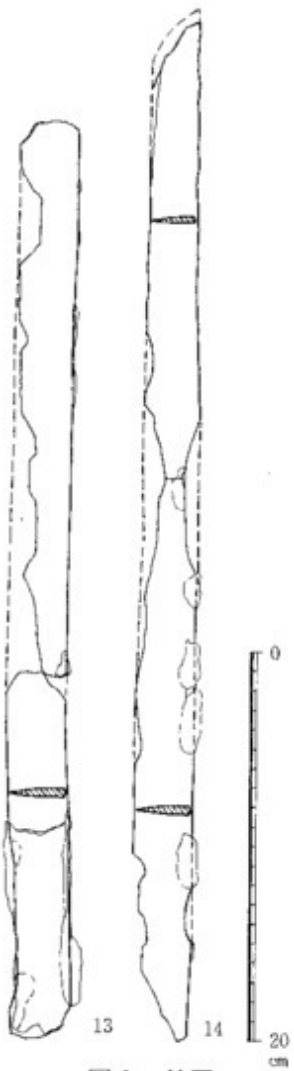


図６　鉄刀

須恵器はＴＫ10～217号窯にほぼ併行するものである[3]。北条青少年教育センターの南西で行われた墓谷川の堰堤工事の際に出土している。北井氏によれば、当時ここには墓谷川を挟んで径約10ｍの古墳状高まりが２基認められ、しかも、石室が露出していたとのことである。それらは砂防工事によって破壊され、今は見る影もないが、この古墳群を形成する横穴式石室を内部主体とした２基の円墳の存在が想定されるところである。一方、墓谷古墳群に北接する四條畷市域で陶棺が採集されたことから、この古墳群の範囲は北へ若干広がると推定できる。採集須恵器・陶棺の年代から明らかなように、墓谷古墳群は６世紀中葉から７世紀前半まで営まれた後期群集墳であるといえよう。

註

（１）　1987年度大東市教育委員会による発掘調査で出土。（標高約40ｍの地点で出土。遺構は検出されなかった。）

（２）　本書第３章「北条遺跡」参照。
1986年度　大東市教育委員会による発掘調査で出土。「北条遺跡Ⅱ」現地説明会資料（1987・６・21）

（３）　田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』（1966）

3　西諸福遺跡出土・採集遺物

三好孝一

1　はじめに

大東市諸福７丁目周辺に所在する西諸福遺跡は、東大阪市高井田遺跡などとともに、古代河内潟の周辺に立地する遺跡の中でも特に低地部に所在する、注目すべき遺跡として知られている。しかし、本格的な発掘調査は行われておらず、その実態が明らかにされていないのが現状である。

当遺跡については、工事中の不時発見ではあるが、幸い当時の関係者の献身的な調査によって得られた記録類の一部と出土品が大東市立歴史民俗資料館に保管されており、小稿ではそれらの資料を基にして、西諸福遺跡の様相を明らかにすることとしたい。

2　調査の経緯

1957年５月８日、当時、大東市立住道（すみのどう）中学校で教鞭をとられていた東宏氏が、現在のＪＲ

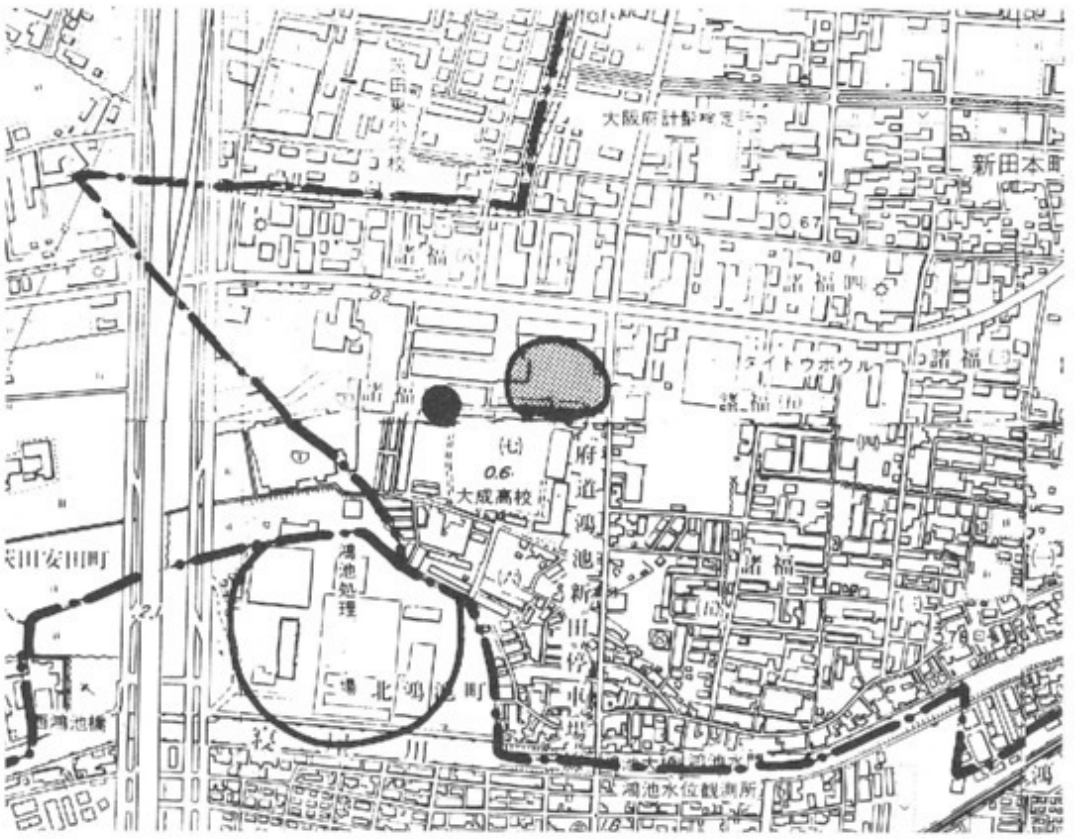


図１　西諸福遺跡の位置

片町線鴻池新田駅北方の松下電気産業諸福工場建設予定地造成工事の際、北側府道脇に設置されていた農業用水路を予定地南側に付け替える作業を行っている折、その排土中に多数の遺物が包含されているのを発見したことにより、この遺跡の存在が明らかになった。2日後の5月10日に調査が行われ、調査カードが現在保管されている。記録によると、出土地点のおおまかな位置のほか、直線、簾状、格子目、流水などの各種の紋様で加飾された土器片、石斧、石槍、石鏃、石庖丁など多数、太型蛤刃石斧、用途不明の木製品多数、鹿角製品および獣骨が採集されたことが記載されている。さらに、出土遺物の写真が添付されており、これには石庖丁2点、石斧1点が撮影されている。また『以後、本調査35年8月10日』という補筆がみられるが、この「調査」が如何なるものかは不明である。

その後、『大東市史』において紹介され、『頁岩質石庖丁三、緑色片岩質石斧一、サヌカイト石槍二、石匙一、木の葉型石鏃、弥生中期II・III様式土器片多数、木器破片、木杭、鹿骨製品イノシシの骨、スッポン、シジミ、クルミ、蓮の実』など多数の遺物が出土したことが記されている。

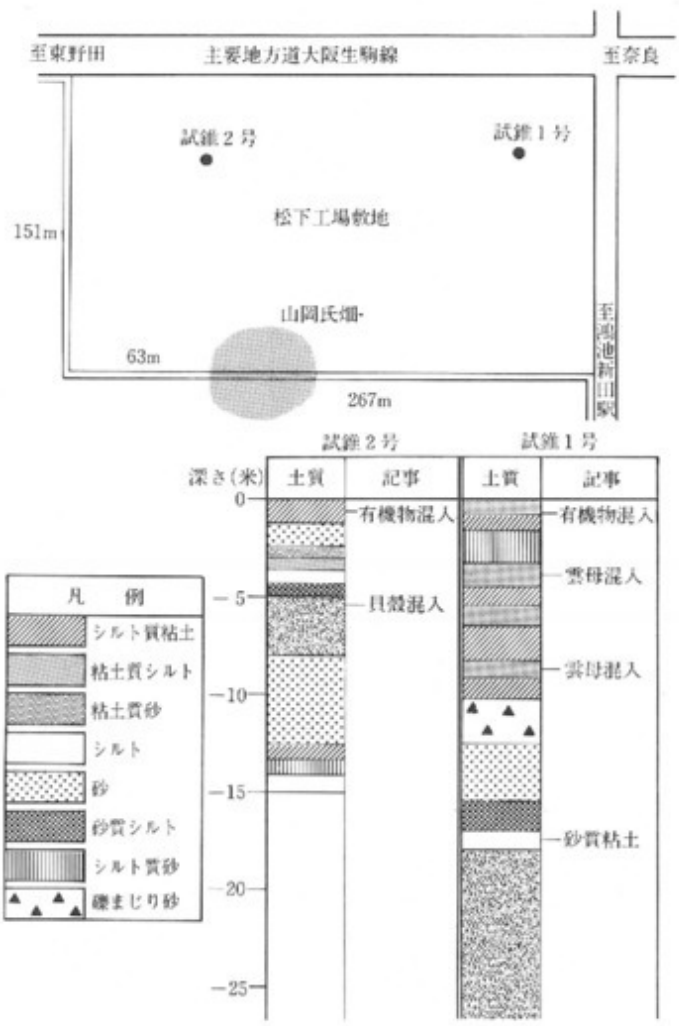


図2　遺物採集地点及びボーリングデータ概略図
(昭和32年5月10日の調査カードより作成)

3　出土遺物

上記の調査カードや『大東市史』に記された資料は、保管中に若干の混乱をきたし、そのすべてを再整理して紹介することはできないが、土器、石器を中心として、以下に述べることとする。

＜出土状況・地点の検討＞

当時の記録を再確認すると、遺物が出土した地点は標高T.P.＋2.1mの松下電気産業工場敷地内の南西端部より東へ63mに位置する山岡氏所有の畑地を中心とした地点に集中する。

東氏の記憶によれば、上下2枚の遺物包含層が存在したようであ

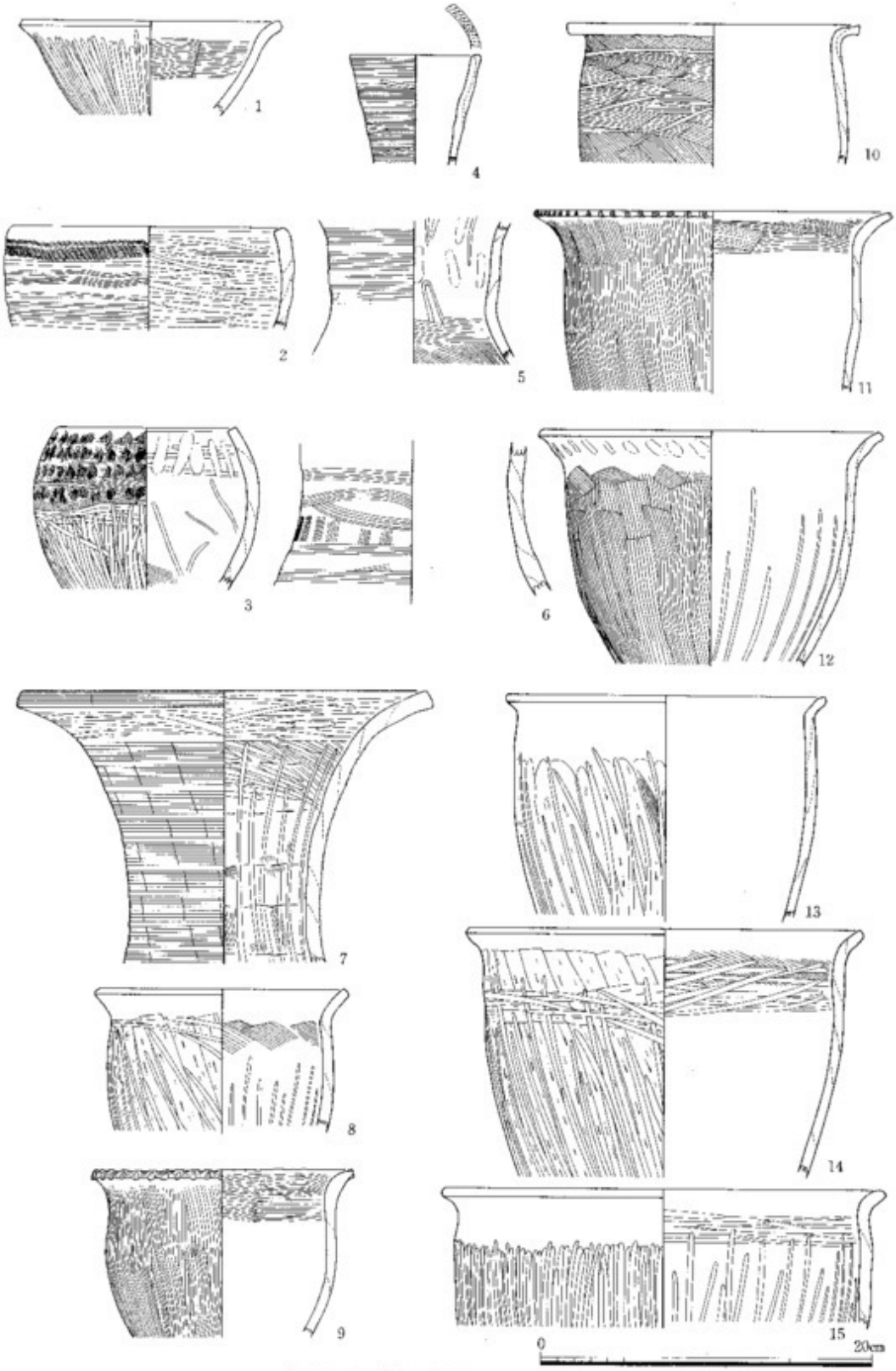


図3　西諸福遺跡採集土器－1

り、また、この付近のみ南北にのびる帯状の高まりが見られたとのことであった。

＜出土遺物の検討＞

今日残されている遺物の中で確実に当遺跡出土の遺物としては、弥生時代II期土器片（壺、甕、鉢）、緑色片岩製石庖丁２点、粘板岩製石庖丁１点、石斧１点、サヌカイト製尖頭器３点、不定形刃器１点、二次加工のある剥片１点、研磨痕のある剥片１点、研磨痕のある石片１点、木杭残欠、各種の種子、獣骨がある。

先述した資料中に掲載されていない遺物も多少含まれてはいるが、当時の資料に紹介された内容とほぼ一致するため、これらを西諸福遺跡出土遺物としてあやまりのないものと考えられる。なお、後の観察表には、それらの対照を行っている。

個々の遺物については後の観察表に詳述し、ここでは全体から見たそれらの遺物の特徴について述べる。

土器　破片が多く図化できないものがほとんどであるが、器種には壺、甕、鉢がみられる。壺（図３－３～７・写真１－27・図４－21～28）では、広口壺、直口壺、無頸壺の三者が採集されている。これらに施される紋様として、各種の櫛描紋（直線、扇形、波状、平行斜線、列点・流水）さらに直線紋と扇形紋を巧みに組み合わせた疑似流水紋（図４、19、24）があるが、いずれもII期の特徴をよく表出したものである。甕（図３－８～15・図４－５）は、周辺部に所在する同時期の遺跡から出土する通常のタイプとともに大和型（図４－11）、口縁端部に刻み目紋と体部に直線紋を施す摂津型、さらに口縁上端部をやや拡張し、外面にヘラ描き平行斜線紋を施す、類例のとぼしいものなどが見られる（図４－20）。底部破片にはこの時期によく見られる木の葉型をもつ例が存在している。このほか、同一整理箱内にI期に属すると見られる土器が存在するが、それらについては保留しておきたい。

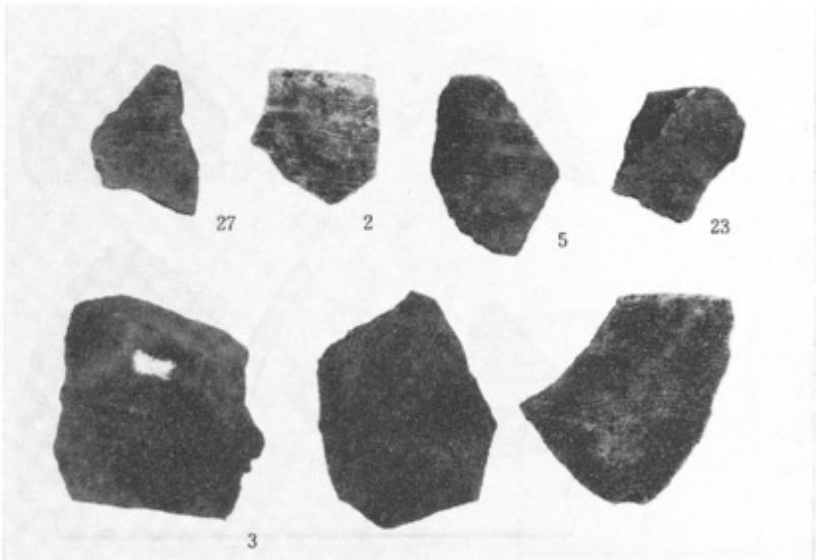


写真１　西諸福遺跡・鍋田川遺跡（右下２点）採集土器

石器　図５－S－１．S－３．S－４は石庖丁で緑色片岩製のものと粘板岩製のものの両者がみられる。前者には半月形直線刃と同じく半月形の例、後者には形態不明の例が存在する。これらのうちS－

2は穿孔後裏面が剥離し、S－4は刃部に使用痕ともとれるわずかな磨滅がみられるが、紐穴がみられず未製品とすべきであろう。図6－S-10は石斧。深成岩類を使用したもので、断面は偏平片刃石斧様の形を呈し、刃部は両側より直線に作り出されている。定形化された石斧ではなく、刃部にもほとんど使用痕が認められないことから縦斧か横斧かの判断はつけがたいが、刃部が両方より作り出されていることから縦斧を意図して製作されているのかもしれない。尖頭器（図6－S-5．S-7）は3点が現存している。いずれもサヌカイト製でS-5．S-6は側縁部に刃潰がみられるため基部にあたるものであろう。図6－S-8は不定形刃器。自然面を打点とする縦長素材の下端部および一側縁に細部調整を加えたもので、エンド・スクレイパー様を呈する。図6－S-9は二次加工のある剥片で、原礫面を素材とする比較的大きな横長剥片を素材とし、下端部に粗い二次加工を施す。刃部には微細な剥離痕および刃潰れがみられる。図5－S-3は研磨痕のある石片で、薄く剥離された粘板岩質の石材の両面を比較的丁寧に研磨したものである。石庖丁の未製品ともとれるが、中央部分からカットされ、その部分にも研

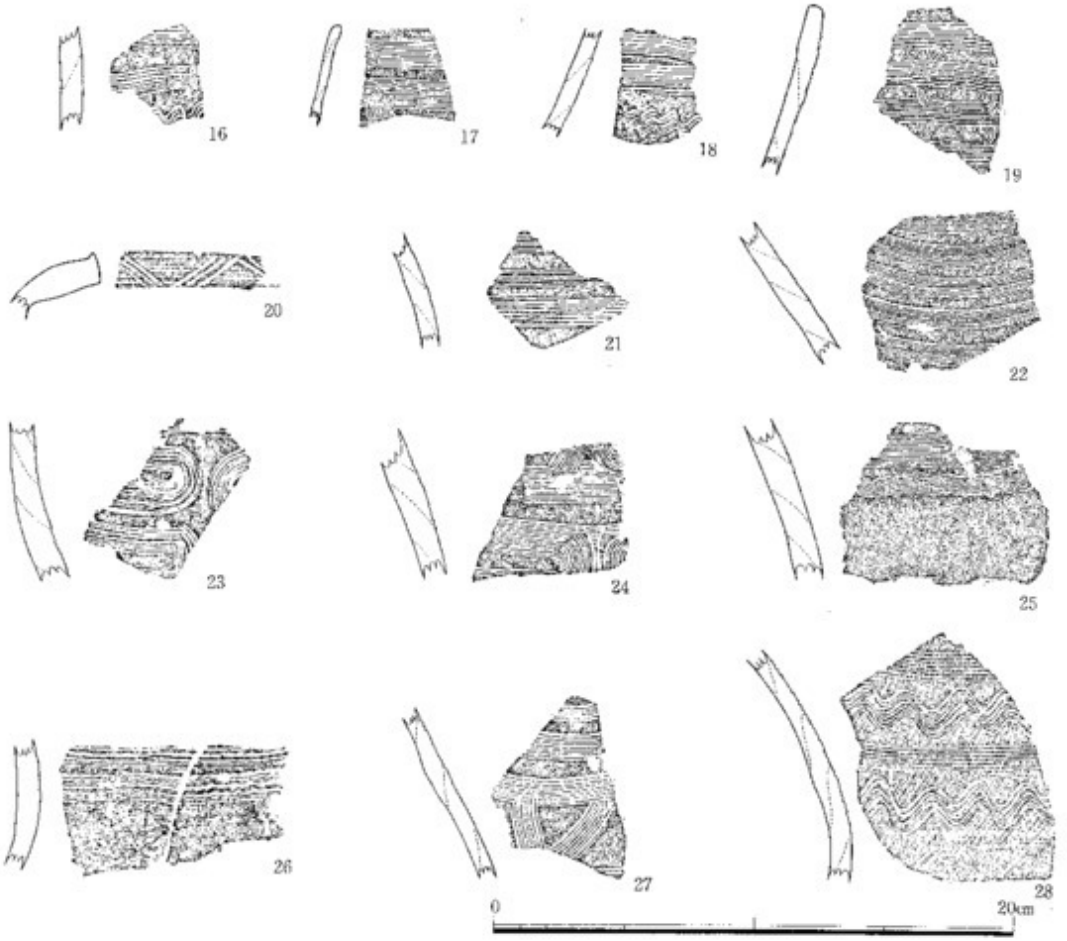


図4　西諸福遺跡採集土器－2

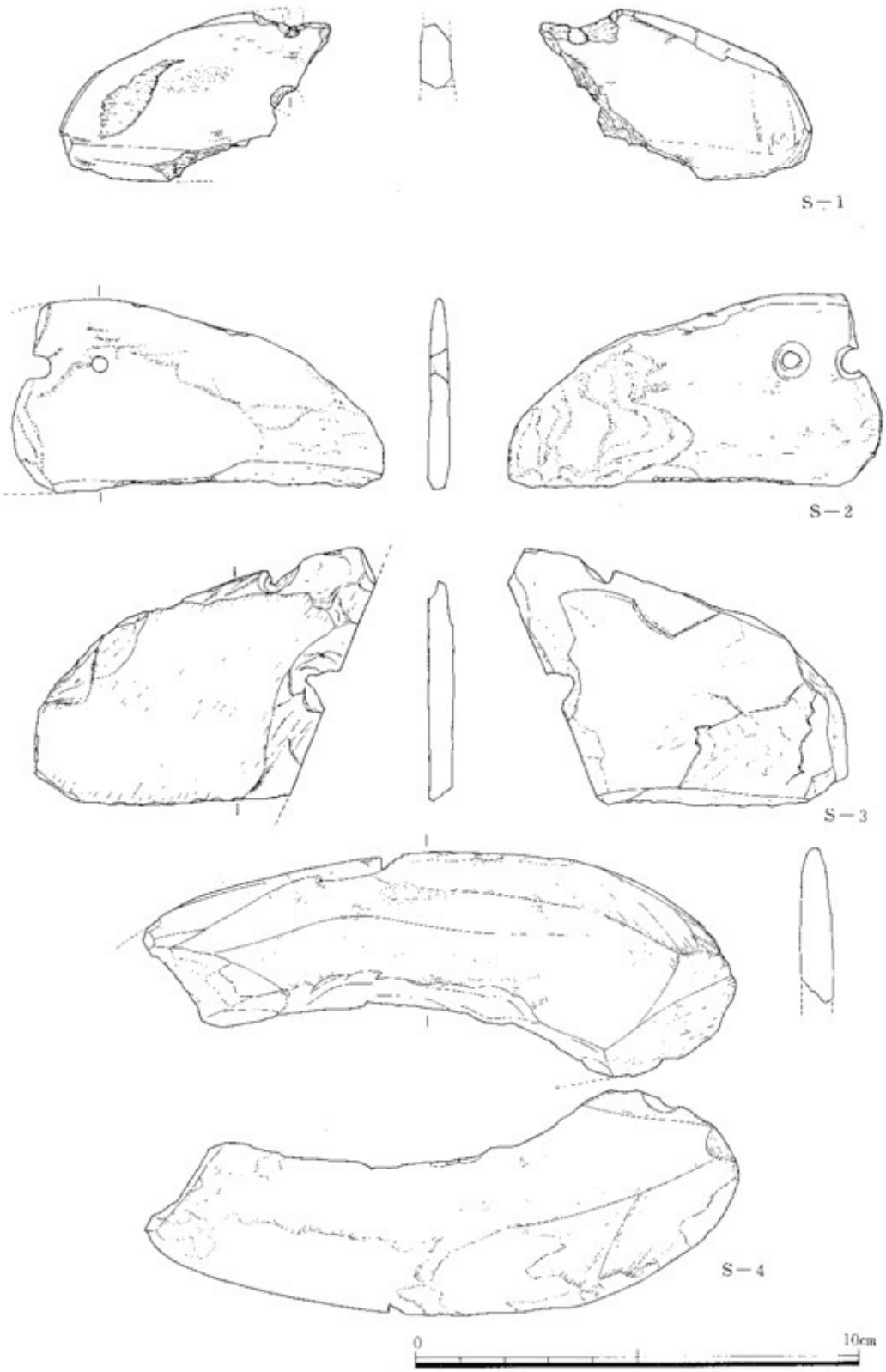


図５　西諸福遺跡採集石器－１

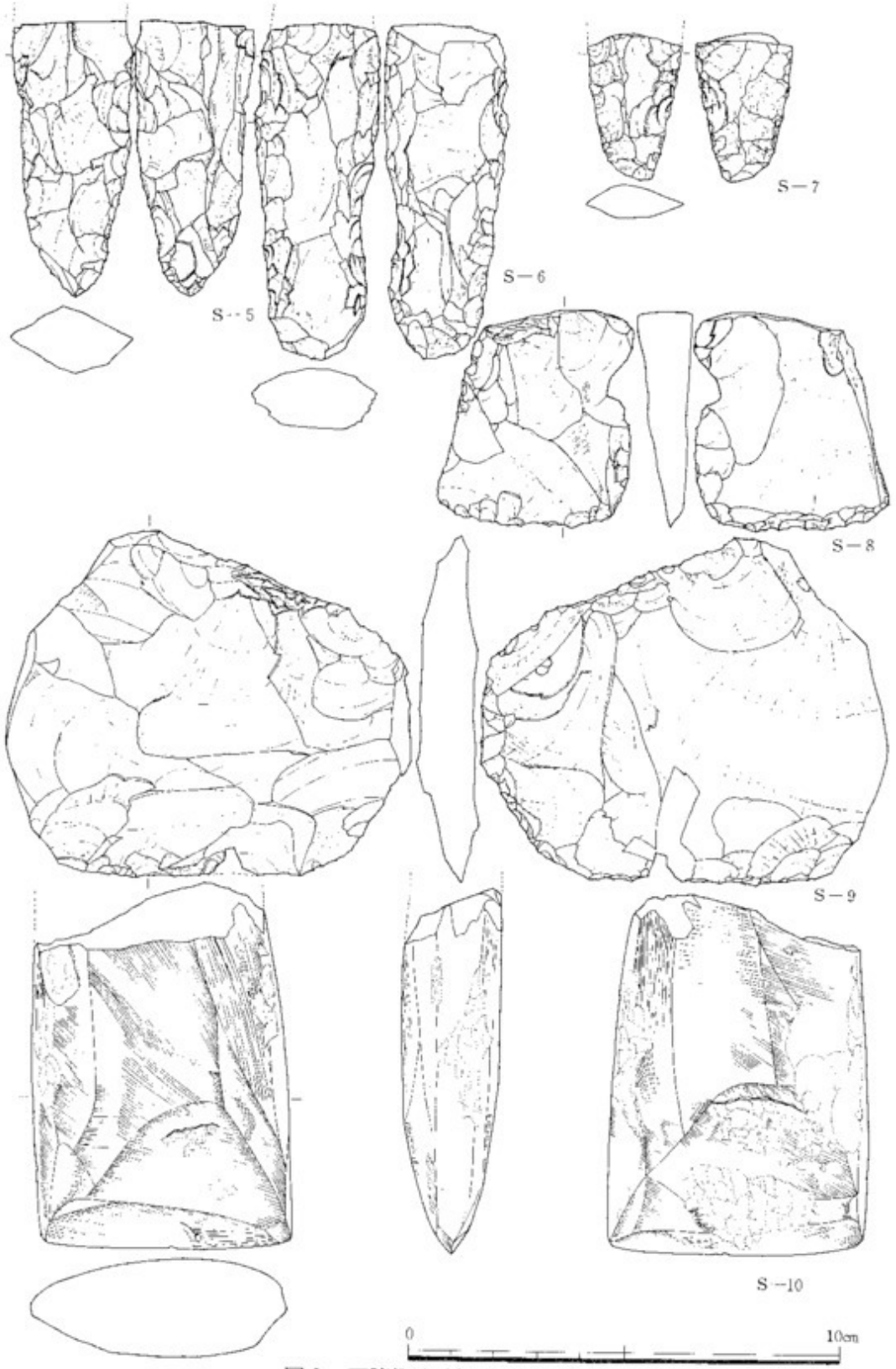


図 6　西諸福遺跡採集石器－ 2

磨が施されていることにより、他の用途を考えるべきであろう。このほか、『大東市史』においてサヌカイト製の木の葉型を呈する凸基無茎式の石鏃が1点紹介されているが、現在散逸して残っていない。

木器　原形を留めるものはなく、わずかに木杭とされるものが自然乾燥し変形しながらも、今日に伝わっている。

種子・獣骨類　数は少ないながらも残されている。特に桃核には中心に達する穿孔がみられるものが存在する。

4　まとめ

以上、西諸福遺跡出土遺物の紹介を行ってきた。土器、石器を見てゆくならば、時期的には弥生時代中期前葉にあたるII期に属するものが大半を占める。また、資料中に多種多様なものが含まれ、摩滅を受けてないことから決して流されてきたものではなく、この地に人々がムラを営んだことは確実である。河内潟縁辺部に立地する集落の中でも、最も西側の水際に成立した西諸福遺跡が、如何なる状況のもとで当地にこの時期ムラを営んだのかを考える場合、河内潟全体から検討する必要があろう。

次に遺物をみた場合、土器では摂津型の甕のほか、紀伊型手法の影響の下に製作されたと考えられる外面ヘラ削りを施す甕、口縁端面に刻み目紋を巡らせ、粗いハケ目調整を施す大和型の甕が採集されている。なお、生駒西麓産の胎土をもつ土器が少ない点にも注目できる。さらに、石器では石庖丁の石材に紀ノ川流域付近に産出する緑泥片岩を使用するものと、北部地域の遺跡から出土する例の多い黒色を呈する粘板岩質のものの二者がみられる。以上のことから、各地域との活発な交流が窺われる。

同じ河内潟周辺部に立地する遺跡の中でも、調査が比較的多く実施されている南部地域と比べて、ややもすれば忘れられがちであった当地域ではあるが、東方よりみた場合、眼前にそびえる生駒山脈が当地域の大きな目標物となり、また、古くより峠越の交通路が発達していたことを考慮すれば、交通の要衝とされたことは充分に考えられ、今後、調査が進むにしたがって、その様相が明らかになってゆくことは確実であろう。

従来、通称『諸福遺跡』とされていた当遺跡は、1958年の調査カードに『西諸福遺跡』と記載されていることにより、後者を正式な名称とすることを本報告で明らかにしておきたい。

小文を草するにあたって、当時の出土状態を東宏氏、西尾宏氏より多大な御教示を得ることができ、また、石器の観察にあたって、松山聡氏より助言を得た。記して感謝の意を表します。

表1　土器観察表

図番号	器種	法量（cm） 口径 胴径 残存高	形態上の特徴	手法上の特徴	色調 内外断	胎土	焼成	備考
3－1	鉢	15.4 5.8	口縁部：体部から屈曲しながら上外方にのびる。端部はやや面をもつ。 体　部：上外方にやや内湾しながらのびる。	口縁部：内面　ヨコナデ。 外面　ヨコナデ。 体　部：内面　ナデののちヨコハケ。 外面　タテヘラミガキ。	暗灰橙色 〃 〃	5㎜以下の長石、石英含む。	良好 軟質	外面煤付着
3－2	鉢	16.2 17.2 5.8	口縁部：上方に内弯しながらのび、端部は丸い。 体　部：上方に内弯しながらのびる。	口縁部：内面　ヨコヘラミガキ。 外面　ナデ。 体　部：内面　ヨコヘラミガキ。 外面　ナデののち、直線紋2帯、波状紋1帯、紋様帯間ヘラミガキ。	灰橙色 〃 橙色	1㎜以下の石英、長石、チャート含む。	良好 硬質	
3－3	無頸壺	10.6 13.7 10.3	口縁部：上方に内弯しながらのび、端部はやや面をもつ。 体　部：上方に大きく内弯しながらのびる。	口縁部：内面　ユビオサエののち粗いヨコミガキ。 外面　粗いナナメハケののち扇形紋。 体　部：内面　ナデののち粗いミガキ。 外面　ヨコミガキののちタテミガキ。	黒色 緑褐色 〃	微細な長石石英、雲母含む。	良好 硬質	『市史』
3－4	無頸壺	7.6 － 6.8	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部はやや丸い。 頸　部：上外方にまっすぐのびる。	口縁部：内面　ナデ。 外面　ナデののち直線紋をめぐらし、端部に列点紋を施す。 頸　部：内面　ナデ。 外面　ナデののち直線紋をめぐらす。紋様帯間ヘラミガキ。	灰橙色 〃 黒橙色	1㎜以下の石英、長石チャート含む。	不良 硬質	
3－5	広口壺	－ － 10.5 頸径：9.8	頸　部：上外方にやや外反しながらのびる。 体　部：頸部から下外方にまっすぐ開く。	頸　部：内面　ユビオサエののちナデ、まばらなヘラミガキ。 外面　ナデののち、直線紋をめぐらす。紋様帯間ヘラミガキ。 体　部：内面　ハケののちナデ。 外面　ナデ。	灰褐色 〃 〃	1㎜以下の長石、石英、角閃石、金雲母含む。	良好 硬質	生駒西麓産
3－6	広口壺	－ － 9.4 頸径：13.4	頸　部：上方にやや外反しながらまっすぐのびる。 体　部：頸部から下外方にまっすぐのびる。	頸　部：内面　ナデ。 外面　ナデののち直線紋をめぐらす。 体　部：内面　ナデ。 外面　ナデののち直線紋頸部との境に縦位の直線紋を施す。	暗褐色 〃 〃	1㎜以下の石英、長石、角閃石、雲母、やや多く含む。	良好 やや軟質	生駒西麓産
3－7	広口壺	24.3 － 16.6 頸径：11.6	口縁部：上外方に外反しながら大きく開く。 頸　部：上方にやや外反しながらのびる。	口縁部：内面　ヨコヘラミガキ。 外面　ナデののち直線紋をめぐらす。 頸　部：内面　ナナメハケののちヨコヘラミガキ。縦位のまばらなヘヘミガキ。 外面　ナデののち直線紋（部分的に停止）。	褐色	3㎜以下の長石、石英、角閃石含む。	良好 硬質	生駒西麓産

図番号	器種	法量（cm）口径 底径 現存高	形態上の特徴	手法上の特徴	色調 内面 外面	胎土	焼成	備考
3－8	甕	14.6 13.5 8.9	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部はやや曲をもつ。 体　部：上方にやや内弯しながらのびる。	口縁部：内面　ヨコナデ。 外面　ヨコナデ。 体　部：内面　ナナメハケのちヨコナデ。下位をまばらなタテヘラミガキ。 外面　ヘラケズリのちまばらなナナメヘラミガキ。	褐　色 〃 〃	1㎜以下の石英、長石、角閃石含む。	良　好 やや軟質	生駒西麓産
3－9	甕	15.5 13.7 10.4	口縁部：上外方にやや外反しながらのびる。 体　部：下方に内弯しながらすぼまり気味にのびる。	口縁部：内面　粗いヨコハケ。 外面　粗いタテハケ。端部は上・下方より刻み目粘土を貼す。 体　部：内面　ナデ。 外面　荒いタテハケ。	暗灰褐色 〃 暗灰褐色	1㎜以下の石英、長石、少量含む。	不　良 軟　質	外面煤付着。
3－10	甕	17.6 16.8 8.5	口縁部：上外方に大きく外反し、端部は丸い。下端部はやや垂下する。 体　部：上方にやや内弯しながらのびる。	口縁部：内面　ナデ。 外面　ナナメハケ。 体　部：内面　ナデ。 外面　ナナメハケののちまばらなヨコヘラミガキ。	黒灰色 〃 〃	1㎜以下の石英、長石、雲母含む。	良　好 硬　質	外面煤付着。
3－11	甕	11.3 17.8 11.0	口縁部：上外方にやや外反しながらゆるやかにのび、端部は面をもつ。 体　部：上外方にやや開きながらのびる。	口縁部：内面　粗いヨコハケ。 外面　粗いタテハケ。 体　部：内面　丁寧なナデ。 荒いタテハケ。	暗灰褐色 〃 〃	1㎜以下の石英、長石、チャート雲母含む。	良　好 やや軟質	外面煤付着。
3－12	甕	20.3 － 14.3	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部はやや丸い。 体　部：上外方に内弯しながら大きく開く。	口縁部：内面　ナデ。 外面　ユビオサエ。 体　部：内面　ナデののちまばらな縦位のヘラミガキ。	灰褐色 〃 〃	1㎜以下の石英、長石、雲母含む。	良　好 硬　質	外面煤付着。内面付着物あり。
3－13	甕	19.2 18.3 13.7	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部は丸い。 体　部：上方にやや内弯しながらまっすぐのびる。	口縁部：内面　ヨコナデ。 外面：ヨコナデ。 体　部：内面　ナデ。 外面　ヘラケズリののち、部分的なナナメハケのちまばらな縦位のヘラミガキ。	暗灰褐色	1㎜以下の石英、長石、雲母含む。	良　好 硬　質	外面煤付着。
3－14	甕	23.6 11.8 15.3	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部はやや面をもつ。 体　部：上方に開きながら、まっすぐのびる。	口縁部：内面　ヨコナデ。 外面　ナナメハケののち、ヨコナデ。 体　部：内面　上位、ナナメハケののち丁寧なナデ。ヨコヘラミガキ、下位、ナデ。 外面　ヘラケズリののち、縦位、横位のヘラミガキ。	暗褐色 黒灰色 〃	1㎜以下の石英、長石、雲母含む。	良　好 硬　質	外面煤付着。内面付着物あり。
3－15	甕	26.6 15.1 8.5	口縁部：上外方にまっすぐのび、端部は丸い。 体　部：上方にまっすぐのびる。	口縁部：内面　ヨコナデ。 外面　ヨコナデ。 体　部：内面　上位、ヨコヘラミガキ、下位、ナデののちまばらなヘラミガキ。 外面　タテヘラミガキ。	暗灰褐色 〃 〃	3㎜以下の石英、長石、雲母含む。	良　好 やや軟質	

「市史」は、大東市史に掲載されているもの。

4　大東市の埴輪

――大東市立歴史民俗資料館所蔵の埴輪の検討――

河内一浩

1　はじめに

大東市域で円筒形埴輪の囲繞が確認されたのは、昭和47年に調査が行われた堂山１号墳がはじめてである[1]。堂山１号墳を除き市域で埴輪を出土した遺跡は現在まで11件を数える。これは近接地域の埴輪出土件数と比較すると極めて少なく、いわば埴輪の「空白地帯」となっている。こうした空白地帯の形成の要因をさぐるには、より巨視的な立場から研究を行っていかなければならない。現在、大東市域出土の埴輪の一部は同市立民族資料館に保管・展示されているが、詳細な検討が加えられていない。よって小稿では、これらの埴輪の詳細を紹介し、あわせて近接地域との比較検討を加え、歴史的位置づけを試考したい。

2　資料館保管の埴輪

峯垣内古墳（図２・図版15）　峯垣内古墳は野崎３丁目に所在した前方後円墳で、現在は破壊され見ることができない[2]。同古墳からは４突帯５段の円筒形埴輪に復原できる埴輪片が採集されている（第２－１）。最下段と最上段が欠損していることが器壁に残された調整方法から窺える。その外面調整は一次調整にタテハケを用い、二次調整に板ナデを施している。内面調整はナデにより、部分的に指頭圧痕が認められる。スカシ孔は円形で、段違いに穿孔されている。器壁には黒斑が認められ、野焼きによる焼成である。製作時期については、埴輪は川西編年のⅢ期[3]に属しているが、同古墳から須恵器の出土が認められる点を考え合わせると、５世紀中葉でも新しい時期に属するものと思われる。

六地蔵古墳（図３・図版15）　六地蔵古墳は寺川に所在する円墳で円筒形埴輪が囲繞されていることが確認されている[4]。副葬品については不明であるが、東西方向の木棺直葬の内部施設が確認されている。資料館には同古墳出土の円筒形埴輪が２本保管されている。２は完形品で４突帯５段の形態を有し、口径19.3cm、器高37.0cm、底径14.8cmを測る。外面調整は一次調整にタテハケを施し、二次調整を欠く。内面は整形時にタテ方向の指ナデを施し、いたるところに粘土紐の継目が残る。スカシ孔は楕円形を呈し、段一杯に穿孔される。突帯は断面の形態が三角形を呈している。底部調整については認められない。焼成は土師質で、黒斑は認められない。３は最上段を欠損するが形態、手法は２の円筒形埴輪と同じである。製作時期は、製作技法が簡略化されていて、川西編年のⅤ期に属し６世紀に比定できよう。

寺川瓦堂遺跡（図４）　寺川瓦堂遺跡は野崎に所在した瓦堂廃寺の一角に位置し、飛鳥～白

風に寺院造営のために破壊された古墳と考えられる[5]。古墳の痕跡は確認されていないが、同所から数点の埴輪が出土した（図４）。出土した埴輪はいずれも円筒形埴輪で、細片であるため全体の形態は不明である。４は外面一次調整をタテハケ、二次調整にナデを用いる。内面もナデ調整による。突帯はやや崩れた形を有するが、断面の形態は台形を呈す。５は外面一次調整がナナメハケ、二次調整にヨコハケが施される。内面はナデを施した後に、タテハケを施す。突帯の位置する内面部分にヨコナデを施す単位調整が見られる。６は外面一次調整をタテハケ、二次調整にヨコハケが施される。内面はナデを施した後に、ヨコハケを施す。同破片には円形

図１　大東市域の埴輪出土古墳及び遺跡
（遺跡番号１～10は表１の遺跡名にあたる）

番号	遺跡名	墳形	副葬品及び出土遺物	備考
1	鍋田川遺跡	−	−	祭祀?
2	峯塚内古墳	前方後円墳?	須恵器	消滅
3	寺川配水場古墳	円墳	−	消滅
4	瓦堂寺院跡	〃	〃	寺跡で破壊?
5	寺川古墳群	円墳	須恵器	石棺
6	岩宮古墳群	円墳	須恵器・土師器	消滅
7	大将軍古墳	円墳	土師器	消滅
8	城の越古墳	前方後円墳?	−	消滅
9	堂山第1号墳	円墳	表2を参照	
10	六地蔵古墳	円墳	−	木棺直葬

(表中の番号は図1の番号にあたる)

表1　大東市域出土埴輪一覧表

棺内	硬玉製勾玉(1)　碧玉製管玉(10)　ガラス製丸玉(8) 滑石製紡錘車(1) 須恵器坩、瓶、把手坩
棺外	短剣(25)
副棺内	三角板革綴式短甲　三角板革綴衝角付冑　鉄刀(18) 鉄剣(3)　鉄矛(1)　鉄槍(1)　鉄鏃(198)　鍬先(5)　刀子(4)　ノミ(3)　鉄斧(1)　鉄鎌(6)

(大阪府教育委員会「堂山古墳群発掘調査概要」1973から作成)

表2　堂山第1号墳出土遺物一覧表

する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。[6] 同遺跡からは滑石模造品、須恵器、韓式系土器、土師器等が出土し祭祀遺跡の様相を示している。また円筒埴輪が数点出土しているが、その出土状況、共伴遺跡については不明で古墳に伴うものであるかどうかは不詳である。10は突帯を含む最上段の破片で、外面調整はタテハケで終了し、二次調整は省略される。内面は指ナデが施され、粘土紐を密着し、部分的ではあるがナナメハケを施している。口縁端部はヨコナデを用いて形を整えている。突帯は崩れた台形を呈する。11は最下段の破片で、外面調整にタテハケを施し、二次調整を省略している。内面は指ナデによって粘土紐を密着させ、部分的にタテハケを施している。底部には板状工具による底部調整か認められる。12は最上段の破片で、外面調整にはタテハケのみを施し、二次調整を欠く。内面は指ナデによって粘土紐を密着させ、部分的にナナメハケが施される。口縁端部にヨコナデを施す。13・14は突帯を含む胴部破片で、外面調整にはタテハケのみ認められ、二次調整を欠いている。内面は指ナデを用いた後に部分的にナナメハケを施す。14に円形のスカシ孔が見られる。

のスカシ孔が認められる。7は外面一次調整をタテハケ、二次調整にヨコハケが施されている。内面はナデ調整が施されている。突帯は高く、断面形はM字状を呈する。8は外面一次調整をタテハケ、二次調整にヨコハケが施される。内面はナデ調整が施されている。突帯は5と同じである。9は外面一次調整をタテハケ、二次調整にA種ヨコハケが認められる。内面はナデ調整より、ハケメを消している。

以上、瓦堂遺跡の埴輪は基本的に、外面調整はタテハケの後にヨコハケを施す手法で、ヨコハケはA種に限定できる。焼成は土師質で、器壁に黒斑を有することから、野焼きによるものと考えられる。製作時期は川西編年のII期に属し、5世紀前半に位置づけられる。

鍋田川遺跡（図5）　中垣内に所在

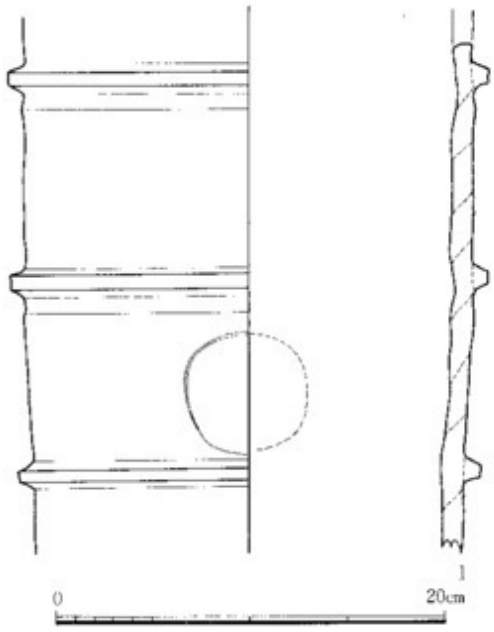


図2　峯垣内古墳採集埴輪

以上鍋田川遺跡出土の埴輪は、外面調整がタテハケだけで終了し、内面は指ナデで部分的にハケメを用いていることが窺える。製作時期については、非常に簡略化された技法を用いている点や底部調整が芝山古墳と類似するところから川西編年のV期に属し、6世紀代に比定できよう。

3　資料館保管以外の埴輪

堂山第1号墳　堂山第1号墳は寺川に所在する径25mの円墳で、1962年の調査によって木棺直葬の主体部をもつことが判明している(7)。その際に墳丘部を巡る円筒形埴輪69本が確認されている。復原された埴輪は4突帯5段の円筒形埴輪である。外面調整は一次調整がタテハケ、二次調整にC種ヨコハケを施している。内面はナデ調整を施した

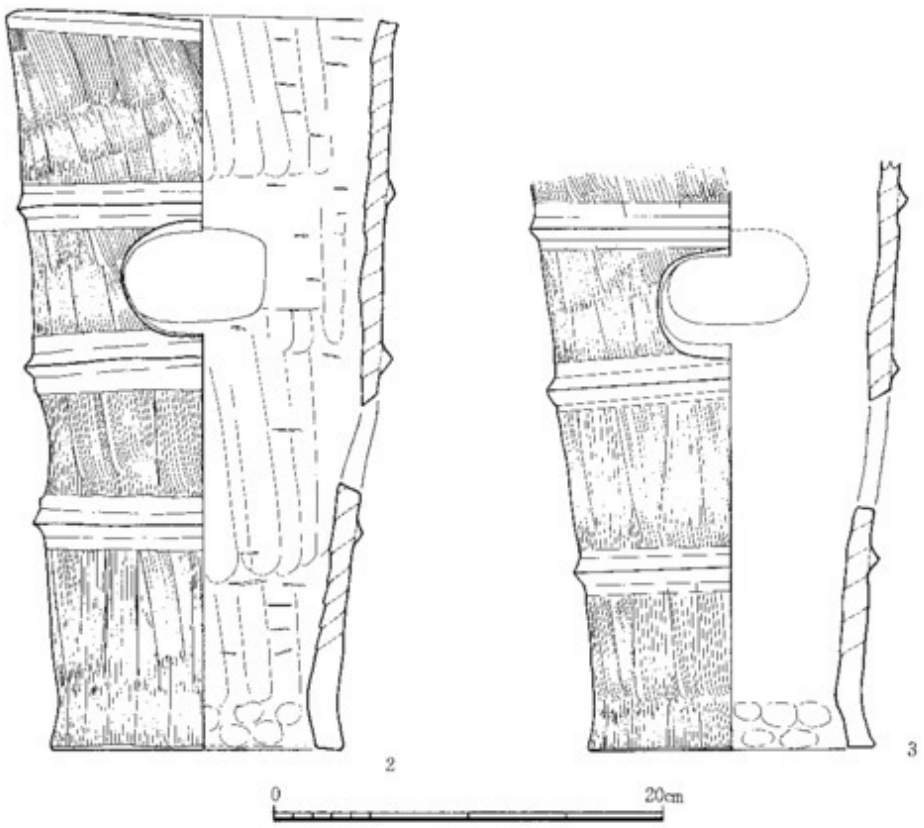


図3　六地蔵古墳出土埴輪

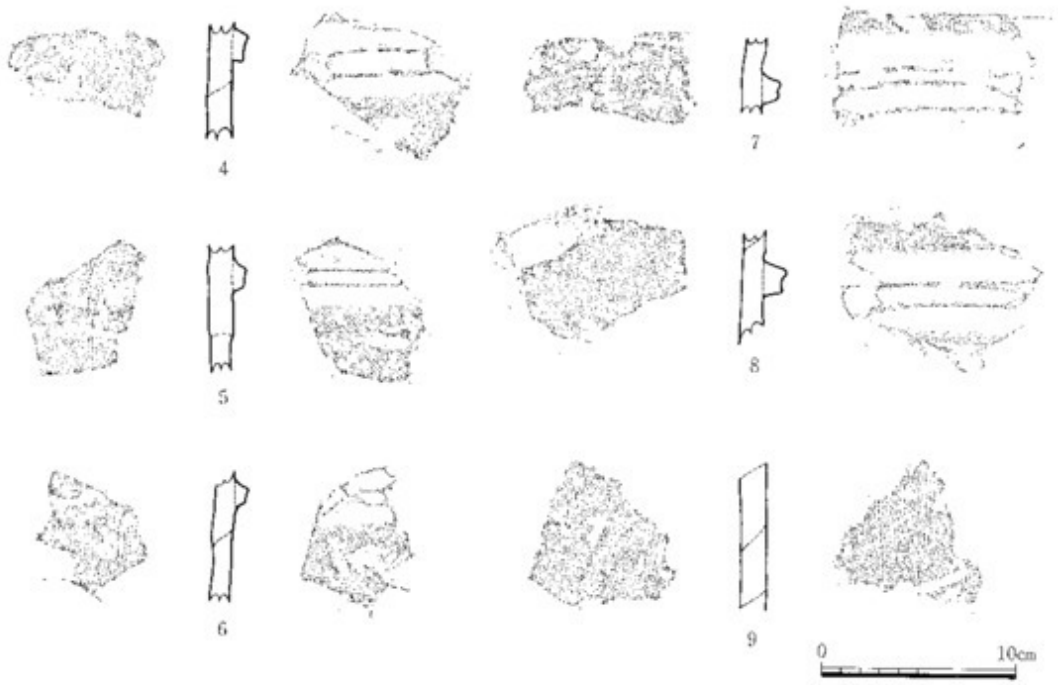


図 4　瓦堂遺跡採集埴輪

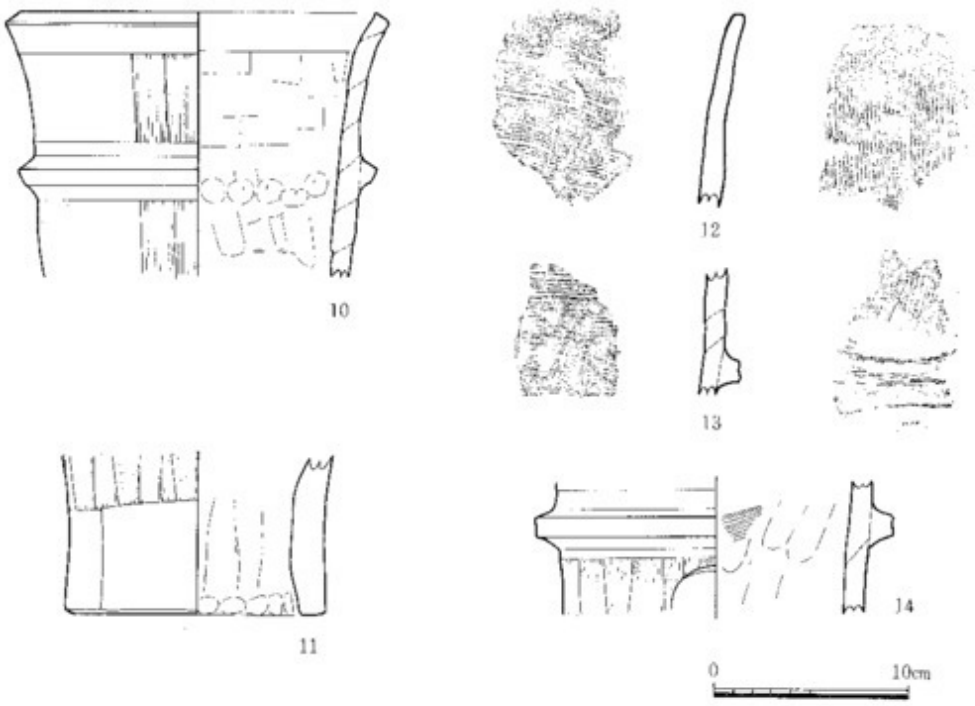


図 5　鍋田川遺跡採集埴輪

後にハケメ調整を施す。スカシ孔は円形で2段目と4段目に段違いに穿孔されている。突帯はしっかりとしたM字状を呈している。焼成は土師質で、黒斑がみられる。製作時期については、焼成において黒斑が認められることから古い時期に比定できるが、C手法のハケメをもつので新しく位置づけたい。調整技法から川西編年のⅣ期に属し、製作年代は5世紀後半に比定できる。同古墳は発掘調査によって多くの遺物が出土し、第2表に示した遺物の年代観も、埴輪の製作年代と矛盾しない。

宮谷古墳群　宮谷古墳群は宮谷に所在する古墳群で、十数基から構成されている。1987年度の調査で円筒形埴輪片が出土している[8]。出土した埴輪は細片であるが、3突帯4段の埴輪が復原できる。観察できた資料の外面調整はタテハケのみを施し、二次調整を省略する。スカシ孔は円形である。突帯は非常に崩れ、最下段には断続ナデ技法が認められる。焼成は土師質であるが、黒斑は認められない。製作時期については、簡略化した調整が施されることから川西編年のⅤ期に属し、6世紀代に比定できる。

4　大東市域出土の埴輪の歴史的位置づけ

A　器壁にみられるハケメの変化

大東市内出土の埴輪については、前述したように、その製作技法は時の流れによる変化が認められる。これまで紹介した埴輪はごく一部であり、地域的、量的な片寄りがある為、若干の問題は残るが、埴輪製作上の技術的変化からアプローチしたい。

大東市内出土の埴輪は畿内で一般的にみられる埴輪と同様、外面調整がタテハケ、ヨコハケ、ハケメの省略の順に手法が変化する[9]。例えば外面調整においては、タテハケの後ヨコハケを各段に必ず施し、内面調整においては、複合調整から単位調整への技術的推移が認められる。こうした現象は、製作集団内で絶えず技術変革が行われてきたことが要因であり、この変革が埴輪の需要増加に伴う大量生産を可能にしたことが窺える。

B　二次調整ヨコハケの成立とその過程

川西編年のⅡ期と位置づけた寺川瓦堂遺跡では、外面二次調整にA種ヨコハケを施している。川西氏によれば、畿内においては二次調整にA種ヨコハケが用いられたのはⅠ期のものにも見い出せるが、そのような例はきわめて稀で、ほとんどのものがタテハケもしくはナデを用いるという[10]。Ⅱ期ではヨコハケが普遍的に見られるが、Ⅰ期と同様にタテハケ、ナデの技法も用いられている。このように埴輪の調整は基本的に、一次調整にタテハケを、二次調整にタテハケナデ、ヨコハケを施すものである。一次調整のタテハケは粘土紐の接合痕および粘土紐積み上げ痕の消去を目的としたものである。二次調整のタテハケ、ナデ、ヨコハケは乾燥単位にみられる粘土の肥厚部分の平滑化を目的として用いられたと考えられる[11]。ところが大東市内で出土した埴輪には、二次調整にタテハケ、ナデの技法を用いたものが見い出されなかった。例えば

先の寺川瓦堂遺跡でみられたA種ヨコハケは、突帯と突帯の間に一次調整のタテハケ調整が認められ、二次調整のヨコハケは不完全で粗雑に行われている（A_1手法）。つまり一次調整で充分に調整を行い、二次調整では部分的にハケメで一次調整を補足している。これは、二次調整で完全にハケメを用いて充足する手法（A_0手法）より新しい手法ということができよう。（第6図）

A_1手法よりさらに製作技術が簡略化されると、ハケメ原体を器壁に常に接触させる、連続的ヨコハケが用いられるようになる（以下B種ヨコハケ）。B種ヨコハケは一次調整の空間を充足する為に用いられ、いわばヨコハケがようやく一つの手法として確立されたことを示すものである。（B_1手法）。大東市内においてB_1手法は見い出せなかったが、同手法はこれまで同一古墳内で製作法が統一されていることが知られており、これは製作集団内で技法の統一が行われていたということが考えられる。

B_1手法と製作意図を同じくする「板ナデ技法」と呼ばれる手法がある（B_2手法）。これはそれまでのハケメが装飾性を有しているのに対し、ケズリの要素をもたせ、装飾性に欠く[12]。大東市内出土の埴輪でこの手法を有するのは峯垣内古墳の埴輪があげられる。同市以外でこの技法を用いた埴輪は応神陵古墳、はざみ山古墳、アリ山古墳といった古市古墳群内の古墳に多く認められ、その手法の最盛期は5世紀中葉に比定できる。

時代が進むと、ハケメ原体を常に器壁に接触させ、回転台を用いて連続的にハケメを施す手法が確立される（C種ヨコハケ）。この技法の確立は、須恵器製作に大きな関連をもっており、B手法のヨコハケにみられる不合理性を排除しようとする製作集団の意図が認められる。大東市内では堂山第1号墳出土の埴輪にこの手法が見られる。このC種ヨコハケは須恵器のカキメ技法に共通しており、この手法が須恵器製作技法の伝播以後に成立したことが窺える[13]。しかし堂山第1号墳の埴輪は同技法を用いているにもかかわらず、黒斑を有していることは、野焼きによるもので、焼成法について若干の問題が生じる。

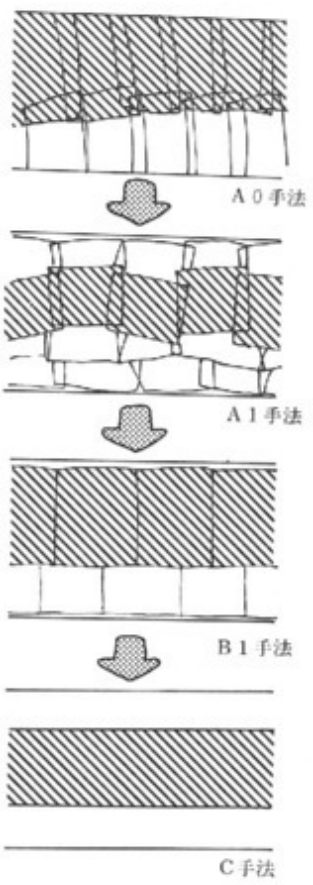


図6　2次外面調整の変化

C　6世紀代の埴輪の再調整と他地域への伝播（図7）

ヨコハケの技法が完成されてまもなく、埴輪の器壁にはヨコハケが省略され、タテハケのみで調整を完了する埴輪が6世紀に出現してくる。この時期の埴輪は製作技法が非常に簡略化され、成形も基部から口縁部まで一挙に粘土紐を巻き上げるため、

口縁部に達した頃には底部が粘土の重圧で変形している。そこでこの変形を再調整する必要性が生じるわけである。川西宏幸氏によって、“底部調整技法”（以下底部調整と称する）と名付けられた同技法は８種類あり、その技法に地域色を見ることができる。畿内における一般的な底部調整は、完成した埴輪を倒立し、底部付近に板状工具で押圧を加える技法である。[14] 大東市域では同種の技法が鍋田川遺跡出土の埴輪に見ることができる。隣接地域においては東大阪市芝山古墳・半堂古墳・坊主山古墳・山畑36号墳・瓜生堂上層遺跡、四條畷市更良岡２号墳にも板状工具の押圧による底部調整を見ることができた。

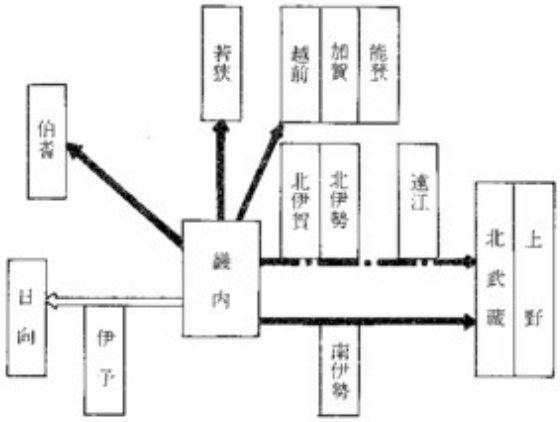


図７　底部調整技法の伝播

ところが東大阪市瓜生堂上層遺跡出土の埴輪の中に、前述した板状工具による押圧の底部調整の埴輪に混ざって、底部付近をヨコナデする底部調整を有するものと、内面にヘラケズリを施す底部調整を有する埴輪が出土している。[15] 前者の技法は北陸地方に多い技法で、中川第65号墳に見られる。後者の技法は関東特有の技法で、畿内特有とした板状工具による押圧の底部調整と並んで出土する。内面にヘラケズリを施す技法は畿内ではみられなかったことから関東で発生したと考えられていた。[16] ところが最近になって新沢175号墳や、市尾今田２号墳から内面にヘラケズリを施す底部調整が確認され、畿内での資料が増加していることから、むしろヘラケズリ技法の出自を畿内に求める方が自然であろう。[17] このヘラケズリ技法は須恵器技法に共通するものとかんがえられる。須恵器技法といえば注目すべき埴輪が大東市に南接する東大阪市の坊主山古墳から出土している。[18] この埴輪にはタタキ板によって底部付近を叩く底部調整がみられる。類例は大阪府下では林３号墳、穂積古墳があげられ、[19] 畿外では愛媛県三島神社古墳や宮崎県舟塚古墳で出土している。[20] 分布状況から同技法は西へ伝播していることになり、関東にみられたヘラケズリ技法が東漸していった径路と逆になる。

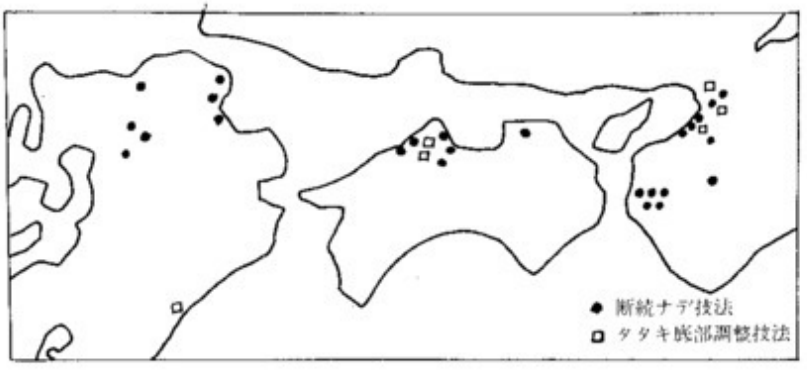


図８　断続ナデ技法及びタタキ底部調整技法の埴輪分布
（註　文献の第１図を筆者改図）

5　まとめにかえて

前章で述べた円筒形埴輪の製作技法の変遷から観察し得た市内所在の6古墳・遺跡の埴輪を製作年代順にあげると、瓦堂遺跡→峯垣内古墳→堂山第1号墳→六地蔵古墳・鍋田川遺跡、宮谷古墳群となる。そしてこれらの埴輪の製作年代は古墳に伴う副葬品が著しく少ない為、にわかに決定しがたい点があったものの、瓦堂遺跡を5世紀前半、峯垣内古墳を5世紀中葉、堂山第1号墳を5世紀後半、六地蔵古墳・鍋田川遺跡・宮谷古墳を6世紀代に位置づけた。また、この年代順は副葬品が判明している堂山第1号墳を5世紀後半とする築造年代に符号する。このことから大東市域においての埴輪祭祀は5世紀前半を初現とし、それぞれの埴輪の調整技法から、大きく4つの時期に区分することが可能である。そして、大東市ではみられなかった第Ⅰ期を含め各時期の古墳の様相と埴輪の製作方法のあり方を検討し、合わせて生駒西麓域の古墳を整理し、まとめとしたい。

第Ⅰ期とした埴輪はヨコハケ技法が確立する前段階のもので、一次、二次調整ともタテハケを施す、A_0手法による。この段階の埴輪は今回観察し得た大東市域の埴輪の中には存在せず、生駒西麓域では四條畷市の忍ケ岡古墳[21]と八尾市の花岡山古墳[22]の二例に確認できる。この時期は墳形に前方後円墳が採用され、忍ヶ岡古墳では内部主体に竪穴式石室が用いられている。

第Ⅱ期とした埴輪はヨコハケの技法が出現する段階、もしくは確実にヨコハケを施す段階のもので大東市域で始めて埴輪が使用された時期でもある。大東市域では瓦堂遺跡から出土した埴輪がこの時期の資料で、生駒西麓では塚山古墳[23]、えの木塚古墳[24]があげられる。両古墳は径20～30mの円墳で、いずれも周濠をもつ。内部主体については不明である。えの木塚古墳の埴輪は一次調整・二次調整にタテハケを施すものがみられるが、赤塚次郎氏が指摘しているようにヒレ付円筒といった特殊な埴輪の場合には古い技法が残っているようである[25]。

第Ⅲ期の埴輪は第二次調整にヨコハケが完成する段階で、B種ヨコハケが見られる。スカシ孔は円形に統一される。この時期の埴輪は、大東市域では峯垣内古墳・生駒西麓域でみると心合寺古墳があげられる。心合寺古墳は全長130mの前方後円墳で、周濠をもつ。主体部については不明であるが、周濠より長持型石棺の一部が出土しており、竪穴式石室の可能性が高い。この時期の古墳は墳形に再び前方後円墳が採用され、心合寺古墳では大王級に使用される長持型石棺がみられる[26]。

第Ⅳ期になると、第二次調整に埴輪の器壁に完周するヨコハケ（C種ヨコハケ）が出現する段階で、焼成方法も野焼きから窖窯（あなかま）へ変わる時期であり、須恵器製作と大きく係る時期でもある。この時期の埴輪は大東市域では堂山第1号墳があげられる。さらに、生駒西麓域に視野を広げると墓の堂古墳（四條畷市中野）があげられる。数少ない古墳にみられる特徴は、堂山第1号墳から初期須恵器が出土している。墳丘は前方後円墳の他、円墳、方墳と多用に採用され

るようであり、内部主体では横穴式石室が導入される前段階で、堂山古墳では木棺直葬であった。

第Ⅴ期の埴輪は技法が崩れ、タテハケだけを施して、二次調整を欠いた一群である。この時期に属する埴輪は、大東市に所在する宮谷古墳群・鍋田川遺跡・六地蔵古墳をはじめ、生駒西麓部に21ケ所を数える。この時期は芝山古墳・西塚古墳に代表されるように前方後円墳に初期横穴式石室が採用される。また、群集墳の一部にも埴輪祭祀が見られ、そのほとんどはこの第Ⅴ期に属するものである[27]。また、この第Ⅴ期に属する形象埴輪で興味深い資料がある。それは宮谷古墳から発見された所謂「石見型盾」と呼ばれる盾形埴輪で、同型の盾形埴輪の分布は大阪府をはじめ京都府・奈良県・和歌山県で発見されており、東は三重県藤谷埴輪窯、西では岡山県円光寺遺跡、徳島県前山遺跡といったように一つの分布圏を呈している。

つまり、生駒西麓の埴輪祭祀は4世紀後葉にはじまり、しかも前方後円墳という墳形を採用している。それらは忍ケ岡古墳・花岡山古墳に代表される二つの首長墓（造営集団）が存在する。この二基の首長墓にみられる埴輪は調整技法が土師器の調整方法と共通する点を見い出せることから、土師器工人の関与を受けて製作されたものと考えられる。ところが第Ⅱ期とした古墳は、墳形が前方後円墳から周濠を有する円墳に変化する。また、古墳の立地も前段階の古墳より少し離れたところの谷口扇状地に築造され、この時期に新たに造営され、出現した古墳が増加する。埴輪も前段階と大きく変わり、ヨコハケの出現・技術の斉一性から土師器製作法から埴輪としての製作法へと技法が変化していることがわかる。また、それらの技法に画一性を見い出せることから、埴輪製作工人が専門的集団に推移していったことが窺える。その後も埴輪の技術が革新されていく中で、墳形は第Ⅲ期に前方後円墳、第Ⅳ期に前方後円墳の他に、円墳・方墳といった様に墳形が多用に採用されている。第Ⅲ期というと古市古墳群内に巨大古墳が築造され、第Ⅳ期には仁徳陵古墳に代表される百舌鳥古墳群の巨大古墳が築造され、埴輪の生産も増加する。第Ⅲ期とした峯垣内古墳の埴輪が応神陵古墳やはさみ山古墳出土の埴輪の技法と共通することが指摘でき、そこには“板ナデ”という新しい技法の出現と、B種ヨコハケの使用といった大がかり

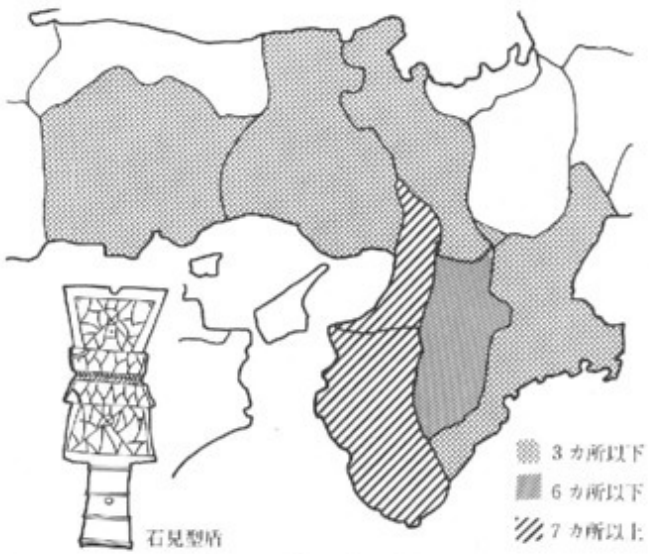


図9　石見型盾の分布

な生産体制に耐え得る技法を用いていることが窺い知ることができる。それ故に、巨大古墳が数多く築造される第Ⅲ・Ⅳ期の埴輪生産を支えるのが可能であったのであろう。また、第Ⅳ期の埴輪が製作された時期は須恵器が生産された時期でもあり、その時期の埴輪の器壁には明らかに須恵器技法に影響されたと思われる技法が窺える。ところが第Ⅴ期になると埴輪の技法が著しく簡略化され、しかも地域色が大きく現れる時期であることを指摘しておいた。また「石

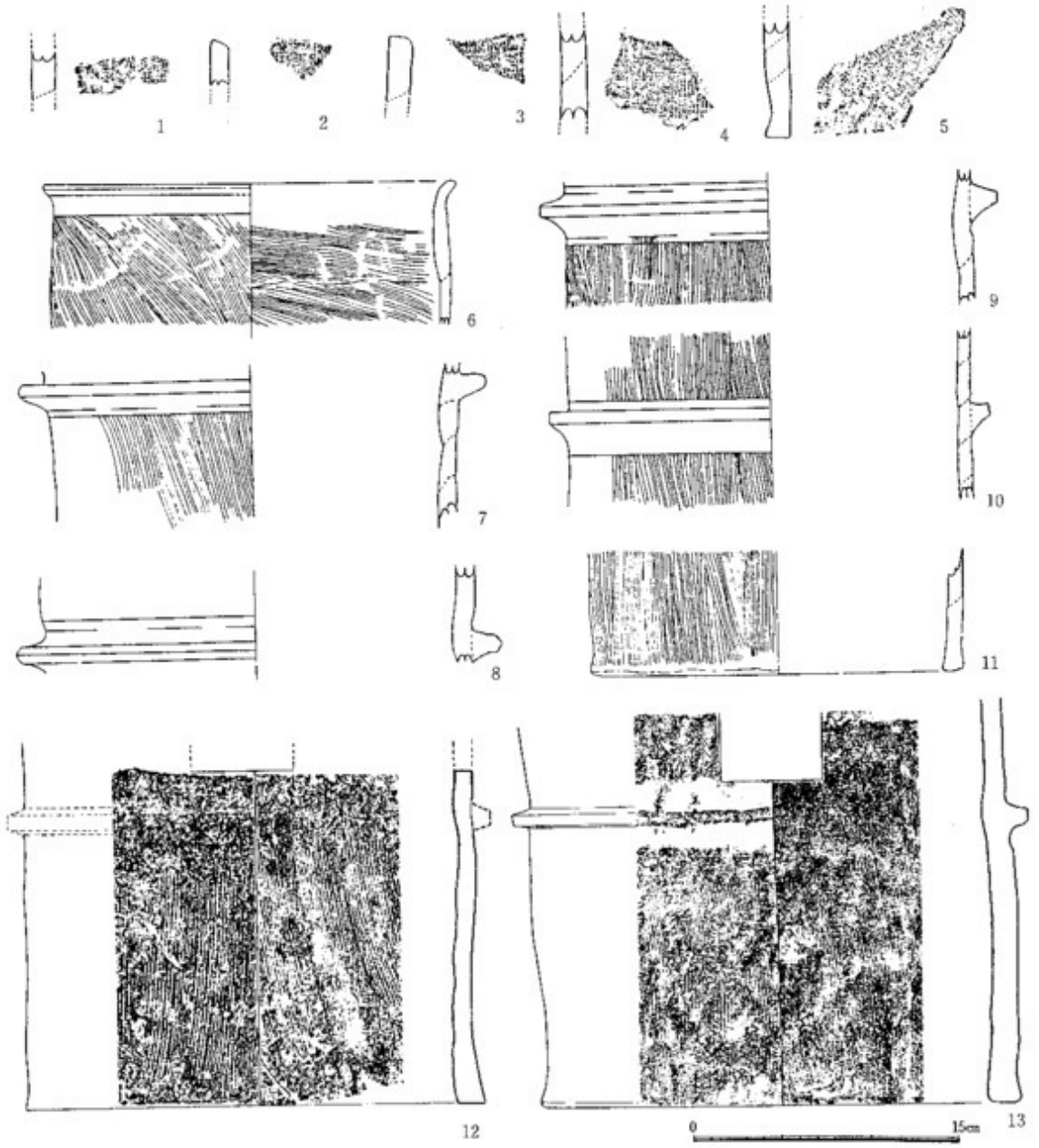


図10　大東市周辺前期古墳出土埴輪

（1～5．忍ヶ岡古墳、6～11．西車塚古墳、12・13．花岡山古墳）

見型」と呼ばれる独特な形態をもつ盾型埴輪を大東市域にみることができた。第Ⅴ期とした時期の古墳は小規模な古墳か、初期横穴式石室が導入された前方後円墳に限られるようである。小規模な古墳は六地蔵古墳にみられるような木棺直葬といった伝統的な墓制をもつのに対し、西塚古墳や芝山古墳では外来的な横穴式石室が導入されている内部主体の違いが見い出せる。ところが墳丘をとりまく埴輪の技法には違いが見い出せない。タテハケのみで調整を終了する新しい埴輪は伝統的な墓制にも、また新しい墓制にもみられることが指摘できる。しかし、地域的に造営系譜を見ると、芝山古墳や西塚古墳は前段階の首長墓がみられず、横穴式石室をもつ古墳から新たな造営集団が出現するのである。そうなると、花崗山古墳で始まる首長系譜は心合寺古墳→鏡塚古墳と受け継がれるが、忍ケ岡古墳は一代で首長墳の造営は終了することがわかる。そして、第Ⅱ期とした時期に全く新しい造営集団による古墳が築造されるのである。大東市域においても第Ⅱ期をもって埴輪祭祀が認められることから新しい造営集団によるものであろう。

以上、大東市立歴史民俗資料館所蔵の埴輪について述べた。大東市域はいわゆる埴輪の空白地帯であったため、今回の論考は部分的ではあったが、生駒西麓域の埴輪の変遷を明らかにすることができたことは大きな成果であった。今回明らかにし得なかった埴輪については、資料の増加を待って改めて論究したい。

註

（1） 大阪府教育委員会「堂山古墳群発掘調査概要」（1973）。
（2） 大阪府教育委員会『大阪府文化財地名表』（1977）。
（3） 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2（1978）。
（4） 大東市教育委員会『大東市史』（1973）。
（5） 前掲註（4）と同じ。
（6） 前掲註（4）と同じ。
（7） 前掲註（1）と同じ。
（8） 大東市立歴史民俗資料館黒田淳氏御教示。
（9） 前掲註（3）と同じ。
（10） 前掲註（3）と同じ。
（11） 大村直「円筒埴輪編年の現状と課題」『考古学ジャーナル』253（1985）。
（12） 大阪府教育委員会『応神陵古墳外堤発掘調査概要』（1981）。
（13） 前掲註（3）と同じ。
（14） 前掲註（3）と同じ。
（15） 東大阪市遺跡保護調査会『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』（1979）。
（16） 前掲註（3）と同じ。

(17) 橿原考古学研究所『新沢千塚古墳群』（1980）。

(18) 枚岡市史編纂委員会「原始・古代の枚岡」『枚岡市史』第3巻史料編Ⅰ（1966）。

(19) 大阪府教育委員会『林遺跡発掘調査概要Ⅲ』（1981）。
豊中市教育委員会『摂津豊中大塚古墳』（1987）。

(20) 松山市教育委員会『三島神社古墳』 1971年。
阪本安光『北条市上難波南古墳群発掘調査報告』（1982）。
宮崎県教育委員会『船塚遺跡』（1987）。

(21) 四條畷市教育委員会『忍ヶ岡古墳』（1974）。

(22) 原田修・久貝健・島田和子「清原得巖所蔵考古資料図録」『大阪文化誌』第2巻2号（財)大阪文化財センター（1976）。

(23) 中西克宏「塚山古墳採集の埴輪」 東大阪市文化財協会ニュース（1986・8）。

(24) 四条町史編纂委員会『河内四条史』第2冊史料編Ⅰ（1972）。

(25) 奈良市教育委員会「コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和54年度（1980）。

(26) 前掲註(22)と同じ。

(27) 近隣では山畑古墳群に見られる。

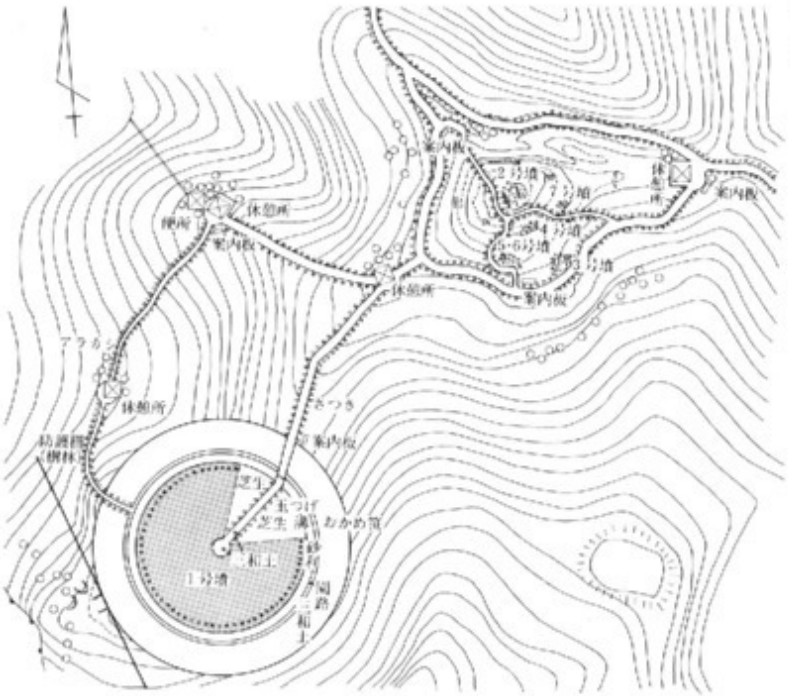
あ と が き

南を東大阪市、北を四條畷市に挟まれた大東市は「遺跡の空白地帯」と呼ばれたこともあった。しかし、奇妙なことに、大東市といえばすぐに中垣内遺跡や堂山古墳群、また飯盛山城等の遺跡を思い浮かべることができる。また、かって市民会館の一室には工事の際に採集された数々の貴重な遺物が収蔵されていたことも事実である。

本書は1987年度に発掘調査を実施した寺川遺跡と北条遺跡の発掘調査報告に加えて、今日まで多くの市民の方々によって採集され、伝えられてきた遺物の紹介・検討を中心とした四篇の付載を、例言を記した人々の協力を得て載せることができた。しかし、一方ではこうした多くの出土・採集遺物が、これまでの市域における遺跡破壊の在り方を如実に物語っていることを痛切に感じている。

今日、遺跡の保存とその活用の大切さが叫ばれながら、その具体案を試みることも例が少ないのが現状といえる。下の図は「堂山古墳群保存整備計画案」（史跡公園としての遺跡保存整備案）の保存整備全体計画平面図である。その後、市立歴史民俗資料館において本計画案をもとに模型を作成し、現在展示している。将来、堂山古墳群を保存・整備する際に、この試案をもとに検討されることがあれば幸いである。

（太田・三宅）

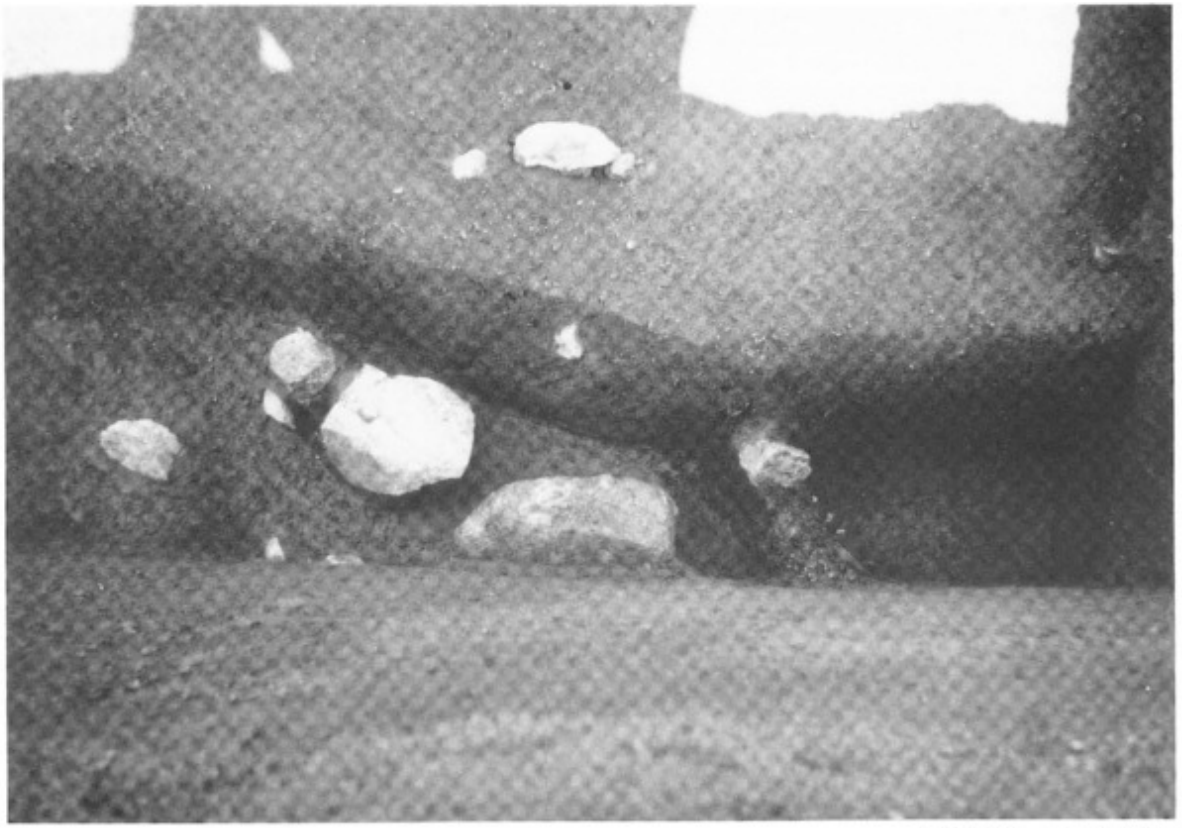


堂山古墳群保存・整備全体計画平面図

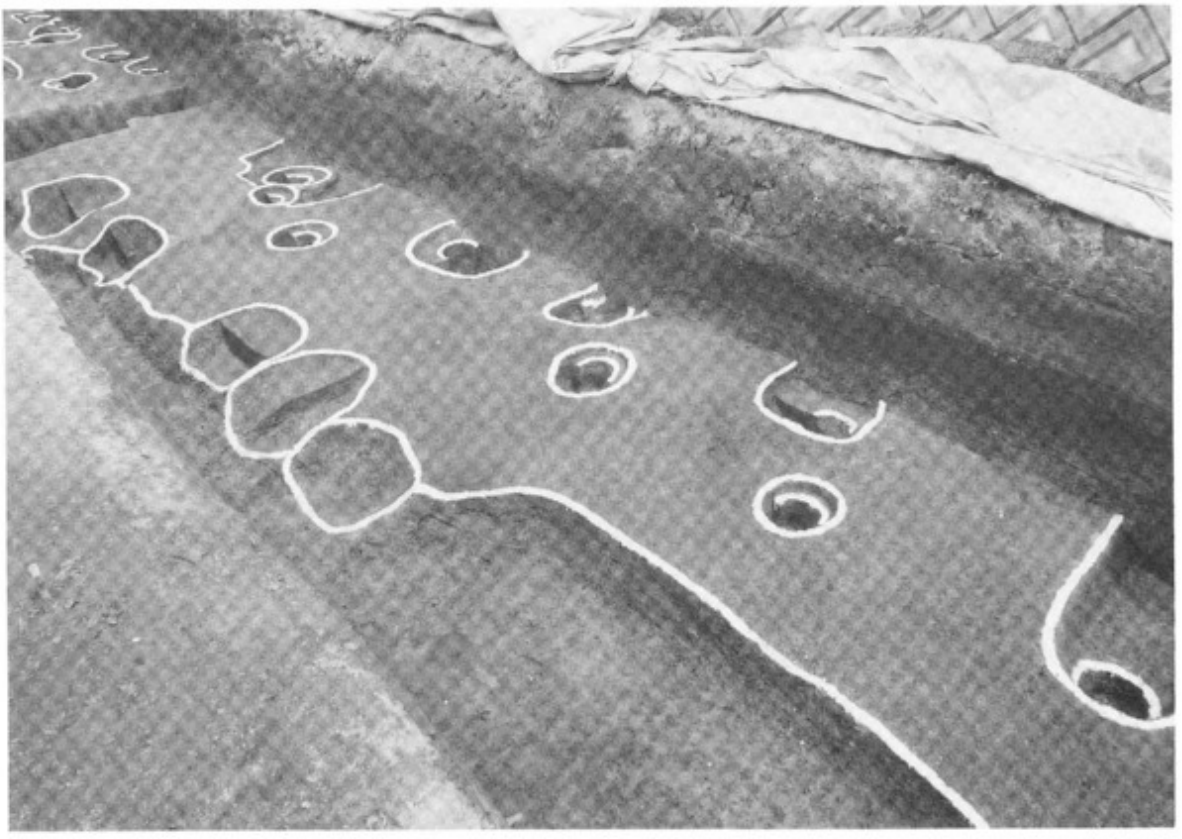
（奈良国立文化財研究所「遺跡保存整備課程」1985年度に参加・指導を受け作成した。）

図　　版

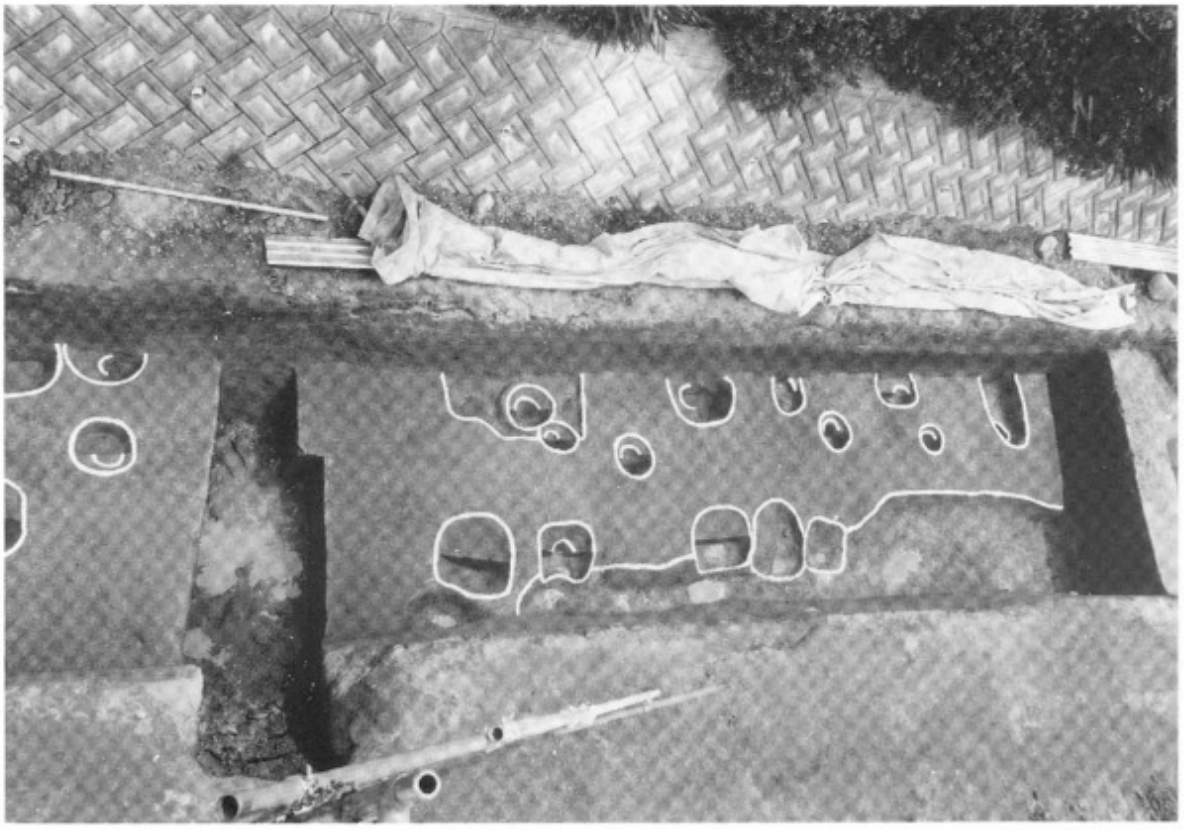
図版一　遺跡周辺航空写真



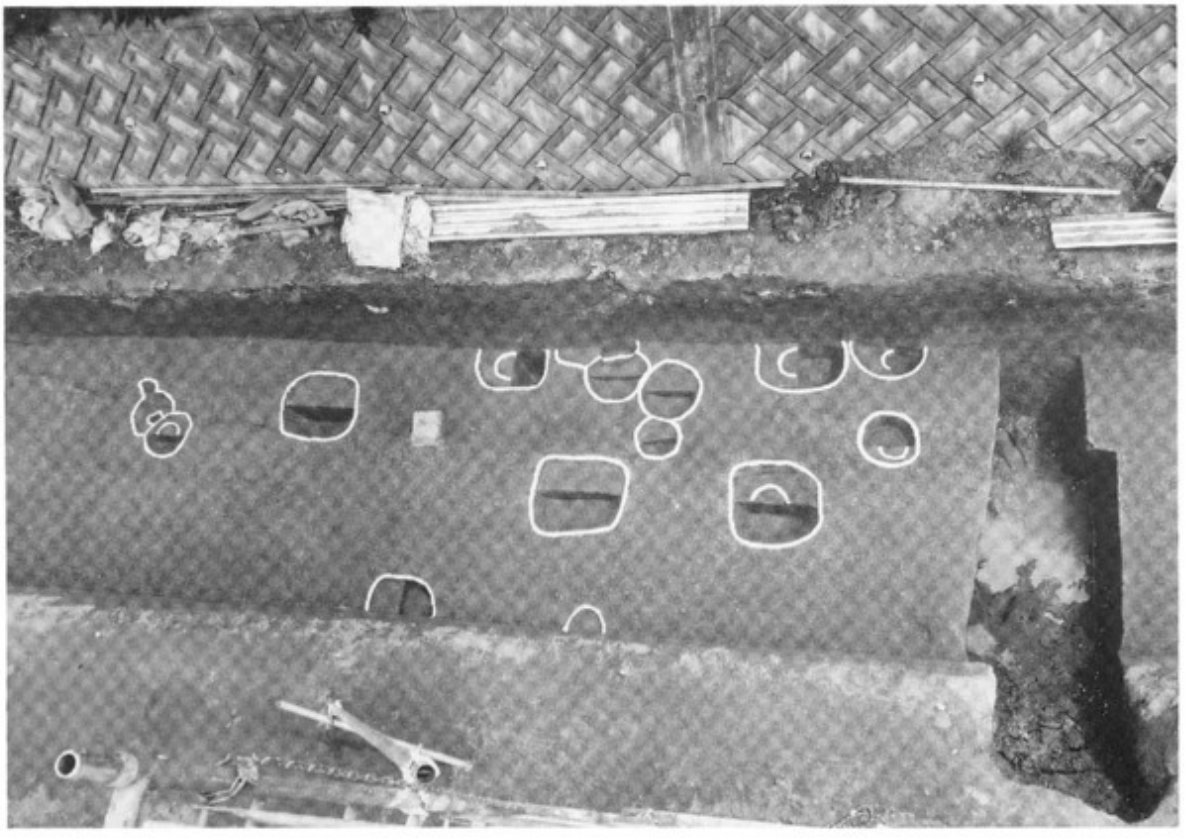
段状遺構・石検出状況



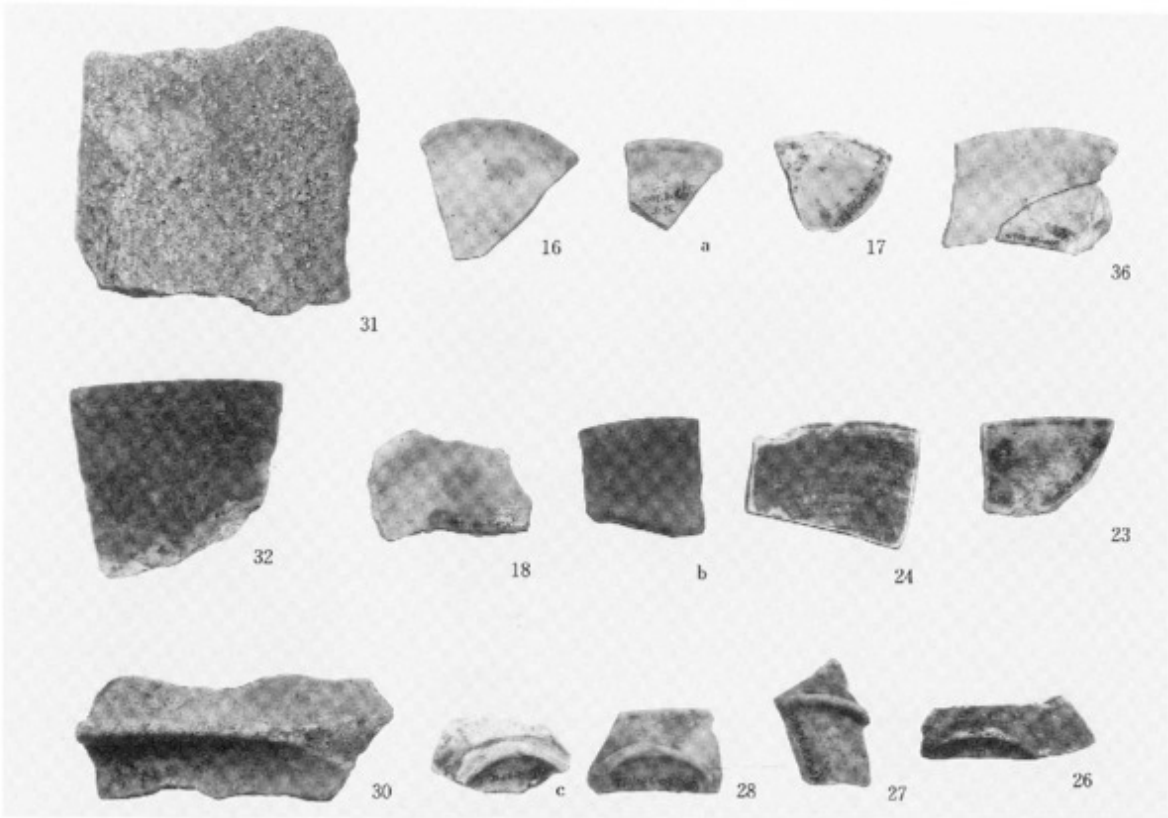
ピット群（南から）

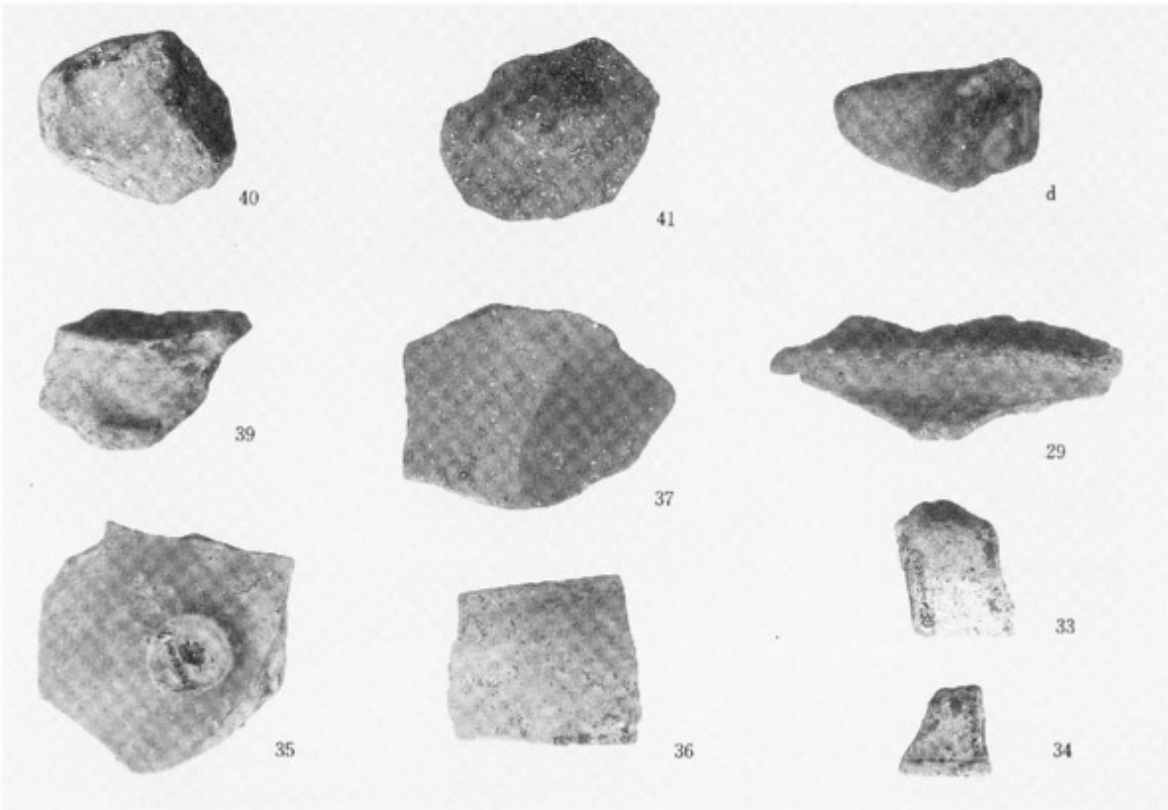


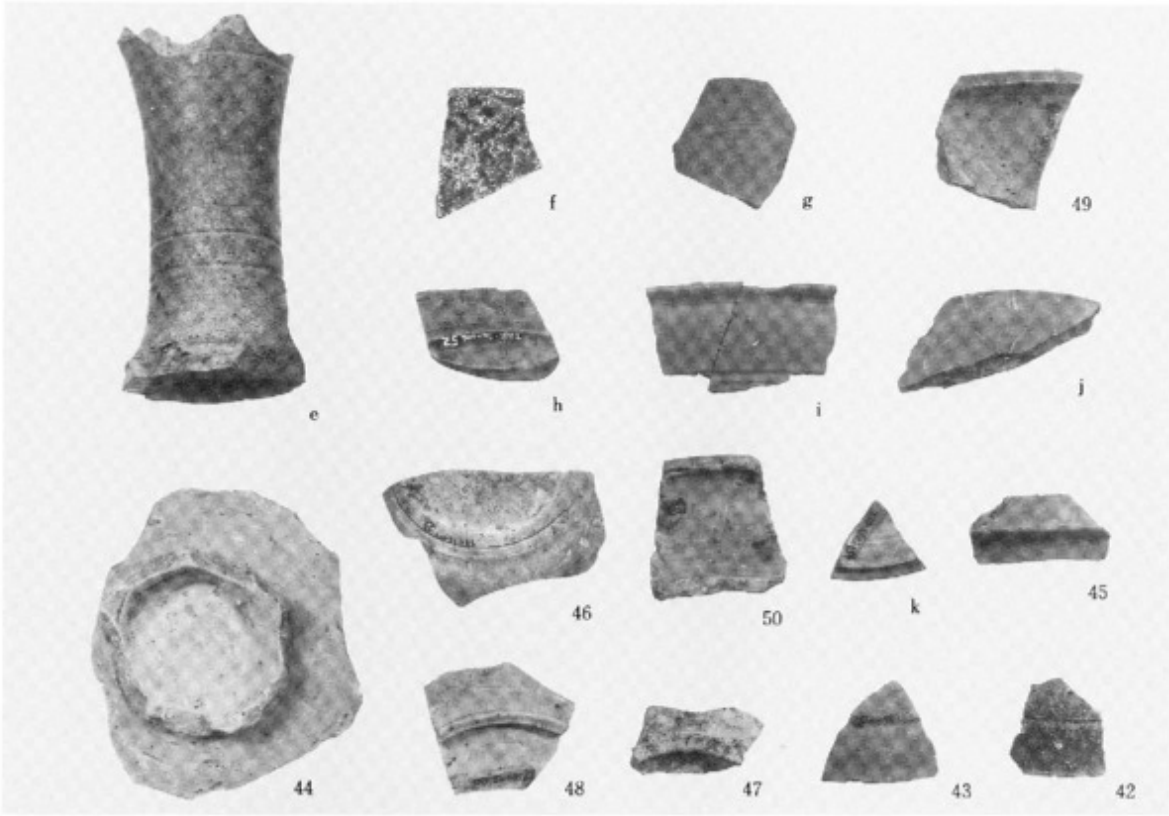
ピット群（調査区南）

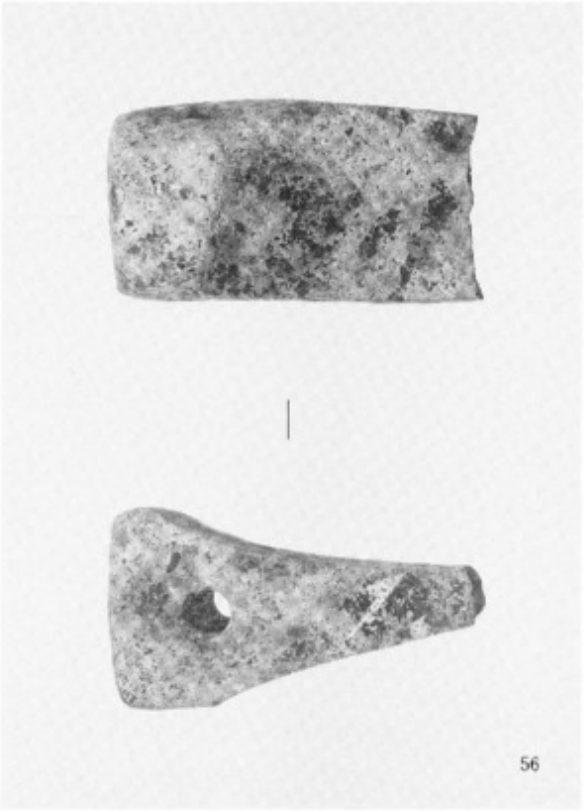


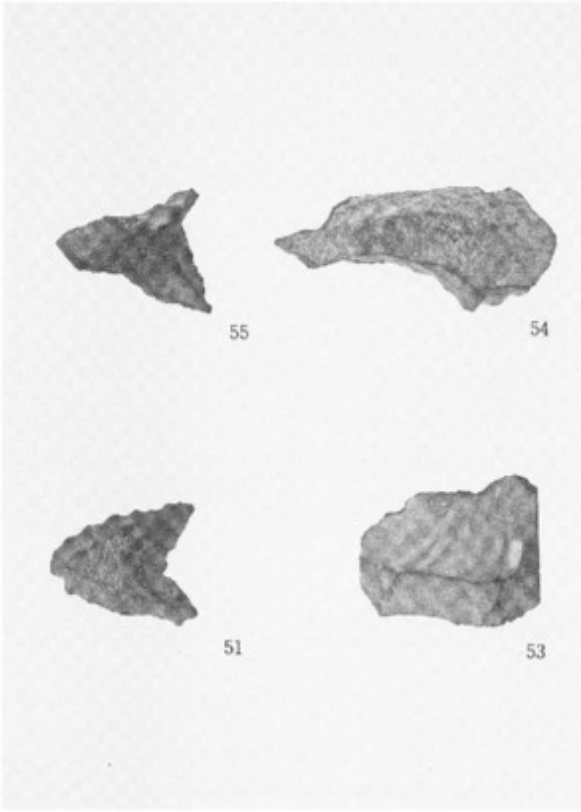
同上（調査区北）


31
16
a
17
36
32
18
b
24
23
30
c
28
27
26

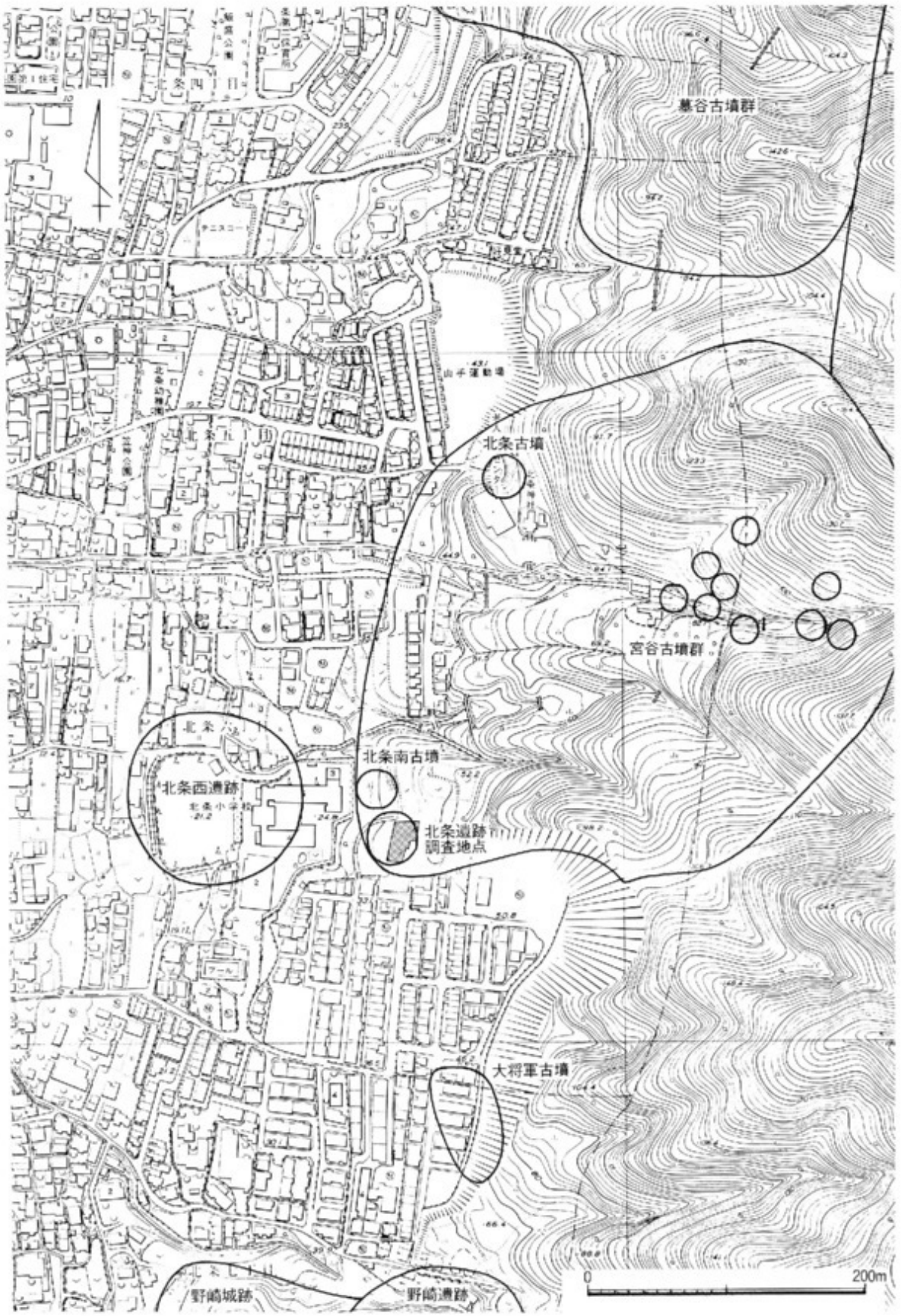

40
41
d
39
37
29
35
36
33
34


e
f
g
49
h
i
j
44
46
50
k
45
48
47
43
42

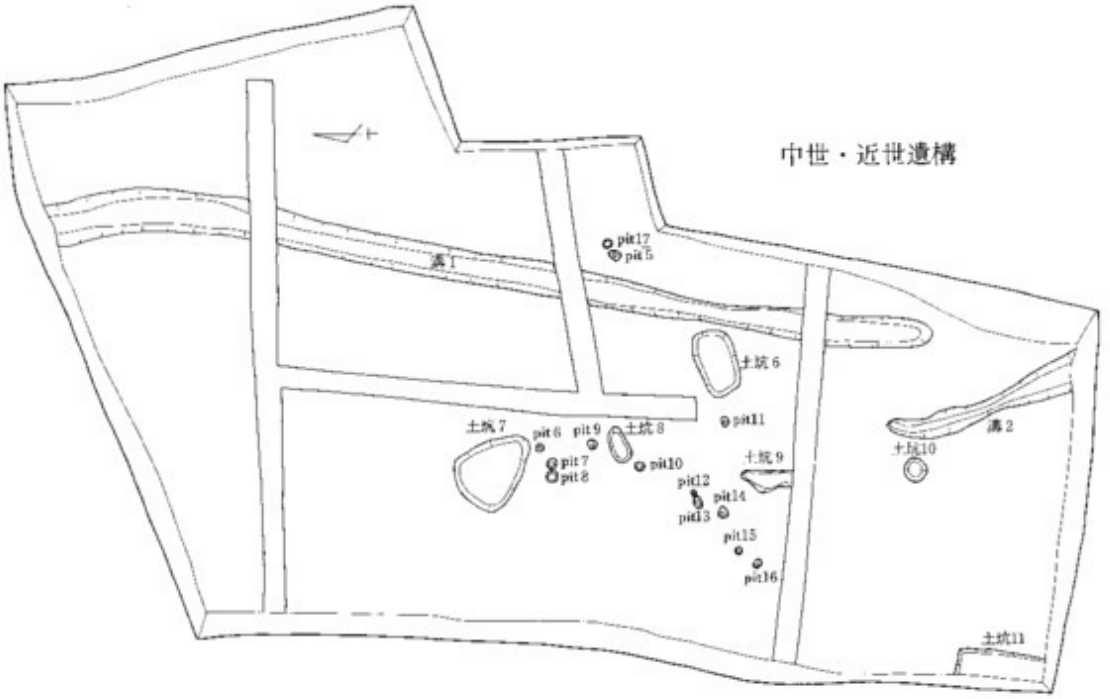

56

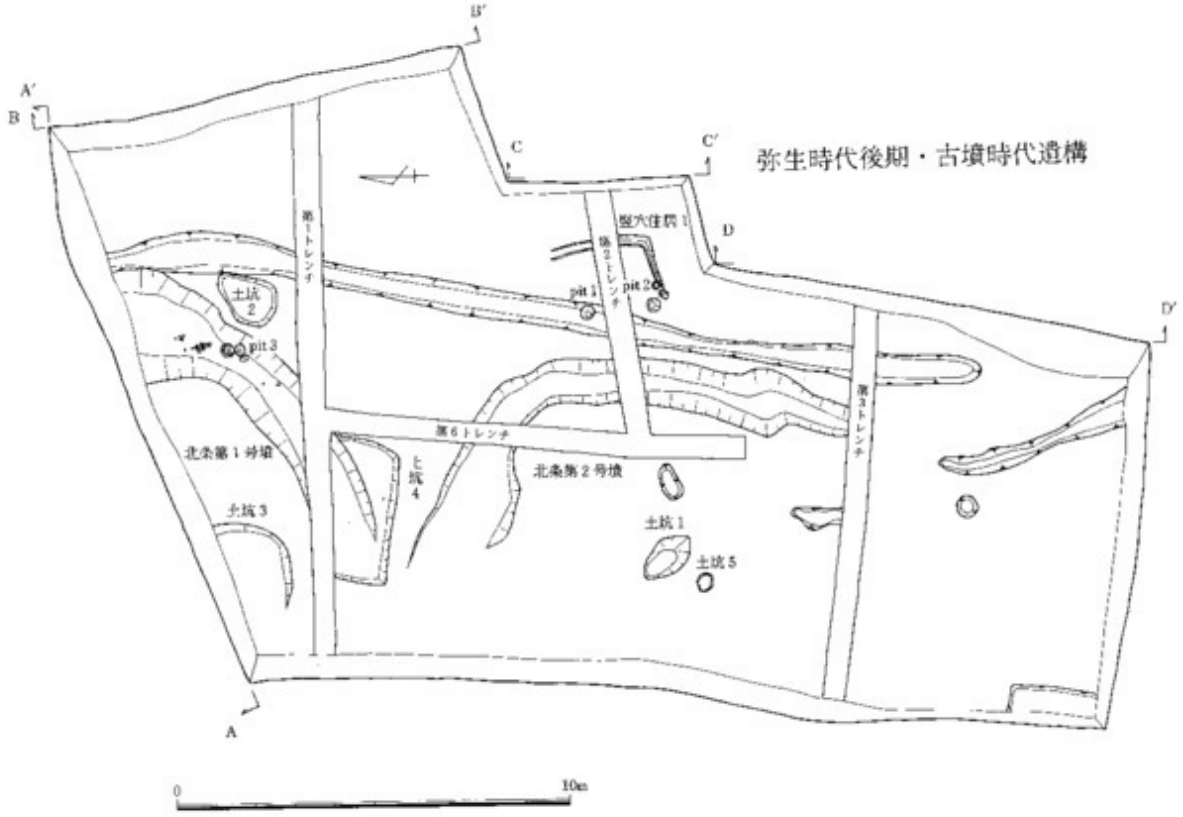

55
54
51
53

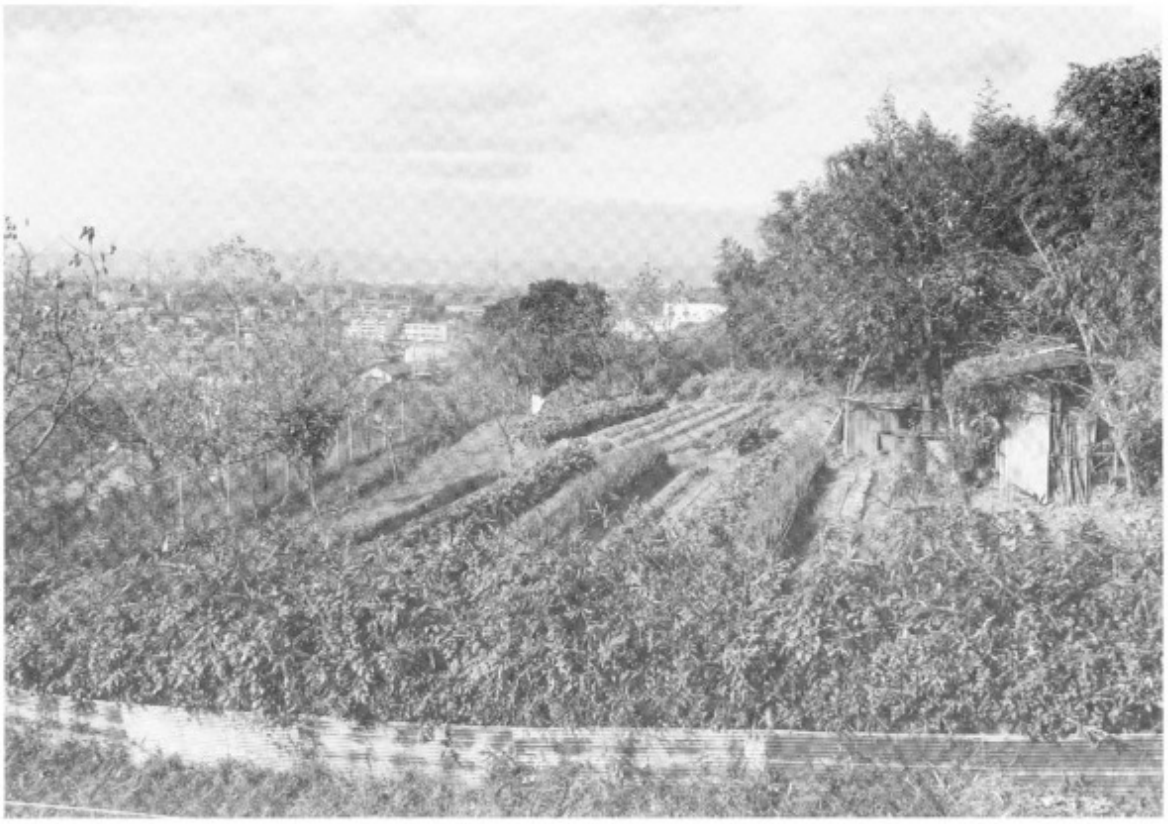
図版六　北条遺跡の調査地点の位置と周辺の遺跡



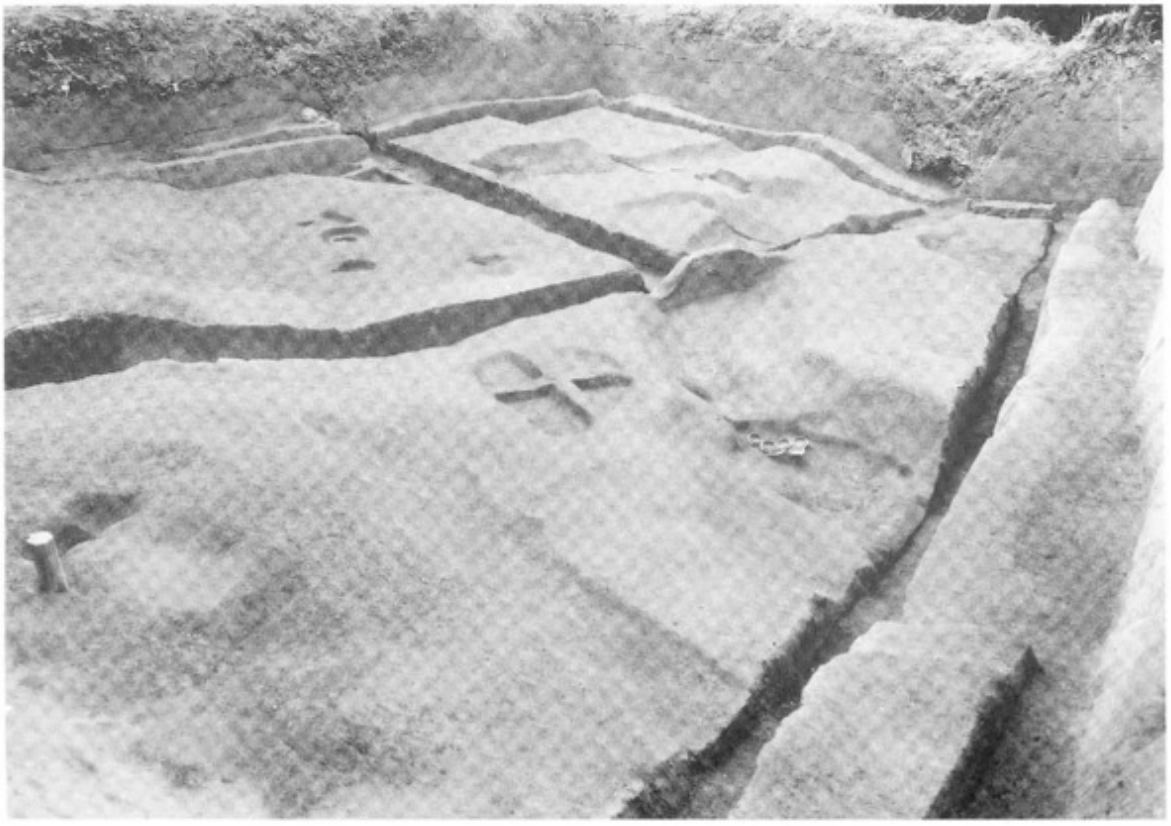
図版七　北条遺跡　遺構平面図



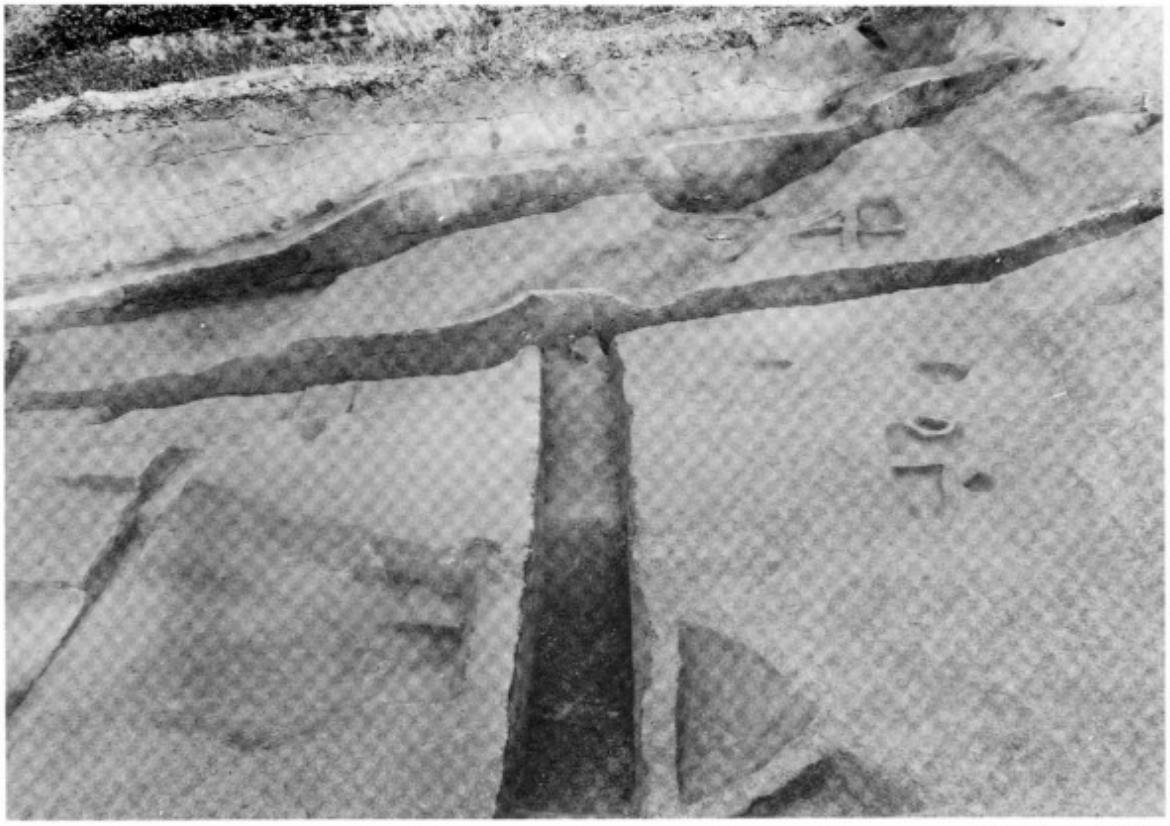




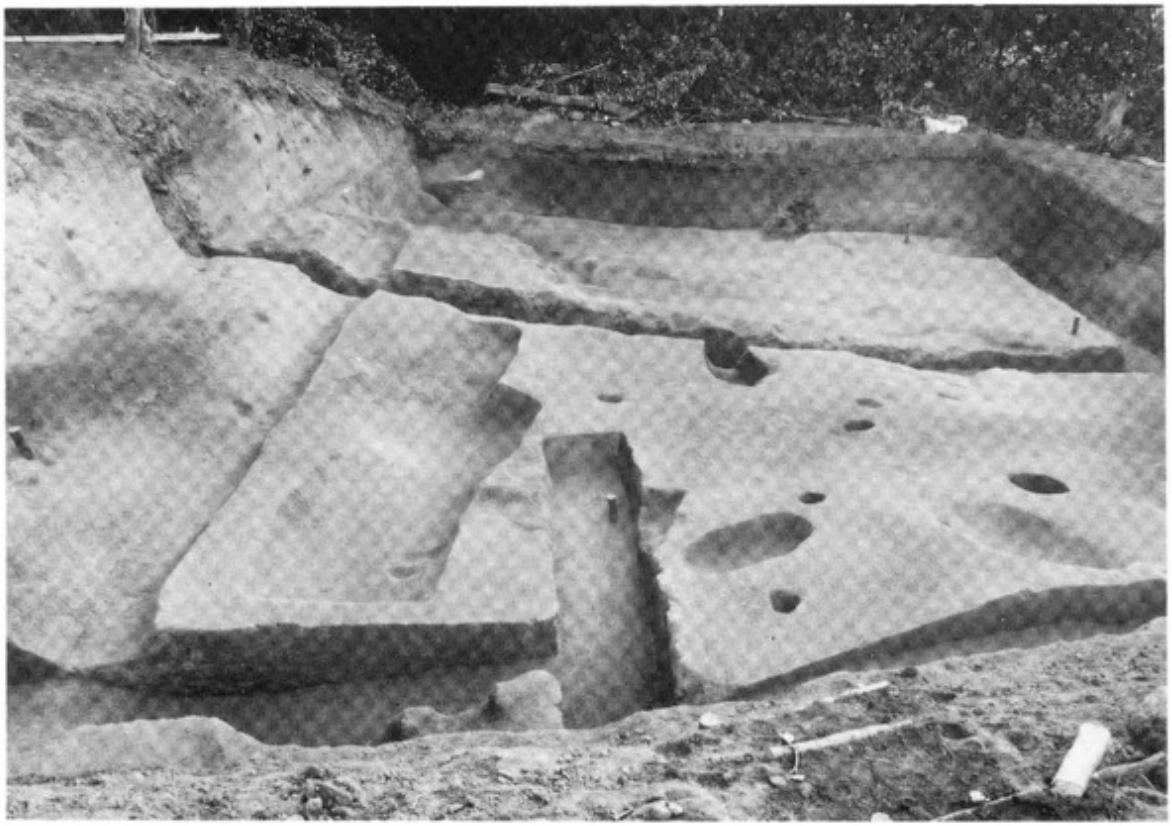
調査区より北方、四条畷方面を望む



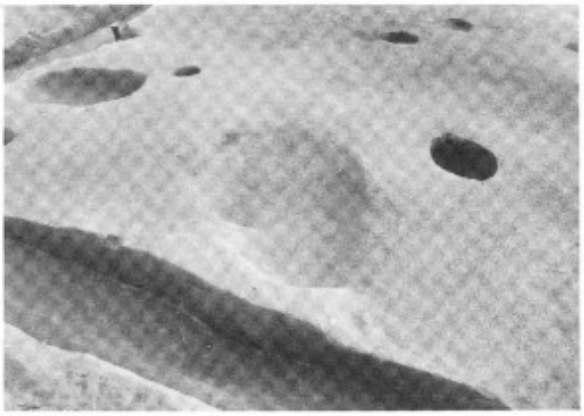
弥生時代後期・古墳時代遺構

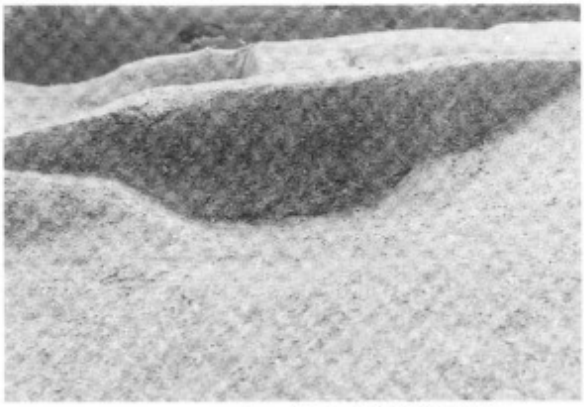


北条第1・2号墳

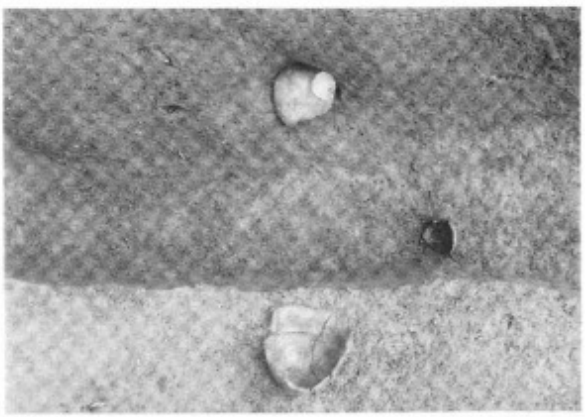


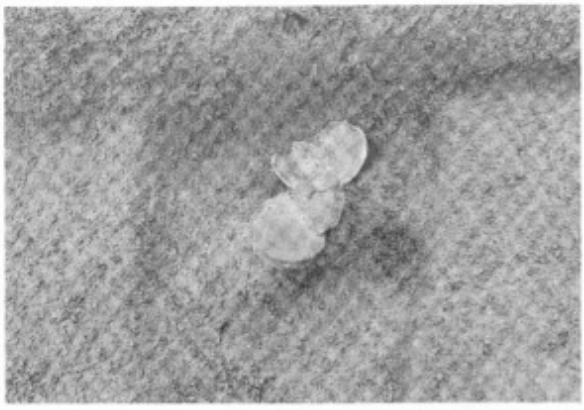
中世遺構全景



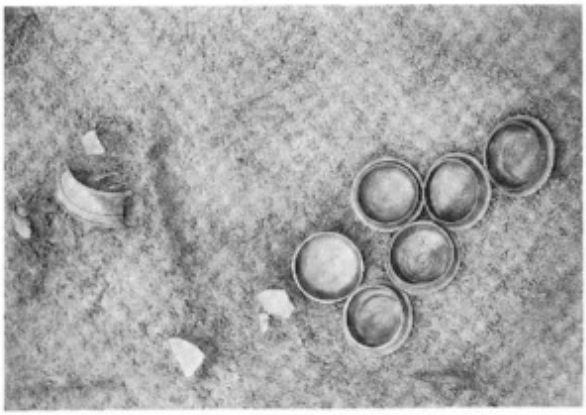


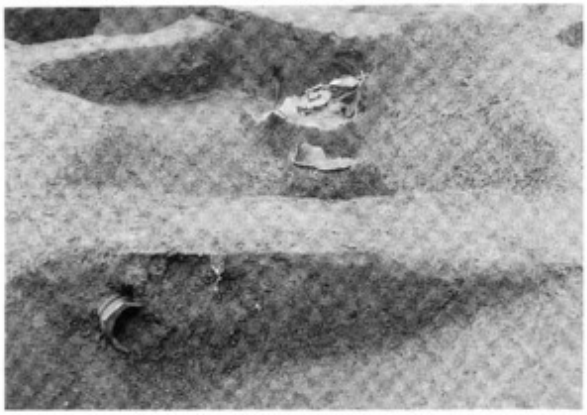
上．弥生時代後期土坑1
下．　〃　　断面



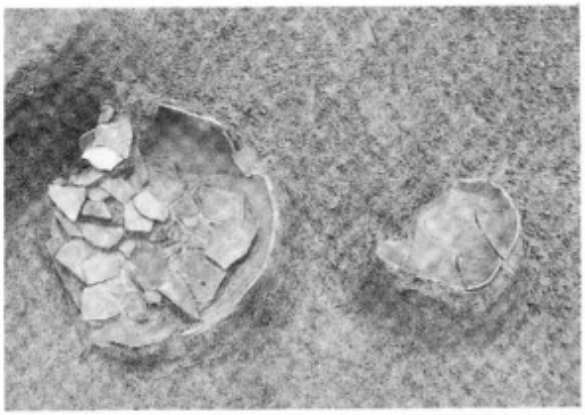


上．竪穴式住居1土器出土状況
下．　〃





上．北条第1号墳周溝内土器出土状況
下．　〃

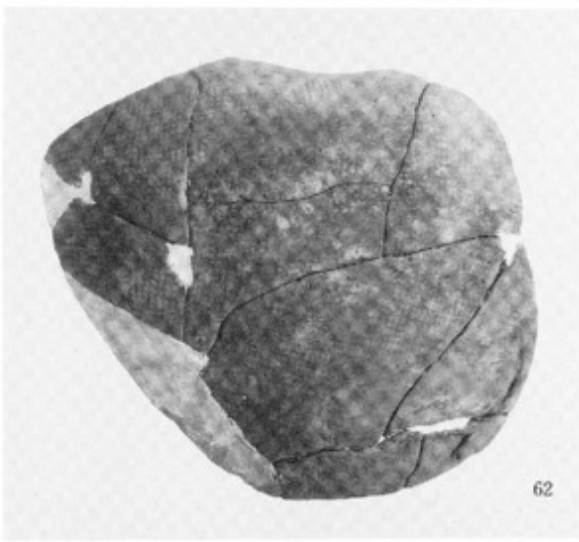


上．北条第1号墳周溝内土器出土状況
下．北条第2号墳周溝内土器出土状況

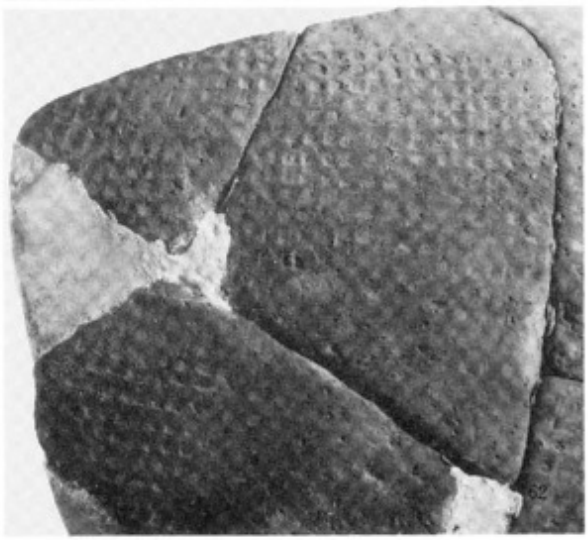
96

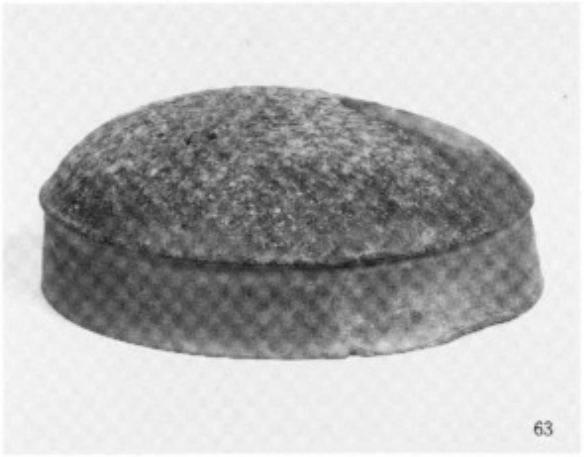
61

58


62

59




63

68

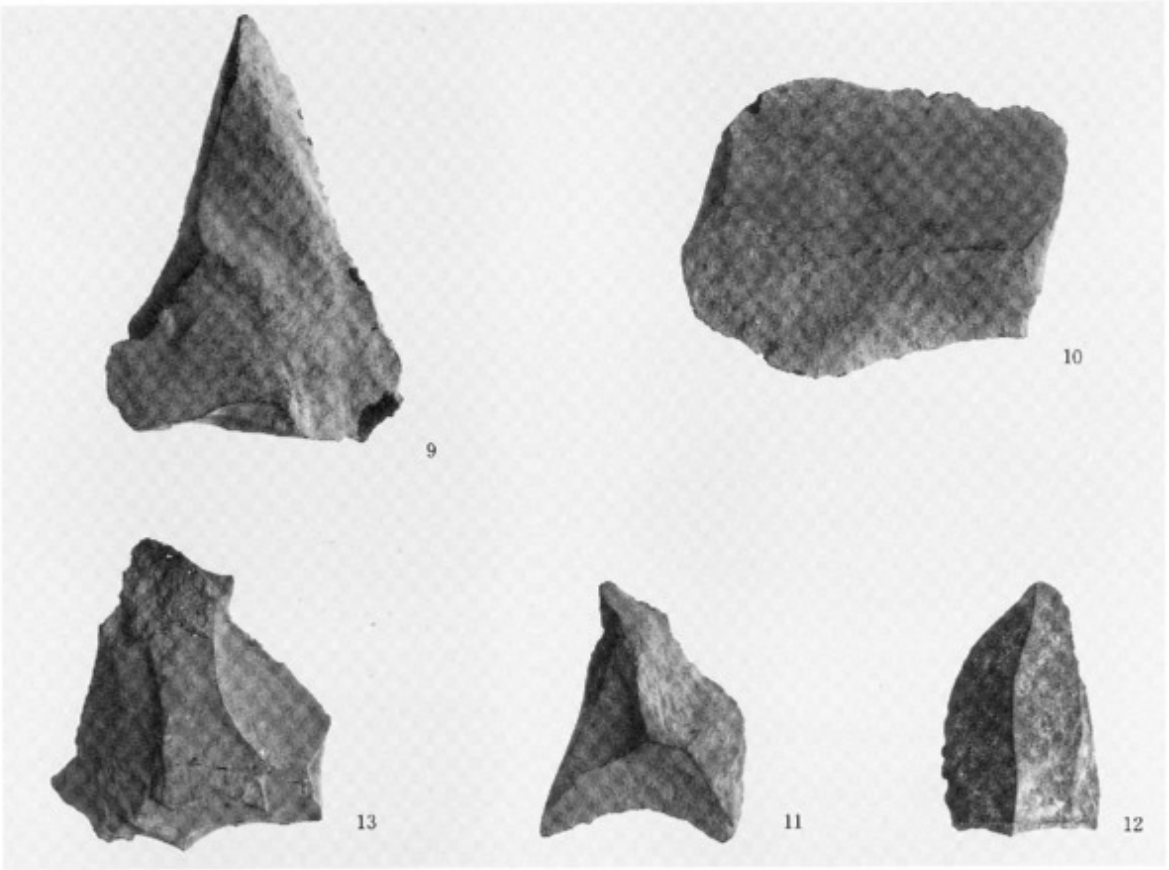
67

70

64

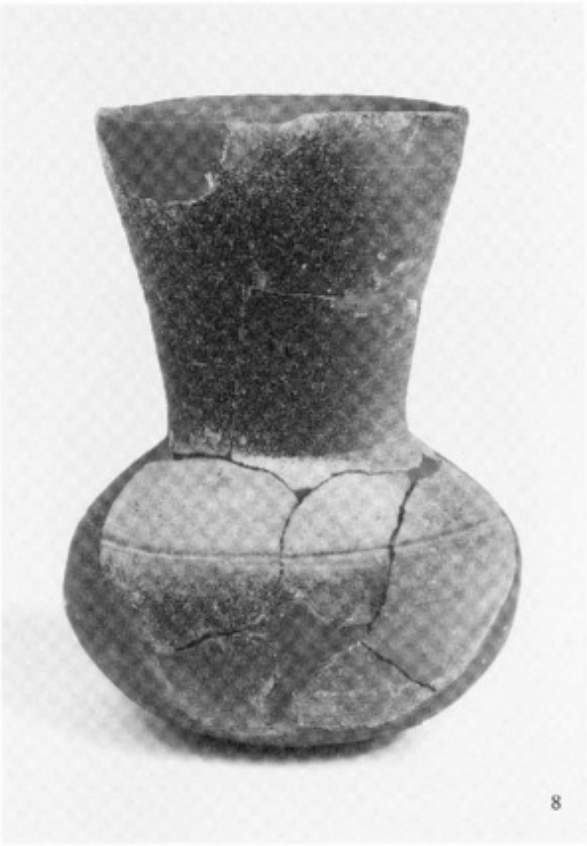
66

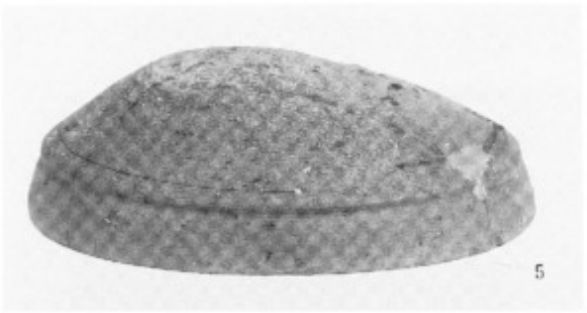
71

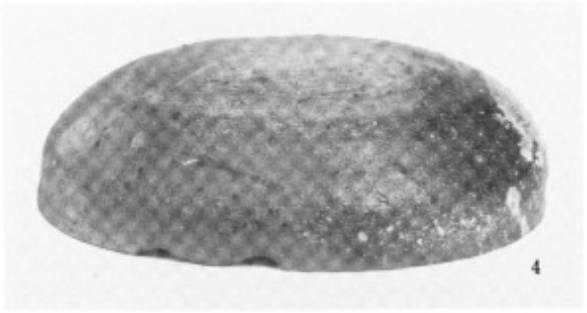

9
10
13
11
12

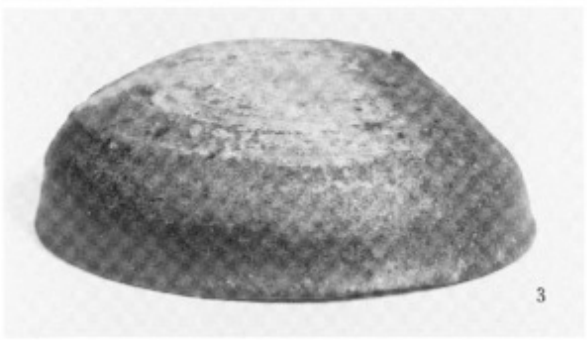
3

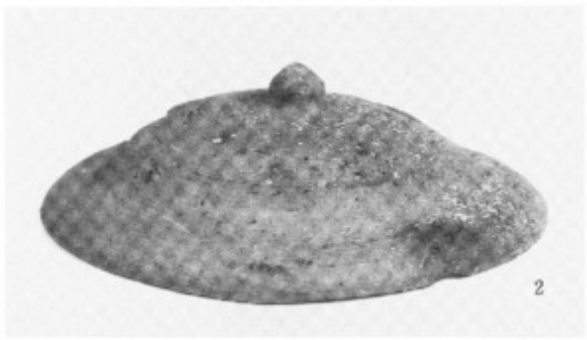
7

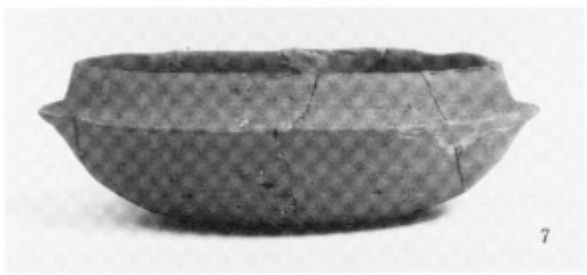

8

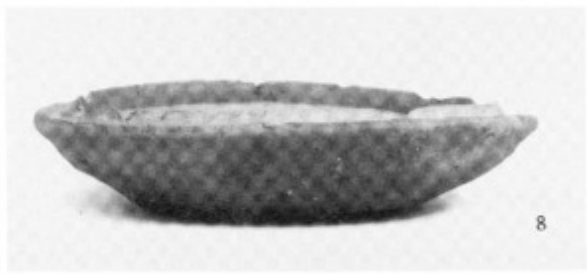

5


4


3

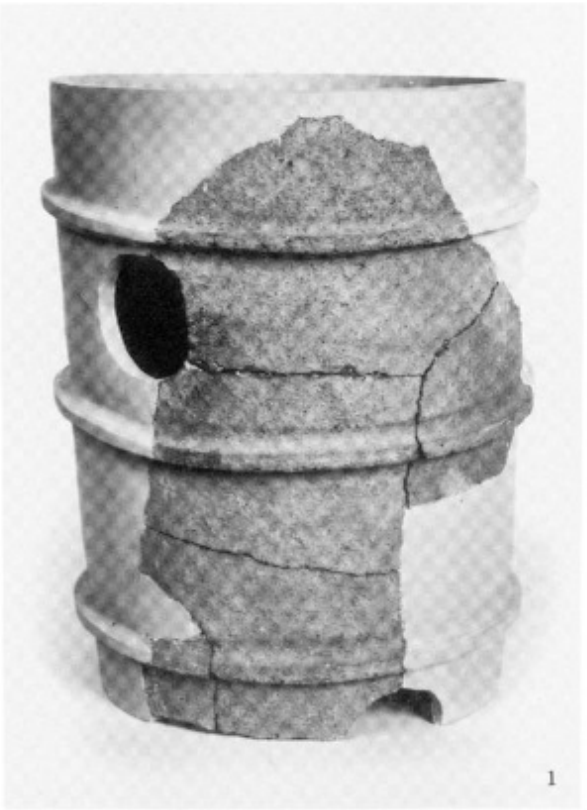

2


7


8

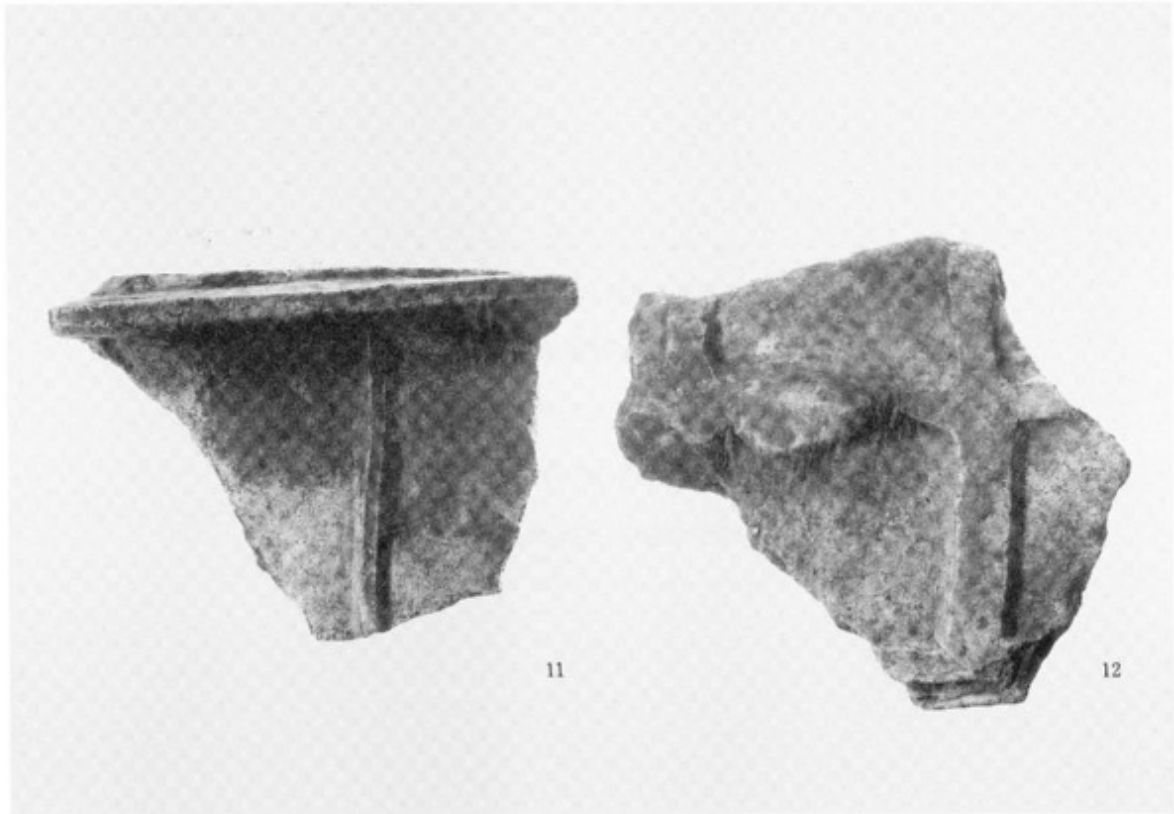
9

10



峯垣内古墳採集埴輪（付載４）

六地蔵古墳出土埴輪（付載４）



陶棺（青少年教育センター所蔵・付載２）

大東市埋蔵文化財調査報告第１集

寺川・北条遺跡発掘調査報告書

1987年12月25日発行

発行　大東市教育委員会

印刷　株式会社　中島弘文堂印刷所